静岡県博物館協会

研究紀要

第 29 号



平成17年度

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会 研究紀要 第29号

塔(磐田市)
静岡県専勿宿岛会 研究记要投高規定
特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会

勝間田院内(修験者・陰陽師)かっま たいんない とその資料

袋井市立浅羽郷土資料館 山本 義孝

はじめに

院内(印内)とは

で、彼らは集住し、目的に応じて移動させられた。で、彼らは集住し、目的に応じて移動させられた。はいう呼称で括り、大地の開発に先駆け主に地祭を中心には、な祭祀・芸能を行なわせたと推定される。結界の内(印内)の様々な祭祀・芸能を行なわせたと推定される。結界の内(印内)の後々な祭祀・芸能を行なわせたと推定される。結界の内(印内)の後々な祭祀・芸能を行なわせたと推定される。結界の内(印内)の後々な祭祀・芸能を行なわせたと推定される。結界の内(印内)の形成は戦国期の今川氏による領国内の宗教者統制と密接に関わると推定され、領国内の維護に関わる。

を質していって。 当山派修験・公家の土御門家配下の陰陽師・万歳、一部は百姓へと当山派修験・公家の土御門家配下の陰陽師・万歳、一部は百姓へと年間を境として本山・本所による組織化が進み、醍醐三宝院配下の 近世期になり、幕府による宗教者統制が進むと分散し始め、元禄

まるが、熊野別当弁正という人物は実在しない。しかし、弁常以降

初代弁常は紀州熊野那智山出身で承

の系譜は正確に記されており、

と末裔の系譜が明らかになっている。間田、榛原、懸河」と記しており、筆者の調査によってその所在地の所在を「気加、笠井、天竜、河井、飯田、大淵、笠原、河村、勝年(一五八二)に家康が裁許状を出した遠江国内十一カ所の院内村文化二年(一八〇五)頃成立した地誌『掛川誌稿』には天正十一

一 勝間田院内に関する資料

がある。 がある。 の資料、泰善寺が保管する旧末寺の朝生村建得寺過去帳など師関連の資料、最明寺地区の十七夜観音堂の仏像、桃原村の修験者・陰陽の資料、最明寺地区の十七夜観音堂の仏像、桃原村の修験者・陰陽

(1) 藤浪家の資料

応元年(一六五二)に鹿島神社に入院したとある。

二年(一八四五)没)という系譜が確認できる。院寿賢(享和二年(一八○一)没)─大先達法印学宝院長賢(弘化(一七六○)没)─智宝院実賢(寛政四年(一七九二)没)─智徳院玄常(享保十四年(一七二九)没)─知徳院滋賢(宝暦一○年この資料によって行学院弁常(元禄三年(一六九○)没)─学宝

特筆される。
特筆される。
特筆される。
特筆される。
一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年し、文政三年(一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年し、文政三年(一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年し、文政三年(一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年し、文政三年(一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年し、文政三年(一八二〇)以降文政七・八・九・十年、天保十二年

の家の格の高さを伺うことができる。 藤浪家に嫁いだ妻の出身を見ると、近隣の庄屋クラスであり、こ

料である。

料である。

本語・大学祖藤原代々神璽」は鹿島神社の別当を代々務めた藤賀料2「先津祖藤原代々神璽」は鹿島神社の別当を代々務めた藤道料2「先津祖藤原代々神璽」は鹿島神社の別当を代々務めた藤道料2「先津祖藤原代々神璽」は鹿島神社の別当を代々務めた藤

衛門に加えて川崎村・柏原村・植松村・下庄内村・堀切村・大磯一七)に懸河城主安藤帯刀直次が本願となり、氏の同心衆、林田茂②鹿島神社棟札類【図1・2】は2点あり図1は元和三年(一六

とを証明する。
とを証明する。
とを証明する。
を証明する。
を証明する。
を証明する。
を証明する。
を証明する。
を記言のをである。
を記言のをである。
を記言のものである。
を記言のものである。
を記言のものである。
を記言では、
とを証明する。
とを証明する。

所領二万八千三十石で佐夜・榛原の二郡を所領した。と、これに従い紀伊田辺に移ることになる。この間、二年六ヶ月、整備に尽力する。しかし、早くも天和五年に頼宣が紀州に転封する将になるに及んで安藤直次は元和三年に懸河城主となり、川崎港の彼は家康の息子徳川頼宣の重臣で、頼宣が遠江国を賜り、遠州少

を溯ること三十五年前の記録となる。から記され、しかも入院が承応元年(一六五二)であるから、それの名が記されていること。現存する藤浪家の過去帳類が行学院弁常この記載内容で注目しなければならないのが、別当として学宝院

図2は鹿島神社の御宝殿を再興したときの奉加帳で、年代が明記をられたという記載はこれらの資料からみても信憑性が高いものと考にないないが「別当権大僧都行覚院」とあり、あるいは行学院弁されていないが「別当権大僧都行覚院」とあり、あるいは行学院弁されたという記載はこれらの資料からみても信憑性が高いものと考られたという記載はこれらの資料からみても信憑性が高いものと考されていないが「別当権大僧都行覚院」とあり、あるいは行学院弁されていないが「別当権大僧都行覚院」とあり、あるいは行学院弁されていないが、

「先祖代々血脈」から天保十二年時のものであることがわかる。
「先祖代々血脈」から天保十二年時のものであることがわかる。
でいる。縦三二センチ、上幅九センチ、下幅八センチ。
学宝院」と墨書している。縦三二センチ、上幅九センチ、下幅八センチ。
学宝院」と墨書し、裏面は丸に醍醐寺御印、右隅に「遠州榛原郡川学宝院」と墨書し、裏面は丸に醍醐寺御印、右隅に「遠州榛原郡川学宝院」と墨書し、裏面は東に醍醐寺御印、右隅に「遠州榛原郡川学宝院」と墨書し、裏面は東に関助が大峰修行(入峰)を行ない。
であることがわかる。
である京都醍醐三宝院の門跡が大峰修行(入峰)を行ない。
の法頭である京都醍醐三宝院の門跡が大峰修行(入峰)を行ない。
であることがわかる。

් ි

できる。 修験者に限られており、学宝院の修験者社会での位置を知ることが観」と呼ばれた。このような供札を付けることができたのは役付の軍の上洛、朝鮮通信使の上洛と門跡の大峰修行の三者が「都の三壮この時に都大路を三〇〇〇人規模の山伏が行列を組み練り歩く。将この時に都大路を三〇〇〇人規模の山伏が行列を組み練り歩く。将

(全長が四九・五センチある。刀身の四面に薄く「日本鍛冶祖師(右) 一の銘が刻まれている。もとより五郎入道正宗の作でも元弘元年(一の銘が刻まれている。もとより五郎入道正宗の作でも元弘元年(一の銘が刻まれている。もとより五郎入道正宗の作でも元弘元年(一の銘が刻まれている。もとより五郎入道正宗の作でも元弘元年(一の銘が刻まれている。もとより五郎入道正宗の作でも元弘元年(一一〇例近くも存在する。しかも楠公が活躍した近畿地方に殆んどなら、静岡県には最多の五振(うち、一振は楠公ゆかりの湊川神社にく、静岡県には最多の五振(うち、一振は楠公ゆかりの湊川神社にく、静岡県には最多の五振(うち、一振は楠公ゆかりの湊川神社にく、静岡県には最多の五振(うち、一振は楠公ゆかりの湊川神社にく、静岡県には最多の五振(うち、一振は楠公ゆかりの湊川神社に、 一個公所持兜割の太刀【写真1】は刀身が四二・五センチ、鞘の全長が四九・五センチある。別作年代は楠公崇拝が盛んとなる近世前期以降であろう(徳川光圀による湊川建碑以降軍記などで楠公が評価されるようになる)。

ら中葉にかけて描かれたものと推定される。の間に祀っている。これが事実なら、この曼荼羅は十七世紀前半か持兜割の太刀、石臼と共に持参したと伝え、年頭にはこの三点を床行学院弁常が紀州那智山から承応元年に入院したおり、④の楠公所

とある。作品の全体絵像は、和歌山県新宮市の旧妙心寺本に類似す型で、渡海船の帆には「南無阿弥陀佛」、鳥居額には「日本第一」方に黒衣姿の僧が二列斜めに連なる。渡海船と曳帆船の繋ぎ方は縦船の描写を手がかりにすると、鳥居中央に三人の渡海僧が並び、後る。諸本の分類指標として、補陀落渡海船とその後方に連なる曳帆当本を含め、これまでに那智参詣曼荼羅は三一本が確認されてい

しかも那智出身の修験者であることが特筆される。 当本のように、もたらされた由来が伝わるものは極めて少なく.

ったと考えられる。一王子権現の本地仏を現し当山派修験学宝院(藤浪家)の本尊であ一王子権現の本地仏を現し当山派修験学宝院(藤浪家)の本尊であ部を一木で作り、膝で別材を継いでいる。近世期のもので、熊野若⑥十一面観音坐像【写真3】は像高二九・五センチ。頭部及び胴

もの。縦一六センチ、幅一・八センチ。 2点目は種字三字を刻んだいる。縦二三センチ、幅七・三センチ。 2点目は種字三字を刻んだ聖観世音菩薩御供袋 七月十三日ヨリ 十七日マテ 鹿島」と彫られて聖観世音菩薩の供養時のもので「入佛供養務めた鹿島神社本地仏、聖観世音菩薩の供養時のもので「入佛供養

(2) 十七屋観音堂の資料【写真6】

手観音の鎮守が白山権現で、両者は本来一体の関係であった。野十二所権現の二社を合祀し、白野神社と名乗るようになった。千祀る十七夜観音堂が存在する。明治初期に白山権現に熊野権現・熊最明寺地区の丘陵上には白野神社が置かれ、傍らには千手観音を

が別当を務めたものと推定している。 が別当を務めており、この十七夜観音堂も後述する桃原村の修験者 存するものがある。院内以外でも管見に及ぶものは全て当山派修験 至菩薩を祀る)には二十三夜堂が存在したことがわかっており、現 至菩薩を祀る)には二十三夜堂が存在したことがわかっており、現 は密接に関わっており、河村院内・大淵院内・飯田院内には十七夜 は密接に関わっており、河村院内・大淵院内・飯田院内には十七夜

頭に遡る作品ではないだろうか。 に遭っており背面の傷みが激しく炭化する箇所が見られる。近世初に遭っており背面の傷みが激しく炭化する箇所が見られる。近世初観音像は木彫の千手観音立像で、像高は九十八センチある。火災

(3)桃原村の修験者・陰陽師関連資料

村内の宗判寺院は磐田市匂坂に所在する岩田山増参寺(曹洞宗)の牧之原市勝田の桃原(もんばら)は明治九年まで桃原村と称し、

集住した場合、 ることである。 は桃原に隣接する切山村陽向院の檀家であった。宗教者が村落内に 末寺で、桃源山瑞昌院である。しかし、修験者・陰陽師等の宗教者 他村の特定寺院と檀那関係を結ぶことは良く見られ

抜粋したもの。この時村上家の当主は丹常院という院号を名乗り家 族全員が陽向院の檀家であったことがわかる。 3は天保一五年(一八四四)の「門原村宗門人別改帳」の下書きを 資料3・4は桃原で戦後まで「法印」と呼ばれた村上家の文書。

いで、特定の寺社に関与していない末端修験はこのような途を選ぶ ことが一般的であった。 4は明治六年(一八七三)三月に浜松県令宛てに出された還俗願

帳から桃原村には複数の土御門配下陰陽師が存在したことがわか られており、この状況を伺うことのできる資料である。筑後の時代 に後者の途を選択し、「元法印」と記されている。筑後以外に過去 験者になるか、公家の土御門配下として陰陽師となるかの選択が迫 を受けずにいた院内の末裔は、京都の醍醐三宝院門跡配下として修 下陰陽師の一般的名乗り(仮名)で、元禄年間を境にそれまで統制 (一六九五)に亡くなった桃原村の筑後、この名乗りは土御門家配 5・6は「陽向院過去帳」の修験者・陰陽師の抜粋。 しかも、筑後の父は権大僧都大越家職を持つ修験吉祥院道契で 元禄八年

ことがわかり、その中に最も存在を確認しにくい陰陽師が含まれて めた宗教者は隣接する桃原村の修験者であったと推測する。 いることは実に貴重なことである。最明寺十七夜観音堂の別当を務 これらの資料から、 勝間田院内の末裔が桃原村内に集住していた

4 朝生村建得寺に関する資料

は天明八年(一七八八)に建得寺住職潜宗によって纏められた過去 現在は廃寺となり、その過去帳が泰善寺に保管されている。資料7 朝生村には村内の宗判寺院として泰善寺末の建徳寺が存在した。 で、この時点では寛永十四年(一六三五)に亡くなった権大僧都

> 事例といえるだろう。 鎮守熊野権現社の祭祀に深く関わっている。これは院内が還俗した た。しかし、村内では「法印」と呼ばれ続け明治に至るまで建得寺 杉家は蓮乗を限りに子孫は還俗し、百姓として朝生村で生活を送っ 過去帳では修験者が家祖であること理解ができなくなっている。本 されている。しかし、資料8の明治十一年(一八七八)纏められた 大越家極楽院蓮乗法印は(本杉)彦左衛門の先祖であることが明記

期まで存在したが、これらは別の機会に紹介したい。 松村には竜眼山熊野権現社別当を務めた当山派修験円覚院が明治 この他、泰善寺過去帳には八名の修験者名が記載されている。

おわりに

きいのであろう。今後の課題としたい。 集団には見られない特徴である。勝間田が置かれた地理的要因が大 院内の特徴は、熊野信仰と密接に関わる点であり、他の遠江の院内 陰陽師である。彼らは地域における民間信仰の担い手であり、これ が地域史の中で位置付けられなかったのが、院内に関する修験者・ に関する理解がなければ、地域に根付いた歴史は描けない。勝間田 これまで、関連資料が認識されなかったことから、その存在自体

には貴重な資料の提供をいただいた。文末に明記し感謝申し上げた な協力をいただき。藤浪元一郎、 資料収集にあたっては旧榛原町文化財保護審議会諸氏から全面

参考文献

拙稿「遠江国十一院内の比定」『静岡県博物館協会研究紀要』 桐田榮『川崎港とお船神事』榛原町教育委員会 一九九三年 「陰陽師と山伏_ 一号 静岡県博物館協会 一九九八年 『陰陽道の講義』嵯峨野書院 二〇〇〇年

『補陀落渡海史』 法蔵館 二〇〇一年

大津児屋根尊廟斎熊野別當辨正十五代孫 本国紀州無漏郡熊野那智山 承應元重正月十日入院 元禄三年東十二月九日薨ス 治世二十七年 天保十二年丑年迄 百五十二年ナル 松間院音弌房禁壽大姉 行學院妻宝永六宣五月三日死去 治世四十六年 學寶院玄常 生在當国菅ケ谷村一万宮神主 藤浪摂津守第行學院養子 京保十四年宣十二月十一日死去 治世六十六年 文政十一年百年忌 天保十二年丑年迄百十三年 末日院 礼佛房妙音 玄常妻生在下庄間 名主枝村助左衛門娘 元禄九萬十月二十日先死	資料1 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
十十年 中華。 中華。 中華。 中華。 中華。 中華。 一十二年 十二年 十二月二十四日死ス 明和二年。 中華。 中華。 中華。 中華。 中華。 中華。 中華。 中華	宝曆十 _{度是} 十二月三日薨行年 知徳院滋賢 玄常嫡子 同村鳥居松何某娘 同村鳥居松何某娘
海心院賢明随恵 長賢妻 生在川尻村 石橋清五郎より嫁ニ 来ル 萬延元年 _{集単} 八月朔日薨行年七十 有三歳 玄常法印娘 仙林貞家禪定尼 協賢法印姉蛭ヶ谷村紅林氏孫左衛 門妻嫁 電暦六丙五十二日死ス 二 滋賢法印 三 須教院直營隋廉信士 三 須教院直營隋廉信士 三 須教院直營隋廉信士 三 須教院直營隋廉信士 三 須教院直營隋廉信士 三 新五 春光智月信女 相原町新谷辻半助妻嫁	歌化二 ^ス 世年三月朔日薨年五十有 寛政十一年巳未年 生年十二歳入 文政三 _{康辰} 年再入峯並文政七 八九十年ト入峯又天保十二年酉年 入峯 入峯
安永五甲八月三日死 幼冬童子 寛延元辰十一月二十七日 夏延元辰十一月二十七日 優婆塞童子 優婆塞童子 優婆塞童子 優婆塞童子 優婆塞童子 個立院深營常頓信士 工州江戸元飯田町俗名善兵衛嫡子 文化五馬尼二月十四日死ス 佛行妙信禪定尼 紅月妙光信女 月叟空山信女□□□□□□ 正大先達自観法印和尚位	真相妙善 實賢姉□中父姑卜号 妙雲智蓮大姉 妙雲智蓮大姉 家本 等六

資料2

先津祖明治十壱戌寅年第五月記

藤原代々神璽

弘化二年²²第三月九日 観常殿再長賢殿再記 文化九年⁴¹第二月十三日

訓導藤浪學一郎曰代リ 明治十壱年^成第五月九日 祠堂

行學院妻 治世四十六年

藤浪ゑい 神璽位 松間院ノ事

文化九弘化二寫

唱ル名ヲ神葬祭尓改テ明治三乗ヨリ神道職尓相成候故明治三乗ヨリ神道職尓相成候故明治三乗ヨリ神道職尓相成候故明治三共コに神道職尓相成候故

尓印可被成修也「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」「一個では、」」<

系図

行學院辨常 本国紀州無漏五代孫 祖

熊野那智山

藤浪ゑい 神璽位 如弌理ノ事

承應元辰正月十日入院 治世廿七

神葬祭政 治十一年戊寅迄 百八十九年成 元禄三庚午年十二月九日薨ス 明

治十一年戊寅迄 百七十年ニ成ル宝永六㎡年九月三日死去ス 明松間院音式房榮壽大姉松間院辞式 神璽位 行學院乃事

掛川宿二藤町甚太夫娘

第 行學院養子 管ヶ谷村 一万宮神主藤浪摂津守學寶院・玄常 生在當国相良在

藤浪玄常 神璽位 學法院ノ事治十一年戊寅迄 百五十年ニ成ル治十一年戊寅迄 百五十年ニ成ル治世六十六年 明章 不學修塾子

玄常妻

玄常妻

玄常妻

文常妻

文常妻

文常妻

文常妻

文常妻

元禄九萬千月廿日先死ス 明治 十一戊寅年迄 百八十三年二ナル十一年戊寅迄 百八十三年二ナル 如 理 榮 比 尼 生在同村本村 鳥居松 某娘玄常後妻

本如真心大姉

実賢後妻生在

藤浪かね 神璽位 妙雲円鐘ノ事十一年戊寅年迄 百十三年ニ成

光二、智清大姉 滋賢妻生在當藤浪滋賢 神璽位 智徳院ノ事行年七十有三歳 治世卅二年十一戊寅年迄 百十九年成ル十一戊寅年迄 百十九年成ル

二音 年再入峯 での 大田 中田元 中田十二月廿四日死ス 明明和元甲申十二月廿四日死ス 明明和元甲申十二月廿四日死ス 明明和元甲申十二月廿四日死ス 明

明和三萬成九月十二日死ス 明治 寛政四至五年九月廿三日薨 明治 十一戊寅年迄 八十七年成ル 年五十有二才 治世三十三年 藤浪實賢 神璽位 智宝院ノ事 勝つ 名主大鐘太左衛門娘

藤浪志ん 神璽位 本如真心ノ年四十壱歳 一年戊寅年迄 八十四年ナル 一年戊寅年迄 八十四年ナル 明治十寛政七元皇正月 日死 明治十

事

大姉子 智徳院壽賢 實賢嫡子 円鐘

正大先達法卯學寶院長賢藤浪壽賢 神璽位 智徳院ノ事行年三十八才

又天保十二年酉年入峯 文政三庚辰年再入峯尓文政七八九 十年ト入峯 實賢二男 真心大姉子

原年入峯 東年入峯 中華 に 大 先 達 法 院 學 寶 院 春 賢 藤 浪 ゑ い 神 璽 位

/	/	t	~ 奉加長	\	\	\
	金壱分	金弐分	六百五拾弐文	三貫三百七拾弐文	四貫五百六拾	弐百六拾七匁
○右衛門	引了 六郎右衛 さいず町	新屋村	植枩町	才賀町	川崎村	堀切村
四両百文	百 百 夕 匁	百匁	百匁	百匁	四百匁	金一分
冶	安 釣学院	青池 六兵衛	半左衛門	大磯九郎右衛門	無所案 猟師	上庄
飯嶋道感居士	願主 明主 明主 明主	師	矢部与左衛門	藤原朝臣家長	當社代々之大工平田村	別當権大僧都行覚院
					_	裏



図 2 鹿島神社棟札

図1鹿島神社棟札



写真1 楠公所持兜割の太刀

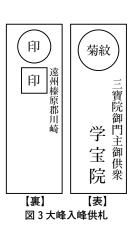




図 4 藤浪家本 那智参詣曼荼羅 (トレース図)

- ①関所 ②浜宮王子社 ③補陀落山寺 ④渡海船 ⑤市野々王子社 ⑥二瀬橋 ⑦那智川
- ⑧天神社 ⑨俵船 ⑩滝見寺 ⑪釜 ⑫大門 ⑬関所 ⑭多富気王子社 ⑮振ヶ瀬橋
- ⑩井戸 ⑪滝の拝殿 ⑱生貫杉 ⑲千手堂 ⑳経塚
- ②霊光橋 ③山上滝宮 ◎火炎 ◎文覚の滝 ⑤日輪(太陽) ⑤降石 ⑥尊勝院
- ⑪三重塔 ⑪滝宮 ⑪ 証誠殿(家津御子大神) № 中御前(御子速玉大神) ⑪ 西御前(熊野夫須美大神)
- ⑩若宮(天照大神) ◎八社殿 ◎如意輪堂 ®拝殿 ◎月輪(月)
- ®妙法山 阿弥陀寺 ⑤和泉式部 ①比丘尼 ⑪竜と子供 ⑩滝衆 ⑩文覚
- ②木挽きの行事 ②上皇 ②御師



写真 6 千手観音(十七夜観音堂)

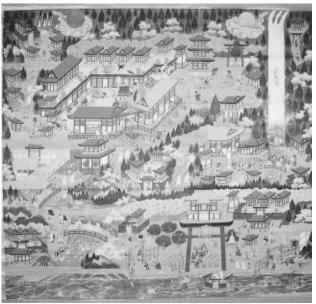


写真 2 藤波家本 那智参詣曼荼羅



写真 5 版木

写真 4 大峰入峰供札



写真 3 十一面観音坐像

たか 浜松県権参事石黒務明治六年三月廿八日 聞届候事 前書願之通り相違無御座間奥印仕候以上林浜松県令殿 畏候処私義不才智旦営世之目的等更ニ無之右者今般修験宗御廃山本宗江帰入被仰出奉 外壱人 去六月 病死仕候 候間帰農仕度此段乍恐以書附奉願上候以上 乍恐以書附奉願上候 メ四人内 男壱人 女三人 「天保十五年三月 仙明 三十四歳 三寶院御門主御末派天長寺帳下 丹常 同宗旦那 同宗旦那 禅曹洞宗陽向院旦那 壱歳 明治六酉年三月五日 文化十四年十一月五日當郡 西京三宝院末當山修験丹常院 青池村於天長寺得度 遠江国榛原郡上庄内門原村 女子 此者當正月出生仕候 門原村宗門人別改帳」 右村名主 元丹常院仙明 改 こま 女房 仙明倅 木下半兵衛 飯塚銀次郎 村上重平 なみ 泉学 \equiv 元法印 明和四年正月廿二日 鉄山了玄善男 明和七年十月廿日 延享元年九月十六日 雲郷了千禅定門 資料6 明治廿一年三月廿四日 (後略) (前略) 卯ノ八月十一日 元禄四年七月二日 山更ト歯大徳 天明七年七月十五 現嚴本成善男 実相貞印善女 文化五年正月四日 梅相妙花信女 天保四年正月四日 正屋妙中信女 権大僧都大越家吉祥院道契清達上座 同(元禄)八乙亥四 元禄十年九月廿一 元禄八年四月廿五日 香屋妙薫禅定尼 元禄十一年六月廿一日 右過去帳捨六名相改申候也 陽向院過去帳 切山陽向院過去帳 日 日 月 廿 切山村 記内事 記内母 桃原筑後親父 Ŧī. 記内事 吉祥院妹 筑 桃原嘉平 嘉平内 桃原嘉平父 桃原喜内父 吉祥院母 後妻 日 桃原 陽向院 村 筑 後 文政十二年ニ月三日 明和二年六月十六日円室貞鏡善女 是ノ家従元代々彦左衛門ト ク是成同心上座先祖也 泰善寺過去帳ニ彦左衛門先祖ト印シ有リ全本杉彦左衛門先祖タル者ハ議仙成同心上座 他国ヨリ来リ滞留致シ死去仕候ト意得タリ 是人ノ出生何方者カ不明本杉彦左衛門方エ 権大僧都大越家極楽院蓮乗法印 寛永十四丑年正月二十二日 此ノ過去帳調今到明治十一戊寅年九十一 天明八戊里三月日 **資料7** 享保廿一年二月三日 文化元年三月五日 放一浄光禅女 二改正仕也 「過去帳 一屋了性信女 一寅年二百四十一年 静谷分過去帳 相了無禅門 潜宗代 彦左衛門先祖也 寛永十四年丑正月二十二日 権大僧都大越家極楽院蓮乗法印 兵蔵内 桃原村平太夫母 桃原村兵蔵 湛定院母 申 死ス今到明次 来リ候ニ付

年月

- 19,23,26,27,30,8/1,2,3,4,5,6,7,8,10,11,12,13,14,15,17,19,21,23,24,25,26,28,29,9/2,4,5,6,8,9,11,18,22,25,29)
- 8/3 鷲津本興寺虫干し(-10)。(新報8/1)
- 8/5 安田呉竹富士登山、還暦及び富士登山40回を記念して百画揮毫。(新報8/6)
- 8/11 静岡県教育品展覧会於静岡師範学校・城内東尋常高等小学校(-20)。 (新報5/2.8/12.17)
- 9/ 近藤浩一路《茶摘》《九里峡》中村岳陵《梳髪》杉本宗一《憩ふ女》 第13回院展出品。(出品目録)
- 9/ 曾宮一念《梨畑道》《田園晩秋》《アネモネ》《青色の静物》《グレキシニア》第13回二科展出品。(出品目録)
- 9/25 東西諸大家美術品展覧会於県教育会館(-27)。(民友9/21.26)
- 10/ 静岡新報創刊35周年記念読者福引抽選外読者に山元春挙《大黒天》。 (新報9/18)
- 10/3 静岡県主催第2回織物染色講習会於志太郡青島小学校講堂。(民友9/9)
- 10/9 山田長政記念塔地鎮式。(新報10/10)
- 10/14 瀬尾南海揮毫会於小山町室臥氏宅。(民友10/15)
- 10/ 細井繁誠《路地》澤田政廣《影》第7回帝展入選。(出品目録)
- 10/20 静岡工芸協会第1回作品展覧会於静岡商品陳列所 (-25)。 (民友10/15.16.17.19.22)
- 11/12 郷土資料展於葵文庫(-14)。(民友10/19)
- 11/21 白薇会展覧会於静岡商品陳列所 (-23)。(新報11/20.21、民友11/18,23) 佐伯米子、遠山五郎、塚本茂、近藤光紀、鈴木保徳、里見勝蔵、鶴田吾郎、 鈴木良三、中村彝、鈴木信太郎、石橋武助、寺内萬治郎、耳野卯三郎、鈴木 金平、伊藤成一、堀進二、野田半三、曾宮一念の特別陳列。
- 11/20 沖六鵬《誠忠詩歌屏風》完成披露。(民友11/23)
- 11/24 浜松工業試験場春夏物図案展覧会於遠州織物組合。(新報11/26)
- 11/25 北村西望《橘中佐銅像》静岡到着。(新報11/26,民友11/26,27)
- 12/5 同上地鎮式。紆余曲折の後。誘致運動等については下記記事。 (民友2/28,5/4,7/25,8/18,10/3,5,,11/16,24,12/6,24, S2.2/19,22,23,3/11,新報4/18,5/4,11/5 S2.1/30)
- 11/ 小林観爾来静。(新報11/26)
- 11/27 日本少年指導会名士揮毫頒布会於教育会館(-29)。(新報11/15)
- 12/5 山本瑞雲《服部倉次郎像》除幕。(新報4/30,12/5,民友12/5)
- 12/ 現代大家絵画展 (新報12/5)

(68)

- 2/13 児童創作品展覧会於静岡商品陳列所·葵文庫他(-14)。(民友1/14)
- 2/ 青木新作《登り道》赤城泰舒(会員) 《秋景》《湖畔暮色》《伊豆山》《夏の景》《精進湖登山道》石川欽一郎《支那_江の滞船》《福州大橋橋畔》《福州河畔の廟》《福州の河岸》《支那福州蒼前山》小泉癸巳男《龍華寺へ行く道》水野以文《山の手風景》第13回光風会展出品。(出品目録)
- 2/ 栗田雄《冬日小景》《少女》《郊外冬日》第4回春陽会展出品。(出品目録)
- 3/6 安倍郡教育品展覧会於静岡商品陳列所・葵文庫講堂・安倍郡公会堂 (-7)。 (新報1/14,3/2,8、民友1/15,3/1,5)
- 3/6 俳画展覧会於静岡紺屋町楽雅堂(-10)。(民友3/5)
- 3/7 県教育会館開館。(新報3/7,8)
- 3/24 全国漆器展覧会於静岡商品陳列所。(新報3/15.30、民友3/26)
- 4/3 原崎一郎洋画展覧会於小笠郡堀の内。(民友4/3)
- 4/10 岡本一平漫画会於静岡倶楽部 (-12)。(新報3/31,民友3/30)
- 4/10 袴田勇、外波山竹史に入門の予定。(民友3/31)
- 4/11 静岡県下小学児童書き方展覧会於静岡商品陳列所(-13)。審査:沖六鵬、平岩 高暉。(民友3/2.4/13)
- 4/24 静岡尚美会漫画展於静岡商品陳列所 (-26)。池辺均他展示。服部亮英の揮毫。 (新報4/22.民友4/7.8.23)
- 4/25 山本瑞雲《松島十湖銅像》除幕。 (新報T14.10/23,T15.4/15,25,民友4/19,25) 山本瑞雲、28日まで滞在。《服部倉次郎像》制作依頼を受ける。 (新報4/30)
- 5/1 静岡清風会洋画展覧会於静岡商品陳列所(-3)。(新報4/23,30)
- 5/1 三島光潮会第2回美術展覧会於三島記念館(-2)。(民友4/27)
- 5/ 近藤浩一路《白雲無尽》中村岳陵《陸近し》赤城泰舒《暴れた海》《春光》栗 田雄《静物》松井昇《茶の萌む頃》《高原の秋》澤田政廣《星座》杉本宗一 《肖像》《裸婦》第1回聖徳太子奉賛美術展出品。(出品目録)
- 5/2 柏木俊一主宰春光会、白隠坦庵良寛等先賢遺墨と現代大家作品による 展覧会於三島魚半。(民友4/27)
- 5/5 和田三造、見付青年団旗を制作し披露。(新報4/30)
- 5/ 平井楳仙、静岡安田屋旅館に滞在。(民友5/20.新報5/21)
- 5/28 諸大家近作品展覧会於静岡商品陳列所 (-6/1)。(新報5/27,30) 中村秀吉の森山焼、珍重される。(民友5/22)
- 6/12 沼津美術協会主催新画清賞展覧会於沼津銀行。(新報6/10)
- 6/20 志太郡教育会展覧会於藤枝小学校(-25)。(新報4/23.6/18.22)
- 6/27 沼津美術協会漫画展覧会於大富館旅館部 (-29)。服部亮英、水島爾保布揮毫。 (新報6/16)
- 7/16 浜松工業試験場冬織物図案展覧会(-25)。(民友7/16)
- · 村本山雨楼『書画道』刊行。(民友4/2,13,19,24,28,29,5/6,7,8,9,28,29,7/3,6,7,10,14,

第3回春陽会展出品。(出品目録)

- 3/28 県立葵文庫開館。(民友3/29)
- 3/ 十大家妙蹟展観於浮月。(民友3/31,4/1,2,3,7,8,910,11,12) 谷文兆、渡辺崋山、椿椿山、高久霞崖、秦隆古、池大雅、頼山陽、田能 村竹田、貫名海屋、岡田半江等百二三十点。
- 4/ 鉄舟寺蔵久能寺経の調査。(民友4/14)
- 5/1 麗光会洋画展於静岡商品陳列所。裸体画撤回を命じられる。 (新報5/1、民友5/1,3)
- 5/15 静岡尚美会主催趣味の展覧会於静岡商品陳列所 (-17)。(民友5/15)
- 6/1 村本山雨楼、尾崎元次郎宅を訪問、蔵画を拝見する。(民友6/4,23)
- 6/6 静岡女子師範学校校舎移転祝賀児童美術展覧会。石井柏亭他も展示。 (民友6/7)
- 6/8 横山為邦、瑞龍寺に滞在し揮毫 (-19後数日)。(新報6/7、民友6/15,20)
- 6/13 美術木彫鋳金展覧会於静岡商品陳列所(-15)。高村光雲、静岡県出身後藤良、吉田芳明、大島如雲、沼田一雅、山下如雪、市岡紫雲、国方林三、中谷解古ら40名、二百余点を展示即売。(新報6/12,13,民友6/14)
- 6/ 小川龍彦の木彫、静岡尋常高校講堂落成式で注目される。(民友6/15)
- 6/ 静岡民友新聞岡崎社長、ギリシャ大理石彫像摸刻を展示。(民友6/17)
- 7/ 青木新作《道》第3回白日展出品。(出品目録)
- 7/ 鈴木秋亭《海棠に孔雀》全国特産品博覧会於香川県にて金牌。(民友7/9)
- 7/ 若山牧水半切揮毫会。(新報7/24、民友7/23)
- 8/8 巴紅窓会主催夏の写真募集展覧会於江尻海水浴場(-10)。(新報7/15)
- 9/ 近藤浩一路《長岡天神》《淀芋洗村》《三条大橋》《花見小路》《小町寺町》《一条戻橋》中村岳陵《童謡》杉本宗一《腰掛けた女》第12回院展出品。 (出品目録)
- 9/ 曾宮一念《冬日》《荒園》《晚秋風景》第12回二科展入選。(出品目録)
- 9/12 静岡高校白薇会第3回洋画展於静岡商品陳列所(-14)。(民友9/14)
- 10/ 赤城泰舒《山上湖》澤田政廣《太陽に向ひて》第6回帝展入選。
- 10/23 原崎一郎個人展覧会於葵文庫図書館講堂(-25)。(新報10/23.民友10/24)
- 10/30 朝倉文夫《和田三次郎翁寿像》贈呈於安倍郡茶業研究会。(新報10/28)
- 10/30 尚美会美術展覧会於静岡商品陳列所(-11/3)。(新報10/28)
- 12/5 牛窪二葉個人展覧会於浜松金井屋呉服店(-9)。(民友12/7)

大正15年

- 1/1 駿東郡下各小学校教員第1回作品展覧会於郡役所。絵画、塑像、手工芸品の3 類。(新報1/3)
- 1/18 三島神社宝物館着工。(民友1/19)
- 1/24 山崎鵜水展観於静岡屋形町神明神社。山崎鵜水来静中。(民友1/22)
- 1/ 石川欽一郎、第13回日本水彩画会展出品。
- 2/10 松蔭寺白隠禅師遺物展覧館地鎮式。(民友2/9)
- 2/11 栗原忠二送別会於三島竹葉亭。14日、再渡欧の予定。(新報2/13)

(66)

- 10/ 赤城泰舒《小児像》澤田政廣《銀河の夢》第5回帝展入選。(出品目録)
- 10/19 静岡新報清水支局主催素人カメラ大会於三保。(新報10/5,9,21)
- 10/30 虹霓会第6回展覧会於静岡物産陳列館(-11/3)。(民友10/30)
- 10/31 游於会第5回展覧会・小笠カメラ倶楽部印画展覧会於掛川高等女学校。 (民友10/4)
- 11/1 浜松市洋画協会展覧会・甲子日本画壇展覧会於五柱演武館 (-3)。 (民友10/11,11/1、新報10/21)
- 11/10 静岡新報清水支局主催素人カメラ大会展覧会於江尻倶楽部。(新報10/21)
- 11/ 栗田雄(会員)《曇り》《静物》《郊外》小泉癸巳男《港》《灯台》第6回日本創作版画協会展に出品。(出品目録)
- 11/16 浜松美術展覧会於浜松銀行(-22)。(新報11/19)
- 11/23 静岡伝馬町小学校図画展覧会。(新報11/21)
- 11/24 県下中等学校図画科研究会於静岡師範学校(-25)。23日より生徒作品の他、フランス作家15名の作品を展示。25日石井柏亭講演。(新報11/20)
- 12/ 村本山雨楼勅題創作画頒布会。(民友12/9,10)
- 12/15 浜松工業試験場図案部春夏向流行図案展覧会於織物組合。(新報12/17)
- 12/ 小野竹喬、一年ぶりに来静し、葵旅館に滞在し揮毫。(新報12/26)

大正14年

15

- 1/2 高橋雲亭次男行方不明となる。後大阪にて発見される。 (民友1/20,25.T15.6/17.新報T15.6/17.18)
- 1/10 沼津三小学校生徒合同図画手工展覧会(-11)。(新報T13.9/21)
- 1/10 京都図案協会主催東西図案展覧会於遠州織物同業組合事務所楼。(民友1/9)
- 1/17 静岡市小学校連合研究会図画部児童画の展覧会於静岡商品陳列所 (-19)。 (民友1/19)
- 1/17 巴紅窓会第1回印画展覧会於江尻倶楽部(-18)。(新報T14.11/12.17)
- 1/ 石川欽一郎《入江》《廟の前》《農家》《廃城》《駅道》第12回日本水彩画会 展出品。
- 2/ 赤城泰舒(会員) 《長岡の富士(一)》 《長岡の富士(二)》 《三津浜の富士》 《紫陽花》 《習作(パステル)》 《カーネション》石川欽一郎(会員) 《休息》 《浜辺》 《沼のほとり》 《埠頭》 岡野栄(会員) 《熱海にて》他6点、曾宮一念《静物》第12回光風会展出品。(出品目録)
- 2/5 浜松工業試験場第2回夏織物図案展覧会於遠州織物同業組合楼。(民友1/15)
- 2/27 荒木十畝来静。(新報2/27)
- 2/ 鈴木成畝作品展覧会。(新報T13.12/20)
- 2/28 村本山雨楼「続書画道」を静岡民友新聞に連載。(民友2/28,3/1,3,4,5,6,7,8,10,12,14,15,17,18,19,20,21,24,25,26,27,31,4/1,2,3,7,9,10,11,15,16,17,1821,23,24,25,26,28,29,30,5/1,2,3,5,7,8,9,12,13,14,15,16,17,19,20,21,22,23,24,26,27,28,29,30,31,6/2,3,4,5,6,7,9,12,13,14,16,17,18,19,20,21,23,24,25,26,27,28,30,7/1,2,3,4,5,7,8,9,10,11,14,15,16,17,18,19,21,22,23,24,25,26,28,29,8/1,2,4,5,6,22,25,26) 田中顕光他蔵画家訪問記を含む。
- 3/2 高橋雲亭帰静。鞄を一時紛失。(新報3/6)
- 3/ 柏木俊一《石山寺風景》《木枯の池畔》栗田雄《郊外初春》《冬の午後》

- 1/20 中村不折揮毫抽選於静岡顕光院。(新報1/10)
- 1/ 浜松商工学校カメラ倶楽部発会式及び印画展覧会。(民友1/18) 寺田渓水、震災以来帰郷中。画会開催。(民友2/7) 蘭契会書画展覧会。(新報T12.11/22)
- 1/ 大村西崖《観音像》完成。(新報1/22)
- 2/9 静岡女子師範学校生図案展覧会(-11)。農民美術と仏国名画複製展示。 (民友2/10)
- 2/15 小笠郡教育会図画手工研究会展覧会及び講習会(-16)。(民友1/10)
- 3/11 駿府刀剣会春季大会於静岡小櫛神社。(新報3/9)
- 3/ 柏木俊一《伊豆三島風景》栗田雄《麗日》第2回春陽会展出品。 中川一政《修善寺温泉》野島煕正《修善寺風景》の出品あり。(出品目録)
- 3/ 石川欽一郎《巴里のサンジャック》《ロンドンのテームズ川岸》《ロンドン の郊外》第11回日本水彩画会展出品。
- 4/ 《織田利三郎像》浜松高町半僧坊別院境内に計画。 (民友4/10.T14.6/18、新報4/9.T14.6/18)
- 4/ 栗原忠二帰国。
- 5/17 中島正貴個人展覧会於浜松五社演武館(-18)(新報5/16)
- 5/ 赤城泰舒、第11回光風会展出品。(出品目録)
- 5/27 村本山雨楼「書画道」を静岡民友新聞に連載。(民友5/27,28,29,30,6/1,3,4,5,67,8,10,11,12,13,14,15,17,18,19,20,21,22,24,25,26,27,28,29,7/1,2,3,4,5,6,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,22,9/3,4,5,6,7,9,10,11,12,13,1416,17,18,19,20,21,23,26,27,28,30,10/1,2,3,4,5,7,8,9,10,11,12,14,15,16,17,19,21,22,23,24,25,26,28,29,30,11/2,4,5,6,7,8,9,12,13,14,15,16,18,19,20,21,22,23,25,26,27,28,29,30,12/2,3,4,5,6,7,9,10,11,12,13,14,16,17,18,19,20,21,23,24,25,T14.1/7,8,10,11,13,14,16,17,18,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30,31,2/1,3,4,5,6,7,8,10,11,13,14,17,18,20)
- 6/7 素人写真印画展覧会於二俣町中町竹屋(-8)。(新報6/8)
- 6/14 岩田廣栄堂主宰絵画展於静岡商品陳列所(-16)(新報6/13)
- 6/ 青木新作《裏の風景》栗原忠二(会員)11点を第2回白日会展出品。(出品目録)
- 6/22 静岡新報スケッチ班撮影於静岡札の辻 (新報6/22)
- 7/6 岳陽刀剣会第2回大会於沼津浅間神社社務所(新報6/22)
- 7/ 建長寺管長菅原時保揮毫頒布。(民友7/18)
- 9/ 近藤浩一路《京都十題》中村岳陵《荒天睨鷲》《動相讃頌》杉本宗一《寂しき春》第11回院展出品。(出品目録)
- 9/14 静岡新報浜松支社主催浜名湖一周素人写真撮影大会。(新報8/28.9/17)
- 9/21 静岡高等学校絵画部白薇会第2回洋画展覧会於静岡商品陳列所。(新報9/18)
- 9/23 萩原石斎逝去。(新報9/25)
- 9/27 若山牧水半切画会於沼津東方寺(-29)。(民友9/23)
- 10/ 杉本宗一《指環》帝展入選。(新報10/13,15)
- 10/13 書画売立会於浜松玄忠寺。(民友10/11)
- 10/15 尚美会展覧会於静岡商品陳列所 (-20)。小倉右一郎、北村西望、建畠大夢、朝倉文夫、新田藤太郎、中島東洋等の出品。(新報10/14)

(64)

(出品目録)

- 3/4 《佐藤喜代蔵銅像》除幕式於浜名郡白須町。(新報3/8)
- 4/1 毒艸社第1回印画展於千代鍛冶。(民友4/2,3)
- 4/11 新田藤太郎《芝野栄七銅像》除幕式於鉄舟寺。(民友4/12,T10.12/12)
- 4/21 遠州織物組合主催織物展覧会(-25)。(新報3/18)
- 4/26 後藤粛堂講演於静岡市役所。新出の山田長政の軍船図を公開。(新報4/26)
- 4/30 《原田久吉銅像》除幕式於佐久間中部小学校。(新報4/27.5/5)
- 5/1 全国染織展覧会於浜松東小学校。(新報5/2)
- 5/4 山名屋呉服店主催素人写真展覧会於山名屋及び静岡商品陳列館(-)。 (民友4/18,5/1,4,5,)
- 5/4 静陵漆芸若葉会記念展覧会於静岡商品陳列館(-6)。(新報5/5)
- 5/ 柏木俊一《初夏風景》《晚秋池畔》栗田雄《郊外陽春》第1回春陽会展出品。 (出品目録)
- 5/19 高畠茂雄個人写真展覧会於静岡商品陳列館。(民友5/19)
- 6/ 倉立公富(桂石)田子浦、焼津に滞在の予定。(民友5/17)
- 6/ 栗田雄(会員) 《さか路》《小駅》《冬の公園》小泉癸巳男《鐘楼》《九段》 《あたご山》《浅草》《帝劇》《文楽のおその》第5回日本創作版画協会展・ 京都に出品。(出品目録)
- 8/5 浜松工業試験場第2回冬物図案展覧会。(新報8/5)
- 10/ 曾宮一念《夕日の路》第10回二科会入選。(出品目録)
- 10/22 静岡特産工芸品展覧会於静岡東尋常小学校(-26)。(民友8/7、新報8/22)
- 10/22 静岡市教育会主催教育品展覧会於静岡城内東小学校(-25)。(民友10/23、新報8/22,10/23)
- 10/27 飯塚聖林。月刊の機関誌『旭東の芸術』創刊。(民友10/22)
- 10/ 近藤浩一路《鵜飼六題》《山百合》中村岳陵《昏光経》 第10回院展出品。(出品目録)
- 10/31 尚美会展覧会於静岡商品陳列館(-11/4)。(民友10/31)
- 10/ 静岡市出身の刀工笠間繁継、5月より献上の剣を制作。(新報5/12)
- 11/3 復興書画展覧会於三島飛鷺青楼。(民友11/6)
- 12/1 静岡新報社懸賞写真印画第1回展覧会於静岡新報社(-3)。於浜松支局(12/8-9)、 於掛川叢文堂静岡新報掛川支局(12/15-16,19) (新報11/12,14,15,18,20,25,29,12/1,2,3,4,5,7,8,11,12,13,16)
- 12/10 山田長政の軍船図、浅間神社に奉納される。(新報12/4.10)
- 12/14 被災画家中村不折他の作品展覧会於浜松メソヂスト教会(-15)。(民友12/8)
- 12/15 静岡新報社主催写真印画展覧会於掛川支局(-16)。(新報12/19)

大正13年

17

- 1/ 下村観山、昨12月28日より天城山にて猪狩。(民友1/3)
- 1/8 県立浜松工業試験場主催第1回夏織物応用図案展覧会於遠江織物同業組合事務 楼。(民友1/8)
- 1/13 静岡商品陳列館主催参考品展示会於静岡商品陳列所(-17)。(新報1/9)

- 8/28 静岡市教育会主催自由画教育講習会於静岡商品陳列館(-30)。講師:千葉師範 学校附属主事手塚岸徳。(新報6/5.民友6/4)
- 9/ 近藤浩一路《番小屋》《案山子》中村岳陵《緑陰嬉遊図》杉本宗一《青春》 第9回院展出品。(出品目録)
- 9/ 曾宮一念《さびしき日》第9回二科展入選。(出品目録)
- 9/9 県立高等女学校製作展覧会 (-11)。自由画を含む。(民友9/9)
- 9/9 静岡師範学校附属小学校創作工夫展 (-11)。(民友9/9)
- 9/21 緑会主催菊池寛講演会於静岡物産陳列所。(民友9/3)
- 9/26 新しき村静岡支部主催泰西美術複製展覧会於静岡物産陳列所(民友9/3)
- 9/27 静岡物産陳列所職吏員及新聞記者連合茶話会。(民友9/29)
- 10/1 農商務省第10回工芸品展覧会、漆工芸品で静岡より5組6人入選。(新報10/4)
- 10/ 静陵図案会主催図様講習会を月例2.3日、新通小学校で開催する。(新報10/4)
- 10/ 服部四郎《玉楠の樹蔭》澤田政廣《沃土》第4回帝展入選。(出品目録)
- 10/28 尚美会第9回展覧会於静岡物産陳列所(-11/1)。(新報10/28)
- 10/30 書道展覧会於有度村学校。出品点数250点、揮毫及び頒布。(新報10/29)
- 10/30 学制五十周年記念展覧会於袋井町尋常高等小学校(-31)。(民友10/28)
- 11/2 浜松工業試験場浜松工業学校展覧会。(新報11/2)
- 11/ 中島正貴《桜草》《蛙鳴く頃》《赤土の塔》《沼のある風景》《南九州の於 けるスケッチ》(イ)~(チ) 《浜松の町はづれ》第9回草土社展出品。 (出品目録)
- 11/10 古知電気商会主催県下写真競技展覧会於山名屋(-16)。(民友11/11)
- 11/22 虹霓会第5回展於静岡物産陳列所。(民友11/21)
- 12/3 淡山赤壁画会於金谷医王寺。(民友12/6)
- 12/6 小野鵞堂逝去。(民友12/8)

大正12年

- 1/5 庵原郡教育品展覧会於興津町小学校(-7)(新報12/25.1/8)
- 1/ 京都図案協会主催春夏物図案展覧会於遠江織物同業組合。(民友1/11)
- 1/ 金原明善銅像建立の計画。(新報1/11)
- 1/21 県立巴高等女学校展覧会(-22)。習字、図画、写真、手工芸品、裁縫等(民友1/21)
- · 和田英作、静岡城内東尋常小学校訪問。(民友2/7)
- 2/ 石川欽一郎《巴里》《倫敦郊外》第10回日本水彩画会展出品。
- 2/6 宝台院に間借りしていた偽画家石島竹涯こと米田政楠、静岡駅で逮捕。 県内務部長の名刺を偽造。4/10懲役10年の判決。 (民友1/25,2/7,3/5,25,4/11,新報2/18)
- 2/7 岩谷小波童話会於静岡師範学校。(民友2/7)
- 2/11 武石弘三郎《高山仰止銅像》除幕式於浜松元城高等小学校。(新報1/28,2/10,13)
- 3/ 赤城泰舒(会員) 《風景A》《風景B》《風景C》《雪景》《雪景(パステル)》《鶏頭》岡野栄(会員) 《林間の残雪》《野菊の畑》《熱海の丘》 《山村の入り口》小泉癸巳男《うららかな日》曾宮一念《庭先》《春浅き裾野》《赤き花》水野以文《丘》《三澤の森より》第10回光風会展出品。

(62)

- 12/4 有信会主催図画展覧会於静岡師範学校。(民友12/5)
- 12/ 新田藤太郎《芝野栄七像》、鉄舟寺に建立。明年2月除幕予定。 (民友12/12,T12.4/12)

大正11年

- 1/ 玉村万久斗、荒木柳城、由比の原邸に滞在揮毫。(民友1/23)
- 1/14 静岡物産陳列館廃品即売会(-15)。(民友1/14,17)
- 1/16 巴カメラ会展覧会於江尻倶楽部。(民友1/28)
- 1/20 古知電気商店写真機部主催全国写真展覧会於静岡物産陳列館。(民友1/21)
- 1/21 笠井竹亭、昨年7月に引き続いて渡鮮、奉天、上海、香港を巡って6月帰国予定。 (民友1/20)
- 2/12 駿遠書画鑑賞会主催古書画末広会於教與寺、懇親会於鯛めし楼。(新報2/7)
- 2/ 栗田雄(会員)《落葉樹》《小駅》《冬の公園》《川に沿ふ家》《郊外風景》 《ガード》小泉癸巳男(会員)《小春日和》《浅草の裏路》《想ひ》《青春の 疲れ》《帝劇の夜》《三味線を引く女ら》《ロシア教会の夕》《早雲山より芦 ノ湖を望む》第4回日本創作版画協会展出品。(出品目録)
- 3/8 浜松遠陽美術倶楽部市内某大家所蔵書画骨董売立於教與寺(-10)。(新報3/4)
- 3/ 赤城泰舒《風景》栗田雄《和ける日》曾宮一念《赤き花》平和記念東京博覧会出品。(出品目録)
- 3/11 台覧品陳列於県庁。(民友3/10.11)
- 3/15 意匠図案展覧会於静岡物産陳列館(-21)。(民友1/21,3/15,16)
- 3/16 石川欽一郎渡欧。
- 3/18 浜松美術展覧会第3回展於真言院 (-24)。同人作品の他、荒木十畝、中島華陽の 作品出品。中島華陽は浜松滞在中。(新報3/21)
- 3/25 沼津鑑賞画会於東方寺(-26)。美術院同人作品の出品。(民友3/22)
- 4/1 静岡物産陳列館、静岡商品陳列所と改称改組。(民友3/8)
- 4/14 大野芳泰逝去。(近世・近代ぬまづの画人たち)
- 4/15 御殿場カメラ会第2回競技会展覧会於松栄倶楽部。(民友4/3)
- 4/15 巴カメラ会第3回撮影会審査陳列於江尻倶楽部。(民友4/17)
- 5/14 村松春水書画会於下田。(民友5/17)
- 5/19 全国漆器展覧会於静岡商品陳列館(-21)。(新報5/18)
- 5/19 三木翠山、来静。モデルとして芸妓4名を同伴の写生旅行。(民友5/19.20)
- 5/ 静岡憲兵隊、警察、除隊記念品用の陶器に春画が有りとして一斉摘発。 (新報5/22、民友5/22,23,27)
- 5/24 静陵趣味画俳句小品展覧会於山名屋呉服店(-26)。(民友5/25)
- 6/18 冬物図案展覧会及び講演於遠江織物同業組合。(新報6/18)
- 6/ 大岡村小学校校長加藤市松、農民芸術の振興のため『汗の友』刊行の他、 懇談会開催、また展覧会開催を予定。(民友6/19)
- 8/5 静陵図案会主催蒔絵講習会於新通小学校。(新報8/7)
- 8/ 近藤浩一路、袖師笠井氏別荘に滞在し製作。(民友8/24)
- 8/ 豊原瑞雨作品頒布会。(新報8/23)
- 8/21 御殿場写真展覧会第3回展於松栄倶楽部 (-25)。 (新報8/23)

- 4/11 岩谷小波画会於飛鷺青楼。(新報4/8)
- 5/1 駿遠書画鑑賞会第1回展覧会於浜松市鴨江真言院。(新報4/28.5/1)
- 5/8 田中柏陰主催田能村直入百木大憮中川梅縁追薦会於求友亭。展覧及び揮毫。 (新報5/7.8.9)
- 5/8 浜松洋画協会第1回作画展覧会於浜松高等女学校。(民友5/8)
- 5/ 青木新作《丘》第2回中央美術展出品。(出品目録)
- 6/19 西沢笛畝新作展覧会於熱海大場楼。西沢笛畝は旅館玉川別荘に滞在中。 (新報6/18)
- 6/22 岡山松蔭歌道書道会於浜松女子尋常高等小学校。(新報6/10)
- 6/25 池田光栄堂大家近作展於静岡物産陳列館(-27)。(新報6/25)
- 6/ 戯曲『伊賀越』の平作像建設の運動。(新報6/28)
- 8/11 『日本及び日本人』記者後藤粛堂、山田長政に関する講演会於追手町メゾチスト教会。民友新聞は後藤粛堂「山田長政と其時代」を連載(8/19-11/7)。 浅間神社の絵馬について考察(民友10/1-11/7)を含む。
- 8/ 静岡物産陳列館の農商務省認定の申請が却下される。事業費過少、規定不備、 職員資格の不備が理由。(新報8/25、民友9/12)
- 9/ 青木新作《夏の昼》《観覧席の一隅》《道》栗田雄《曇り日》《午後》《ガード》《郊外風景A》《郊外風景B》第3回日本創作版画協会展出品。 (出品目録)
- 9/ 杉本宗一《習作》第8回院展出品。(新報9/5、出品目録)近藤浩一路《十二 橋》《八郎潟》《蓮分舟》《夏山路》中村岳陵《輪廻物語》 第8回院展出品。(出品目録)
- 9/ 曾宮一念《静かなる曇り日》第8回二科展入選。(出品目録)
- 9/22 尚美会第8回展覧会於静岡物産陳列館 (-26)。カメラ会の出品は無い。 (新報9/21,23、民友9/21,26)
- 10/ 栗田雄《陰鬱な日》、第3回帝展入選。(民友10/14,17) 赤城泰舒《山上の小祠》澤田政廣《人魚》第3回帝展入選(出品目録)
- 10/ 野村隆泉来静、揮毫。(新報10/29)
- 10/29 虹霓会第4回展覧会於静岡物産陳列館(-11/4)。(民友10/29,30,11/2)
- 11/4 洋画団体芽生会第5回試作展覧会於浜松演武館(-6)。(新報11/4)
- 11/6 天籟書画抽選会、鳥谷幡山、稲田吾山、芥川梯岳揮毫於聴涛館。(新報11/4)
- 11/ 民友新聞、福神画幅頒布会。(民友11/8)
- 11/11 静岡カメラ会主催第1回県下写真展覧会於静岡物産陳列館。(新報11/10,12,13、 民友11/11)
- 11/13 掛川町游於第2回秋季絵画展覧会於小笠郡物産陳列館(-14)。(民友11/13)
- 11/20 応阿弥如山人美人画展於浜松城天守閣(-29)(新報11/13)
- 11/20 浜松工業学校新築開校、工業試験場移転式典。染色図案展覧会を月末に 開催の予定。(民友11/20)
- 11/23 読画会一行、越前福井に向けて出発。(民友11/25)

(60) 20

- 《日本橋の夕》《雪の浅草》《塔》《四階から》《ポプラ》《河添の家》第2回日本創作版画協会展出品。(出品目録)
- 5/ 赤城泰舒《公園初夏》《家》《新緑並木》《松間阪路》《松間小径》《愛児 (一)》《愛児(二)》《畑》《初春薄日》岡野栄《熱海》《熱海の一角》《若葉》《引汐の川》《奈良の郊外》小泉癸巳男《春の諏訪湖》《秋の春日山》第8回光風会展出品。大野隆徳《伊豆の淡島》《熱海錦ヶ浦》《伊豆にて》の出品があった。(出品目録)
- 5/14 正風会洋画展覧会展於静岡物産陳列館(-17)。(民友5/16)
- 6/ 高山文鶏、鉄舟寺保存会の為に鉄舟寺に滞在し揮毫。(民友6/10)
- 6/ 近藤浩一路《不知八幡森》第1回中央美術展出品。(出品目録)
- 7/17 三澤佐助「児童と図画 | 民友に掲載。自由画の主張。(民友7/17)
- 8/9 土佐光一夫人の葬儀。(民友8/9)
- 9/ 近藤浩一路《山(青嵐·遠雷·雨季)》中村岳陵《千本桜》栗田雄《入出村》 第7回院展出品。(出品目録)
- 9/26 三保刀剣会於三保松原縣神社(-27)。(民友9/9)
- 10/10 虹霓会第3回展覧会於静岡物産陳列館(-17)。(民友10/12,13,14)
- 10/ 赤城泰舒《露深き夏の朝》第2回帝展入選。(出品目録)
- 10/23 カナダより来静の画家フヲスター講演会於西草深静岡基督教青年会館。 (民友10/24)
- 11/3 尚美会第7回展覧会於静岡物産陳列館。(民友10/29)
- 11/4 福井江亭、沼津みやこ亭に滞在、岳南銀行支店楼上を画室として揮毫。 (民友11/4)
- 11/ 植田文華、富岳百態揮毫の為、江尻に滞在。(民友11/17)
- 11/15 池田輝方、沼津市道の家を引き払い療養の為、神奈川県大磯に移転。 (民友11/17)
- 11/ 《小原右馬介銅像》建立着手。(民友11/12)
- 12/ 中島正貴《茶器と林檎》《静物》《静物》《風景》《小松畑》《雨後》《鵠沼の或る道》《豊川風景》《秋の道》《菜畑と道》《ガード》《菜園》《崖》第8回草土社展出品。(出品目録)

大正10年

- 1/15 鈴木秋亭、大阪市の日本研美会で名誉1等賞金牌を授与される。(民友2/1)
- 1/28 ブロマイド画会原画展覧会於静岡物産陳列館(-30)。(民友1/27,30)
- 2/11 交雅会主催第1回素人書画展覧会於磐田郡物産陳列館(-13)。(民友1/16,2/18)
- 3/ 赤城泰舒(会員) 《松並木》《土塀》《舟小屋》《風景》曾宮一念《裾野の 道》第9回光風会展出品。(出品目録)
- 3/ 沼津千本松原に戯曲『伊賀越』の平作の銅像建立の計画。(民友3/11)
- 3/13 南保秋淵画会於掛川八萬九千楼。南保秋淵、塚原霊山、井芹蘇泉揮毫。 (新報2/25)
- 3/16 足立雪山逝去。行年77。(新報3/26)
- 3/18 有声画壇第2回展覧会於浜松真言院。(民友3/21)
- 3/25 静岡市主催東海道名物品展覧会於静岡物産陳列館(-31)。(新報3/18)

吉《紫陽花》《箱根道》柳敬介《肖像》矢崎千代治《合せ鏡》白滝幾之助《おつくり》跡見泰《冬の山》中村不折《鏡》岡田三郎助《ばら》黒田清輝《菊》《遊び□して》和田英作《水□の夏》小林万吾《フィレンツエの郊外》中川八郎《波切村の海岸》中澤弘光《曙光》高村真夫《山》大田三郎《書に倦みて》北蓮造《豚飼》《耕》小寺健吉《箱根の秋》亀高文子《少女》安田稔《秋色》竹内鶴之助《阿賀川の沿岸》有馬さとえ《やすめる女》《婦人》藤島武二《ヴェルサイユの公園》津田青楓《芭蕉庵の下道》石井柏亭《印旛沼》木村荘八《丘の上のシルエット》梅原龍三郎《松崎の景》大田喜三郎《農家》南薫造《小娘》三宅克己《会津の残雪》橋本邦助

- 8/18 静陵図案会第7回意匠製品展覧会於静岡物産陳列館(-24)。(民友8/1.11/6)
- 9/ 近藤浩一路《夕の日》《霧》《朝の日》栗田雄《風景》第6回院展出品。山 脇信徳《伊豆風景》《伊豆の早春》《伊豆海岸》の出品あり。(出品目録)
- 9/ 《高山仰止銅像》建設寄付金募集。(新報9/8)

《松林の富士》など出品。

- 10/6 石川睦次郎、松田正雄、農商務省第7回工芸展覧会入選。(新報10/8)
- 10/1 諸星成章来静。10/11展覧会於静岡物産陳列館(-12)。(民友10/6,11、新報 10/8)
- 10/ 赤城泰舒《向日葵》第1回帝展入選。(出品目録)
- 10/18 植松草里逝去。(近世・近代ぬまづの画人たち)
- 10/ 民友記者、一番町丸尾晋宅訪問、蔵画を見る。(民友10/19)
- 10/ 民友新聞九千号記念として紙上に揮毫連載。(民友10/26-11/30)
- 10/30 尚美会第6回展於静岡物産陳列館(-11/3)。(新報10/26)
- 11/9 高橋雲亭作品展覧会於静岡物産陳列館。(新報11/9)
- 11/14 関東美術倶楽部静岡支部設置記念展覧会於静岡物産陳列館(-15)。(民友11/13)
- 11/17 石川睦次郎作品、東宮行啓に際して台覧の栄。(新報11/18)
- 12/5 岡崎雪聲、《大谷嘉兵衛像》修理のため来静。(民友12/6)
- 12/ 柏木俊一《赤い門と坂(1)》《赤い門と坂(2)》《静かなるS街》《開墾地へ行く道》中島正貴《早春の光》《菜の畑》《五月の或る日》《湯吞と林檎》 《茶器》《秋の或る日の午後》《秋の畑》《肖像》第7回草土社展出品。 (出品目録)
- 12/15 東京新美術書画展覧会於江尻町法雲寺(-16)。(民友12/15)
- 12/ 川崎墨渓、浜松に滞在し揮毫。(新報12/19)

大正9年

- 1/1 民友新聞新年付録、岡田三郎助《ネムの木》原色図版。(民友)
- 1/2 蘭契会展覧会於島田町男子部小学校(-6)(新報T8.12/26)
- 1/ 川合玉堂、静岡大東館に滞在。1/6沼津に向かう。(民友1/5.7)
- 1/ 《高山仰止銅像》工事着手の予定。(民友1/20)
- 1/25 服部亮英来静。(民友1/25)
- 1/25 漫画展覧会於静岡物産陳列館(-27)。(民友1/25,26,27)
- 2/1 石原春秋《正宗国師》院展に出品。(新報2/5)
- 4/ 青木新作《雪降る夜》栗田雄《公園の樹々》《静けき街》小泉癸巳男(会員)

(58) 22

- 10/30 尚美会第5回展於静岡物産陳列館(-11/3)。(新報10/9,24) 会員作品180点、小中学校生徒作品約1500点。参考品として、 下村観山《ラファエル・マドンナの模写》狩野芳崖《不動尊》橋本雅邦 《雪景図》川端玉章《葡萄に栗鼠》菱田春草卒業制作、平福百穂卒業制作。顧 問の作品は、黒田清輝、和田英作、岡田三郎助、小林万吾、結城素明。
- 11/ 荒木十畝作品頒布会、静岡美術倶楽部主催による。(新報11/10)
- 12/12 静岡美術倶楽部発会式並びに主催入札売立会於浮月楼 (-13)。(新報12/10,11,14、 民友12/11)
- 12/ 中島正貴《静物》《松の間を通ふ小路》《三月の池畔》《草根の上に崩れ出たる草》《蝉なく頃》《草原》《田舎の登り道》《自画像》《冬の山》《肖像》 《冬の畑》《子供の顔》《自画像》《Tの顔》《林檎》《自画像》第6回草土社 展出品。(出品目録)
- 徳岡神泉、富士川町岩淵に逗留。

大正8年

- 1/ 小泉癸巳男《鐘楼》《月光》《静物》《小品》《風の空》第1回日本創作版画 協会展入選。(出品目録)
- 2/ 栗田雄《自画像》《風景》《静物》《樹立》日本美術院試作展覧会に入選。 (民友2/7)
- 2/11 二俣書画同好会書画展於栄林寺。(民友2/11)
- 2/22 寺澤黙雨展覧会於静岡物産陳列館 (-24)。(新報2/18,22,23,民友2/22)
- 3/ 笠井竹亭、昨冬来滞在中の岡山市より一時帰省。(新報3/31)
- 3/ 赤城泰舒(会員) 《雪後》《夏景》《夕雲》《静物》《冬景》《常夏》《小堂》石川欽一郎《淀川の夕》《冬の野》《大磯の近く》岡野栄(会員) 《熱海湾頭》他7点、曾宮一念《娘》水野以文《野尻湖畔》第7回光風会展出品。大野隆徳《伊豆の海》《伊豆より見たる富士》出品があった。(出品目録)
- 4/1 参考品陳列会於静岡物産陳列館(-5)。(新報3/27,民友3/25)
- 4/12 小早川秋聲、来静し安田屋旅館にて揮毫。(民友4/14,新報5/2)
- 4/ 帝国巡回博物館於宝台院。(民友4/21)
- 5/ 静岡民友新聞静岡みやび会、木彫鐘旭頒布。(民友4/18)
- 5/ 正風会第2回展開催。中沢弘光《風景》。(民友15/27.28)
- 7/ 兼本春篁来静。(新報7/14)
- 7/20 書画骨董展覧会 (-21)。(新報7/21)
- 7/24 浦田天鹿来静、画会講演会開催予定。(民友7/11,24)
- 8/5 静岡博覧会(-27)。(民友4/19,20,21,7/2,3,10,19,20,25,26,28,8/1,4~28) 第1会場に美術館開設。県内外画家の作品を陳列。 教育館於市立静岡幼稚園は、中学校師範学校生徒作品を陳列。 なお、山田長政遺物、通車町山田家より出品。(民友7/5,28)
- 8/5 諸大家洋画展覧会於静岡物産陳列館 (-16)。(民友7/15,24,8/10,新報7/28,8/10) 93名、169点の出品。

岡野栄《浜風》《朝潮》渡邊審也《北越の海岸》《黒姫山》丹羽林平《朝鮮の 女》橋本邦助《山》松山省三《トランプ》《詩壇》石川寅治《曇り日》小林鐘

- 10/31 尚美会第4回展覧会於静岡物産陳列館(-11/4)。(民友8/18,9/8.10/29) 橋本雅邦《白□紅葉》川端玉章《墨堤春曉》山田敬中《美音》大草神来 《羽衣》フォンタネージ《牧牛》《木立》他参考出品。 上木浩一郎《三保の曇り日》(民友11/3)
- 11/15 《大谷嘉兵衛像》除幕於静岡市清水公園。渡辺長男作、岡崎雪聲の鋳造。 (民友T5.12/19,T6.10/31,11/5,15,新報T5.8/23,9/3,12/20,21,T6.11/14,15,17)
- 11/ 静陵不折書画会、中村不折作品頒布。(民友11/19)
- 12/ 早川世外、焼津に滞在。(民友12/24)
- 12/ 中島正貴《湯呑と林檎》《高き木》《原》《射的場》《窓側の少年》《菊》 《霊感》《自画像》《本を読める二人の少年》《寒い国から来た少年》《手 の習作》《Tの肖像(1)》《Tの肖像(2)》《原(水彩)》《自画像(1)》《自 画像(2)》《Hの顔》第5回草土社展出品。(出品目録)
- · 臨済寺宝物売立。(民友12/11,新報12/11)

大正7年

- 1/14 中村不折講演会於静岡物産陳列館。(民友1/14)
- 1/25 遺墨展覧会於静岡物産陳列館(-27)。(民友1/23,26) 中川梅緑、柴田泰山、内藤杏圃、下山菱江等出品。
- 2/ 赤城泰舒(会員) 《妙義の秋》《山中湖》《森》《山》《風景》《ダリア》 岡野栄(会員) 《温室》《熱海街道》《裏河岸》《ばらの園》《伊豆の冬》 小泉癸巳男《バラ》曾宮一念《春》水野以文《湖畔》《沼津スケッチ》第6回 光風会展出品。(出品目録)
- 2/3 横田華外逝去。(民友2/3)
- 2/17 京都図案協会出張冬物図案展覧会於遠江織物同業組合事務所。(民友2/17)
- 3/24 金華園殿岡宗平主催書画盆栽陳列大会於浮月楼。(民友3/18)
- 5/ 石川欽一郎《峠の眺め》《赤倉温泉》《長崎の街》《石橋》《入江》 第5回日本水彩画会展出品。
- 5/10 高島北海、来静予定。(民友4/26)
- 5/25 静岡正風画会第1回洋画展覧会於静岡物産陳列館(-27)。(民友5/22,26) 出品点数132点。黒田清輝、中澤弘光等参考出品。
- 7/ 《市川紀元次像》移転につき、磐田中泉町市川公園より同町府八幡宮南工事 保安地へ移す認可の申請。(民友7/1)
- 7/20 富士山書画及び旅行用具展覧会於静岡物産陳列館 (-26)。和田英作《三保の 富士》 (東宮献上画原図・吉見書店蔵) も参考出品。(民友6/15.7/3.17)
- 9/ 中村岳陵《にしのひかり》第5回院展出品。(出品目録)
- 9/ 水野以文、群馬に取材した油絵を出品すべく制作中。(民友9/24)
- 10/ 植松草里《江畔坐簪》第12回文展入選。(近世・近代ぬまづの画人たち、出品 目録)
- 10/14 静陵図案会第5回意匠製品展覧会於静岡物産陳列館 (-20)。 (民友6/28.10/8.13)
- 10/21 野田九浦、遠州川崎町杉山氏宅に滞在。(新報10/9,25)
- 10/26 小林量造洋画展於静岡倶楽部 (-27)。 (新報10/25,26,民友10/25)

(56) 24

- 10/ 木村武山作品展示頒布於静岡年々会第5回例会。(民友10/31)
- 11/4 木村武山来静、揮毫の予定。(民友10/31)
- 11/ 中島正貴《登り道》《道》《故郷の風景》《並木》《パレットを持った自画像》《兄の肖像》《兄の肖像》《父の肖像》《眠れる達朗》《秋の上水》 《門》第3回草土社出品。
- 11/ 飯塚聖林、後素会を海野宅にて毎日曜開催。(民友11/20)
- 12/1 静岡カメラ会富士写真研究会主催美術写真展覧会第1回於静岡物産陳列館 (-3)。 (民友11/17,12/4新報12/4)
- 12/ 小室翠雲、来静し大東館に滞在、揮毫。(新報12/14)

大正6年

- 1/16 静陵図案展覧会於静岡物産陳列館。(民友1/10)
- 2/ 赤城泰舒《倉》曾宮一念《早春の庭》水野以文《日盛り》第5回光風会展出品。(出品目録)
- 2/4 片野湘雲画会於南山倶楽部。(民友1/28)
- 2/11 《綾部關胸像》除幕式於静岡城内尋常高等小学校。(新報2/7,12) 像は、同校卒業生三浦長寿の作。
- 2/15 小川千甕、山中古洞、浜名湖写生(-18)。つくし会は画会を計画。(民友2/15)
- 3/ 南薫造、浜松に滞在の予定。(民友3/12)
- 3/ 石川欽一郎《台湾の人》《社頭》《習作》《河原》《早春の野》《春寒》《路 地》第4回日本水彩画会展出品。
- 4/ 伊藤静雨来静予定。(民友3/29)
- 4/ 柏木俊一《風景》《子供の横顔》中島正貴《湯呑とリンゴ》《赤土と道》《廃 墟の春》《門の中より》《素画-男の顔》第4回草土社展出品。(出品目録)
- 5/20 駿府刀剣会第3回於武修館。(新報5/18)
- 7/ 鈴木秋亭、第18回全国特産品展覧会於新潟で2等賞。(民友7/9)
- 7/ 下村観山、来静し浮月楼にて揮毫。(新報7/14) 有度出身の高弟子石原春秋の要請による。
- 8/ 内海輝邦揮毫於宝台院。(民友8/2.6)
- 8/15 工業試験場主催静陵図案会第百回例会・第百回記念会於静岡物産陳列館(-17)。 (民友8/16.17)
- 9/ 中村岳陵《大月氏行》赤城泰舒《湖畔》《墓場》第4回院展出品。(出品目録)
- 10/20 藤枝洋画展覧会於魚安 (-21)。井鍋隆一郎主催。(新報10/19)
- 10/22 中島袈裟彦逝去(48)。東美卒。県工業試験場技手。(新報10/22)
- 10/25 院展派展覧会於静岡倶楽部 (-29)。村松雨石主催。(新報10/20,22) 作者40名、作品70点。荒木柳城《大原女》《花街》《三茶》内藤晴州《島の 女》石山太柏《黄昏》安部蘇春《大仏炎上》相原大樹《東八景》田中渉《しぐ れ》《ゆふ映》《冴ゆる夜》《あした》大塚晃峻《鳥邊野》他、観山、大観、 武山等の作品出品。
- 10/ 山野井善三郎主宰清賞雅会、山田敬中・島崎柳塢画会開催。 島崎柳塢、静岡市呉服町山野井善三郎宅に滞在し揮毫。(新報10/25)
- 10/ 尾竹越堂、来静し大東館にて揮毫。(新報10/28)

- 1/21 尚美会第2回展覧会於静岡物産陳列館(-24)。(民友1/22,23,24)
- 2/1 静陵絵画会主催東海絵画展覧会於静岡物産陳列館。(民友1/19)
- 2/ 赤城泰舒《砂丘》小泉癸巳男《瓦斯会社の裏》水野以文《高尾道》第4回光風 会に出品。岡野栄《伊豆の冬》の出品あり。(出品目録)
- 3/11 静岡カメラ会第5回例会於杉本写真館。(民友3/12)
- 3/21 静陵図案会会員遠足。(新報3/12)
- 3/25 寶泰寺宝物展覧於寶泰寺。(新報3/24)
- 3/26 森田旭水肖像画会於静岡物産陳列館。(新報3/5)
- 3/26 若山岳仙揮毫会於小笠郡下。(新報3/30)
- 4/ 中島正貴《自画像》《子供の肖像》《おとこ》《雨あがり》《河辺の風景》 《故郷の山》第2回草土社展出品。(出品目録)
- 4/2 岸浪柳渓作品展観於吉原高砂館。岸浪柳渓は5日間滞在。(新報3/26)
- 4/ 高取雪幹来静、画会開催の予定。(民友3/31)
- 4/ 山田秀峯揮毫於小笠郡笠原村岡崎芝田屋。(新報4/8)
- 4/14 葵画会無期延期。(新報4/14)
- 4/18 京都図案協会出張冬物図案展覧会於遠江織物同業組合事務所。(民友4/15)
- 5/7 青木仙坡、竹田一竹画会於静岡倶楽部。(民友4/21)
- 6/13 クラマ会展覧会於法月小間物店 (-17)。(新報6/7.14)
- 6/16 葵画会小品展覧会於静岡物産陳列館(-18)。(新報6/17)
- 6/ 下平霞舟、来静岡し吉野屋旅館に滞在。(新報6/20.7/3)
- 7/1 扇子小品作品展第5回展於別雷神社(-3)。(新報6/30,7/1)
- 7/ 三原穂谷画会。(民友6/25.7/5)
- 7/23 高山文鶏画会於臨済寺。同寺に滞在中。(民友7/23)
- 7/ 香川東華、来静し揮毫。(新報7/27)
- 8/3 沼津博覧会にて沼津図画展覧会開催。(民友7/30,新報7/30)
- 8/5 三島博覧会 (-25)。白隠の書画を第二小学校にて展観。(民友8/2.5.新報8/5)
- 8/ 野村素軒揮毫於江尻大津館。(民友8/8)
- 8/8 飯塚九如逝去。享年76。(民友8/11)
- 8/10 駿東郡教育会主催中等学校図画展覧会於駿東農林学校・高等女学校(-25)。 (新報7/21.8/23.民友8/7)
- 9/1 瀧凌雲逝去。(新報9/2.3)
- 9/ 伊藤白陽揮毫於浜松市教興寺。(新報9/3)
- 9/21 尚美会第3回展於静岡物産陳列館(-25)。(民友9/20,新報9/10) 岡田三郎助《山中湖》黒田清輝《初夏の林》他2点藤島武二《ヴェニス》 他1点,長原孝太郎《黄葉》川端玉章《秋草に狐》寺崎廣業《山水》荒木寛畝 《島景》小堀鞆音《蘭陵王》他。
- 9/ 中村岳陵《維盛高野の巻》第3回院展出品。(出品目録)
- 9/23 静岡師範学校絵画展覧会於同校(-24)。(民友9/20)
- 9/ 和田英作、三保宮方に滞在中。木金土は上京し美術学校にて指導。(民友9/22)
- 9/30 久保満太郎所蔵真筆展覧会於静岡物産陳列館(-10/1)。(新報9/30)
- 10/ 吉田博《天竜川》第10回文展入選。(出品目録)

(54) 26

- 3/20 横山大観、下村観山、小杉未醒、今村紫紅、島田魚種旅館にて揮毫。 (新報3/20)
- 3/21 三島古器物展覧会於駿電会社(-22)。(新報3/26)
- 4/13 三百年祭奉斎会主催古書画展覧会於県会議事堂(-22)。(民友4/3)
- 4/13 葵画会展覧会於富士館 (-20)。(新報3/17)
- 4/ 尚古堂書画陳列。(民友4/17)
- 5/ 東照宮三百年奉斎会主催古書画展覧会図録頒布。(新報5/1)
- 5/ 宗星石、来静し袋屋に滞在揮毫。(民友5/6,新報5/7)
- 5/ 石川欽一郎《屋後》第2回日本水彩画会展出品。
- 5/16 森田悟由遺墨展覧会於静岡市法蔵寺。(新報5/16)
- 5/19 静陵刀剣会例会於和田内務部長宅。(新報5/19)
- 5/22 書画売立会於浮月楼。(民友5/20,新報5/20)
- 5/23 松田霞城日本画速習講習作品陳列於佐野春。(新報5/22)
- 5/ 大正写真館高畠義雄、徳川家へ三百年斎の写真帖を献納。(新報6/3)
- 6/22 静陵雅友会第1回展於報土寺。松田霞城講習第1期生による。(新報6/7)
- 6/16 金田崖臥逝去 (79)。精華女学校絵画教師。(新報6/15,18)
- 7/3 葵画会主催妖怪画展覧会於宝台院(-5)。(民友6/30,新報7/2.5)
- 7/3 扇子画展覧会於別雷神社 (-5)。静岡新報社瀧閑村による。 (新報7/2,5、民友7/1)
- 8/1 静岡県教育会主催教育品展覧会。(民友7/13,14,8/1)
- 8/31 木崎九皐追悼画会於浜名郡豊西村源長院。山下青崖、鈴木晩霞等揮毫。 (新報9/3)
- 9/ 葉柏常来静、百々代旅館に滞在し揮毫。(民友9/6)
- 9/12 松田霞城講習並びに展覧於沼津乗蓮寺。(民友9/11)
- 9/23 葵画会御大典記念絵画展覧会於静岡物産陳列館(-25)。 (民友9/15,21,新報9/21)
- 9/24 静岡師範学校絵画展覧会於同校 (-26)。(新報9/20)
- 10/ 中村岳陵《薄暮》第2回院展出品。(出品目録)
- 10/ 中島正貴《自画像 (一)》《自画像 (二)》《自画像 (三)》《風景 (山)》《父の肖像》 第1回草土社展出品。(出品目録)
- 11/7 山本石叟画会於横須賀町佐野屋旅館。(民友11/2)
- 11/11 洋画展覧於静岡商業学校。(民友11/12)
- 11/10 洋画ホワイト会第1回展於安西尋常小学校(-14)。(民友10/16)
- 11/12 静岡中学校書画展覧会於同校 (-13)。(新報11/6)
- 11/14 横田華外書画展覧会於浮月楼。(民友11/13)
- 12/3 静陵刀剣会例会於和田内務部長官邸。(民友12/6)
- 12/12 百馬百画会於宝台院。(新報12/7)
- 12/12 静陵書道会例会於顕光院。(民友12/13)
- 12/15 柳島画会於瑞光寺。(民友11/25)

大正5年

1/17 静陵絵画会、展覧会に関する協議会開催於安達氏宅。(民友1/19)

27 (53)

- 講師:板倉賛治。(新報7/24)
- 8/6 片峰閑斎揮毫於袋屋 (-21)。親睦会を8/25瑞龍寺にて開催。(民友8/12,新報 8/8)
- 8/16 温古会第4回例会於宝台院。(民友8/13,新報8/13)
- 9/8 片峰閑斎送別会於静岡倶楽部。浜松にて揮毫の予定。(民友9/10)
- 9/ 八木菜泉来静、滞在し揮毫。(民友9/13)
- 10/ 赤城泰舒《うす日》《榛の木》石川欽一郎《郊外》《曇り日》《田舎家》 第3回光風会出品。なお、岡野栄《伊豆山の午後》矢代幸雄《御殿場の冬》の 出品あり。(出品目録)
- 10/ 曾宮一念《酒蔵》第8回文展褒状。(出品目録)
- 10/ 赤城泰舒《畑》《山》第1回二科展入選。(出品目録)
- 10/ 多田羅義雄《伊豆の海辺》第8回文展入選。(出品目録)
- 10/ 石原春秋《魚藍観音》第1回院展入選。(民友10/20,出品目録)
- 10/25 絵画持寄展覧会於沼津東方寺。(新報10/24)
- 10/30 岳陽美術会第5回展於静岡物産陳列館(-11/3)。(民友10/13,29,30) 第5室に三浦長寿の彫刻10点を展示。
- 10/30 池端道喜、池上秋畝、松村桂月、山田敬中、島津柳塢、荒木十畝、広瀬 東畝、小堀霊華八画伯歓迎会於浜松聴講館。8人は天竜峡を探勝。 (民友10/30)
- 11/1 渡辺湲泉展覧会於御殿場実業学校。(民友10/1)
- 11/6 静岡中学校書画展覧会於同校(-7)。(新報11/5)
- 11/ 戸内景淵、来静、袋屋に滞在し揮毫。(民友11/20)
- 11/21 図画教育会静岡支部主催図画展覧会於静岡師範学校(-23)。(新報11/21)
- 11/23 森本東閣葵画会於静岡物産陳列館 (-24)。森本東閣は、久能山の招待に応じて 門弟と共に来静している。(民友11/17)
- 12/ 高木静風作品頒布会第2回。(民友12/2民友8/11)
- 12/20 紫峰会展覧会於浜松新聞社長山本紫峰宅。(民友12/20)
- 12/29 飯高溪雪逝去。(民友T4.1/3)

大正4年

- 1/26 温古懇話の会於浮月楼。(民友1/28)
- 2/7 木崎九皐揮毫於浜名郡笠井町長源院。松島十湖宅に滞在。(民友2/9)
- 2/10 岳陽美術会付属洋画自由研究所開設於山本正雄宅。(民友2/9)
- 2/ 釈天江来浜、揮毫。(民友2/17)
- 2/ 渡辺白峰来静、袋屋に滞在し揮毫。(民友2/21)
- 3/20 静陵葵会創立総会於静岡物産陳列館。(民友3/20)
- 3/ 柏木俊一《秋》《鞍馬山門》第5回国画会展入選。梅原龍三郎《江ノ浦》 《江ノ浦の家》《江の浦の山》の出品あり。(出品目録)
- 3/17 横山大観、下村観山、小杉未醒、今村紫紅、三島より興津に至り、 一碧楼に宿泊。(新報3/20)
- 3/18 横山大観、下村観山、小杉未醒、今村紫紅、静岡浮月楼に宿泊。
- 3/19 横山大観、下村観山、小杉未醒、今村紫紅、島田魚種旅館に宿泊。

(52) 28

- 11/21 洋画及び写真展覧会於静岡物産陳列館(-23)。(新報11/21)
- 11/28 静岡刀剣会第1回於追手町和田内務部長官邸。(民友12/2)
- 12/7 寺田渓水画会於安西瑞光寺。(民友11/25,12/9,新報11/25)
- 12/9 本田穆堂揮臺画会於浜松五社演武館。(民友12/10)

大正3年

- 1/11 浜松紅葉会洋画展覧会第1回於浜松市立女子小学校図書館(-14)。(新報1/8,15)
- 1/14 尚美会第1回美術展覧会於静岡物産陳列館(-17)。(民友1/13,新報1/14)
- 1/ 歌川国峰来静、大東館に滞在揮毫。(民友1/23、新報1/21,23)
- 2/7 霜田あいか画会設立。 明治45年東美卒。(民友2/7)
- 3/4 大正博覧会への出品画を静岡物産陳列館にて蒐集発送。(新報3/5) 日本画20点、洋画5点。作者・画題。(民友では27点としている。) 山下青崖、足立雪山、小山汪水、笠井竹亭、瀧凌雲、飯塚聖林、鈴木秋亭、新 間雲屏、藤波文林、望月紫明、橋本芳郊、藤田葉山、白岩寛水、鈴木晩霞、飯 島渓雪、小田樵雲、松本春山(以上日本画・画題略)山本正雄、上木浩一郎、 今村辰三(以上洋画)但し、全点落選。(民友4/19)
- 3/8 温古会古書展覧会第3回展於宝台院。(新報3/7)
- 3/ 静岡民友新聞『七千号記念画』連載。(民友3/18-5/21) 本県ゆかりの作家の作品図版を作者略歴等と共に載せる。
- 3/ 赤城泰舒《大島のある夜》《曇りたる月》《大島の冬》東京大正博覧会出品。 (出品目録)
- 3/27 静岡市教育会主催教育品展覧会於一番町尋常小学校(-31)。(新報3/26)
- 4/ 奈良時雨三郎、飯塚聖林宅に逗留。(民友4/29)
- 5/3 美術批評展覧会於由比町原氏別邸。(民友5/3)
- 5/5 加藤君鳳揮毫於小笠郡横須賀町横山氏別邸。(新報5/13)
- 5/10 書家後藤南崖逝去。(新報5/10)
- 5/11 波多野重平愛蔵書画骨董即売会於三島戦捷記念館(-13)。(新報5/8)
- 5/ 内山秀圃来浜。滞在し揮毫。(民友5/17)
- 5/ 辻蒼石作品頒布。(民友5/17.28)
- 5/ 宮崎樵雲抽選画会。(民友5/18)
- 5/ 福田眉仙来静。(新報5/18)
- 5/ 宮崎樵雲、吉原町高砂館に滞在し揮毫。抽選画会開催を予定。(新報5/18)
- 5/25 写真同盟会大会於静岡物産陳列館。(民友5/16)
- 6/14 東京西川大六蔵現代大家作品展観会於浮月楼。(新報6/12)
- 6/20 久保田華畦揮毫於沼津浮影楼。(新報6/22)
- 7/4 扇子画展覧会第3回於別雷神社(-6)。瀧閑村主催。(新報7/2.民友7/1)
- 7/11 静岡展覧会於城内図書館 (-13)。大正博覧会に静岡市から出品のもの。(民友7/12.15)
- 7/ 李万慶来静、栄松館に滞在、揮毫。(民友7/21,新報7/21)
- 7/ 葵画会(民友7/21,8/1)
- 8/3 浜名郡新居尋常高等小学校主催夏期図画講習会於鷲津小学校(-5)

29 (51)

大正2年

- 1/ 石川寅治、伊豆に写生旅行。(民友1/5)
- 1/24 書画展覧会於沼津松本旅館(-25)。(民友1/25)
- 2/ 赤城泰舒《津川》《箱根湯本(1)》《箱根湯本(2)》石川欽一郎《淡水港》 《台北の町外れ》《台北城外》柏木俊一《十一月頃》《街》《風景》服部四郎《冬の日》《楽器》曾宮一念《桑畑》第2回光風会展出品。(出品目録)
- 1/26 高森砕嵒展覧会於浮月楼。(民友1/25)
- 2/23 岐阜帝国絵画弘進会展覧会於安西瑞光寺。(民友2/5)
- 2/23 書画即売会於加島村成安寺。(民友2/26)
- 3/ 田中頼尚来静。(新報3/2)
- 3/ 堀鉄山来静。5月に画会を浮月楼で開催予定。(新報3/23)
- 4/ 石川欽一郎、赤城泰舒、小泉癸巳男、水野以文等、日本水彩画会創立。
- 4/10 嶽陽美術会展覧会第4回展於静岡物産陳列館 (-14)。(民友2/21,4/17,23) 「和田英作の作品三四点を初めとし白瀧幾之助其他知名画伯の作品 橋本邦助近藤浩氏の日本画の試み静岡商業学校教諭上木浩一郎氏の八犬、 小笠原硫黄島の写生画及び此種の催としては最初の陳列たる静岡三浦長寿氏 の彫刻等並びに安達氏其他会員の出品水彩画油絵各百余名にして見るべき佳 作珍什少なからずと」
- 4/20 紅児会小品展覧会於浮月楼。(民友4/17)
- 5/20 帝国絵画弘進会絵画展覧会於江尻町実相寺。(民友5/17.27)
- 6/~ 横山大観滞在於修善寺新井旅館。(民友7/12)
- 7/6 扇子画会於浜松心造寺。(新報7/9)
- 7/19 谷島屋タイムス主催洋画展覧会於元浜松物産陳列館(-20)。(新報7/15)
- 7/23 近代画展覧会於三島魚半。(民友7/21.25)
- 8/ 静陵絵画抽選会(民友7/20)
- 8/4 三村霊楓、来静し川根屋に滞在、顕光院にて揮毫。(新報8/6)
- 8/8 三村霊楓画会於浮月楼。(民友8/19)
- 8/10 藤井春水、横田華外の薦めにより江尻に滞在。(民友8/10)
- 8/15 藤井春水、舟遊会、席上揮毫。(民友8/14,17,新報8/14,18)
- 8/29 中華南画会於安西瑞光寺。(民友8/21.29.31.新報8/24)
- 9/6 支那古書画展覧会於浜松市田町南新道山前方(-7)。(民友9/5)
- 9/11 小山賛助画会於小山町小山館。(民友9/7)
- 9/21 霊楓画会於瑞光寺。(新報9/24)
- 9/28 敬義堂書画陳列即売会於成安寺。(民友9/27)
- 10/ 益頭峻南《洞庭雪後》赤城泰舒《赤き村の午前》石川欽一郎《台北の郊外》 近藤浩一路《下京の夜》水野以文《赤城の山》《葉つつじ》第7回文展入選。 (出品目録)
- 10/17 洋画展覧会於静岡物産陳列館(-19)。(民友10/1)
- 10/26 横山大観展覧会於沼津御用河岸浮影。(民友10/21)
- 10/31 吉原書画展覧会。(新報9/13)
- 11/ 川崎竹山、来静、滞在し揮毫。(新報11/8)

(50) 30

静岡近代美術年表稿 大正編

明治45年

- 1/5 和田英作招待会於求友亭。静岡市在住の東京美術学校卒業生及び関係者による。 展覧会入場料に対する税の減免を求める陳情を予定。(民友1/7)
- 1/30 書画展覧会於沼津大聖寺。(民友1/30)
- 2/18 静陵美術展覧会於浮月楼。(民友2/19)
- 6/6 比奈地畔川、内村茂三郎、高室光葉、無鑑札書画屋として検挙される。 (民友6/78)
- 6/ 栗原忠二《たそがれ》《夜曲》第1回光風会展に出品。(出品目録)
- 6/9 新画展覧会於沼津大聖寺。(民友6/9)
- 6/8 東海絵画会第2回展覧会於静岡物産陳列館(-12)。(民友6/7.10)
- 6/ 加藤柏堂画会。(民友6/13)
- 6/22 全国書画骨董大会於修善寺大川旅館(-24)。(民友6/21)
- 7/5 嶽陽美術会第3回洋画展覧会於静岡物産陳列館(-9)。 出品数200余点。

「参考品には和田英作、山本芳翠、長谷川昇、北蓮蔵、和田三造、岡田 三郎助、大下藤次郎諸氏のを並べてあるが、和田氏の肖像、長谷川氏の白粉の 女、故山本芳翠氏の神泉、北氏の添乳等見るべきものが少なくない。」 (民友7/2.6)

7/19 扇子画展覧会於雷神社社務所。(民友7/21,21,22,25)

大正元年

- 10/1 静陵図案展覧会於静岡物産陳列館(-7)。(民友9/27.30)
- 10/9 栗原忠二、渡欧。
- 10/6 社団法人救護会後援画会於浮月楼。(民友9/20)
- 10/12 東海絵画協会展覧会於静岡物産陳列館(-14)。(民友9/22)
- 10/ 赤城泰舒《白き砂》《夏の水》中村岳陵《乳糜供養》第6回文展入選。 (出品目録)
- 10/ 鈴木金平、土肥に取材する作品を第1回フュウザン会展に出品。(出品目録)
- 10/17 池谷松石逝去。(民友10/17)
- 10/17 東海美術会第1回教育画展覧会於静岡物産陳列館(-20)。(民友10/20)
- 10/27 東海美術会第1回教育画展覧会於沼津東方寺 (-31)。揮毫於乗運寺。 飯塚聖林が主宰。11/1より三島町駿豆電鉄、11/10頃に浜松、11/19-21森、 12/16-19藤枝で開催。(民友10/20,28)
- 10/30 石井眞一、静岡民友新聞を退社。(民友10/30.31,11/1)
- 11/10 絵画展覧会及び小阪芝田揮毫於沼津。(民友11/5)
- 11/ 掛川出身の東京美術学校卒業生松本英仙、秋葉神社に滞在。(民友11/8)
- 11/17 紅児会展覧会於沼津大聖寺。(民友11/17)
- 12/1 足立雪山画会於浮月楼。(民友11/28,29)
- 12/1 秦野香甫画会於吉原町渡邊宅。(民友12/3)

水彩画会を誘致した比奈地畔川らが、無許可で美術品売買に関わったとして検挙されるのは、この年の6月の事である。これらの出来事の関連については未だ検証を加えていない。東京美術学校を頂点とする日本的アカデミズムの地方での確立初期の躓きの一エピソードに過ぎないかも知れないが、同時期の台北の美術界が、静岡市出身の水彩画家石川欽一郎を得て順調な発展を示して行くのと比べると、中央・地方の距離は物理的距離以外の要素が強い事が判る。

民友は、七千号、九千号記念の折に記事として情報の量のかなり豊富な静岡ゆかりの画家達の作品や画歴を掲載しており、当時の民友及び読者の持つ書画の嗜好・傾向が窺われる。自ら鑑定収集にまで手を染めた民友の村本山雨楼には、『書画道』(大正14年)なる著作があるが、古画に重きが置かれており、彼の嗜好と身辺に限定されている面に難があろう。なお村本の著作には『静陵画談』を引いた痕跡が存在する。更に昭和の中川雄太郎は村本の著作を参照している。中川の「郷土の画人」(『ふるさと百話:15』静岡新聞 昭和50年)等は、孫引きと誤りに注意して読む必要があろう。本研究は、先行研究の少ない中、嘗ての新聞人や画家の著述の源を探り当てる事にも通じていよう。

本年表を手懸りとして記事に当るなら、大正博覧会や大正8年の静岡博覧会、東京で開催される文展等の公募展開催、東京美術学校卒業生達の県内での活躍により、旧来の寺院や料亭での画会・揮毫開催から、公共的建築等を会場とする展覧会へと作品発表の形式が変化し、徒弟制度から、美術学校や中小の研究所、師範学校等での教育へと養成制度が変化していく有様を詳細に窺う事ができよう。また彫刻や日本画の分野でも興味深い活動や展覧会開催を知る事が出来る。彫刻では一例として北村西望作《橘中佐像》の静岡への誘致運動等を挙げる。

但し戦前の銅像は戦中の金属供出によって今日殆ど眼にする事が出来ない。絵画についても、昭和15年の静岡大火、昭和20年6月20日の静岡空襲によって現存するものは少ないと考えられる。

作品なき美術史の不毛さに稿者が飽きた始めた頃、刺激となったのは、冒頭に述べた顔娟英教授の著作である。台湾で年表を基に研究の深化がある事、静岡では、当事者達にとっても不明であった昭和4年の童土社第1回展の開催時期を記事の発見により知り得た事で、ジグソー・パズルの組み立てにも似た本研究が、現存する少ない手懸りである作品と結びついて行く可能性を最早否定はしない。またこの年表を基に、極東という近代西欧文明の周縁の、その又はずれのような地での、近代西洋美術への憧憬に憑かれたかのような若者達、愚かしいまでの情熱で切り開いたその足跡や意義を、研究の形で再び紡ぎ出す事が出来たならば、稿者にとってこれに優る喜びはない。

なお最期についでながら、本年表の前後に位置する明治編、昭和戦前編の各稿は本稿より更に 未熟なものではあるが、研究者に対して協力を惜しまない事を記しておく。

- 注1 拙稿「明治末・静岡の洋画」静岡県立美術館ニュースno.6 1987年
- 注 2 拙稿「昭和14·15年の美術館建設計画について」静岡県立美術館ニュースno.25 1992年

(48) 32

静岡近代美術年表 稿 大正編

立花 義彰

はじめに

本年表は、台湾の近代美術を対象とした中央研究院・台湾大学教授額娟英編著『台湾近代美術大事年表』(雄獅 1998年)に触発されたもので、戦災及び大火で多くの史料を欠く静岡という地域での美術活動の基礎資料復元を目的とする。稿者が嘗て静岡県立美術館在職の折『県内美術の現況展』『静岡の創作版画展』所収の年表編纂のついで収集した資料の複写、及び退職後の業余に閲覧した静岡県立中央図書館所蔵マイクロフィルム版新聞各紙の記事等の史料に基づき、また近年復刻や編纂された展覧会目録等の資料にも当って新たに編んだ年表群の一つであるが、未だ遺漏は多かろう。従って「稿」の文字を残し、後学に期待したい。

本年表では、大正年間の静岡県内の美術に関する出来事を年月日順に配し、/ で月日を表記、月日不明は・で表している。各文末の () 内に、典拠とする紙名、日付を記している。静岡民友新聞は(民友 /)、静岡新報は(新報 /)とするが如くである。静岡民友新聞及び静岡新報は、共に現在の静岡新聞の前身であり、戦中の1県1紙の新聞統合により廃刊されている。静岡民友新聞は一貫し立憲改進党系で、自由党系・政友会系の静岡新報とは激しい対立関係にあった。また大正年間は東京より有力紙が相次いで静岡県内に進出、両紙共経営的には幾多の困難に遭遇したとされる。本年表での事項を主に両紙から採っている理由としては、静岡市内の情況に詳しいという事が挙げられる。従って、静岡県内全体から考えると静岡市を中心とした県中部地域偏重なものになっている点を了解されたい。浜松や、画家達が多く訪れた熱海、伊豆等については今後の課題となろう。本年表では『近世・近代ぬまづの画人たち』(沼津市明治史料館1998年)等からその欠の多少を補うと共に、東京での動向として『大正期美術展覧会出品目録』(中央公論美術出版 2002年)での静岡県関係作家・作品記事を補い(出品目録)等と記した。なお、一部を除き旧漢字を現行のものに改め、不鮮明で判読不能な文字は□とした。

以下、少々脈絡の無いとも思われるエピソードに触れて、本研究の目的と展開についての説明 に代えたい。

大正期の静岡に於ける主な展覧会会場となった静岡物産陳列館は、明治38年の開館、大正11年に静岡市商品陳列所、昭和6年に静岡市商工奨励館と改称された。昭和年間の商品陳列所連合会編『商品陳列所総覧』(復刻『博物館基本文献集:7』)に拠れば、「静岡尚美会 十数年前の創立にかかり当市唯一の美術団体にして・・・」との記述があるが、大正3年に第1回展を開く尚美会以外にも、様々な展覧会が開催されている事は、本年表を見れば明らかなものとなろう。しかしながら、明治43年の水彩画展は、大下藤次郎の言う「警察の干渉等」があり水産会館で開催された。(注1)同年の嶽陽美術会洋画展は静岡物産陳列館を会場とする事が出来て、回を重ねるが、その終焉については嘗て拙稿(注2)で簡単に触れた事がある。概ね静岡の政財界官界は彼らに対して冷淡であったと言える。

彼ら青年洋画家達に好意的な評を寄せた民友の石井眞一には、明治期静岡の画人について述べた『静陵画談』(民友 明治44年)という著作があるが、石井は大正元年秋に民友を退社し、郷 里岡山へと帰って、静岡との関わりをその後見出せなくなる。

明治45年に、静岡市在住の東京美術学校卒業生達は、三保に滞在中の和田英作を招待し、静岡市内の代表的な料亭の一つ求友亭で宴が開くが、この事を報じた記事には、彼らが展覧会入場料課税減免についての陳情を予定するとある。彼らの一員である可能性の高い彫刻家内村茂三郎、

13:00~16:30: 体験講座

2つの班に分けて、紙漉き体験、古文書修理体験を行った。

A:紙漉き体験講座

- ①原料を水槽に入れて撹拌する
- ②ネリを入れる
- ③漉く
- ④湿床に漉いた紙を置く

繊維の流れの方向を考えながら漉くことができた。少しずつ厚みを重ねて漉くこと を利用して、創意工夫をこらした楽しい紙が漉けた。





B: 古文書修理体験講座

- ①補修紙を欠損箇所と同型に整形する
- ②古文書の欠損部周囲に糊を付けて、そこに整形した補修紙を添付する
- ③すべての穴が埋まったら、毛布の上で乾燥させる





一穴一穴丁寧に補修することができた。また、修理した文書は百人一首の古い冊子 だったため、文字を読みながら、修理もするということができた。よりいっそう、 古いものに対する興味が沸きやすかったと思われた。

(46)

②和紙の原料

和紙にはさまざまな原料が用いられる。楮、三椏、ガンピ、竹などの伝統的な和紙材料で漉かれた様々な紙のサンプルを触り、その違いについて考えた。実態顕微鏡にて繊維の状態を観察し、それがどのように紙質の違いにつながるのかを考えた。 原料の加工方法によっても、千差万別の紙が漉かれること現物を見ることによって知った。





10:30~12:00: 紙資料の修理(講座)

①紙資料を劣化させるもの

文化財、特に紙資料に絞って、劣化する原因や劣化の種類について写真によって学んだ。特に古文書の虫損被害やカビ被害について、それが起こる理由についても学び、文化財を保存するには環境を整えることが大切であることを学んだ。

②紙資料の修理

紙資料を修理する際に大切な考え方を学んだ。また、修理することによって、何百年も昔から現在まで伝えられてきた文化財の偉大さと、日本人の修理の知恵を学んだ。

③修理の材料

修理に使用する材料は、絶対に作品に影響を及ぼすものであってはならない。そのため、昔から使用されてきた伝統的な材料と道具を使い、現在でも修理を行っている。体験講座で使用する糊作りを一緒に行い、それの持つ特性と優れた効果について学んだ。



12:00~13:00: 昼食

35 (45)

NPO「文化財を守る会」 静岡県立磐田西高校 和紙と文化財講座 報告書

参加者

磐田西高校

生徒 9 名 (金原 大祐、鈴木 千景、荻野 杏都沙、平井 歩、松村 篤安田 匠、安富 香奈絵、柏木 佳織、鈴木 洵子)

教員1名(喜多啓之)

NPO文化財を守る会 講師 2名

日本で製紙がはじまったのは7世紀初めといわれています。それ以来、日本の製紙の技術は様々に変遷して多種多様な紙が生まれてきました。現在まで残る紙を見ると、文書の紙でも、絵画の紙でも、原料や原料の処理方法、漉き方、加えられる填料、道具類(簾桁)などによって様々に違うため、同じ紙は無いと言っても言い過ぎではありません。

この度の体験学習では、NPOで所持している様々な種類の和紙を見て、触ってその違いを実感しました。またその元となる原料の楮、三椏なども見て和紙の成り立ちを知り、光に透かす、破る、折るなどの体験を通して、和紙の優れた特性を体感しました。そして実際和紙を漉き、日本の伝統的な製紙の素晴らしさやその技法を、体験しました。

また、文化財を劣化させるもの、破壊するものについて学びました。特に、古文書などの紙資料に特有の虫害、カビ、酸化劣化などの損傷を見ることにより、それらをよい環境で保存することの必要性を学びました。また、伝統的な技法でおこなう修理技術についても学び、材料や道具など実物を触ってその成り立ちや、機能的な素晴らしさを感じました。

その後、実際に虫損の被害にあった古文書の補修作業を体験しました。

9:30~10:30: 和紙の特性(講座)

①和紙の特徴

用意した薄い楮紙、厚い楮紙、コピー用紙を、破ったり千切ったり、折ったりしながら、和紙の優れた特性を知った。また、透かして見ることで、繊維の流れの意味、 簾の目、糸目の入り具合とその方向の意味を知った。

実態顕微鏡にて、いろいろな紙の繊維構造を比較観察することによって、和紙の強靭さやしなやかさ、薄さ、透明感など優れた特性が現れることの理由を導き出した。





(44) 36

紙漉きを終えて -

紙漉き後、1日ほどの十分な時間をかけて水分を抜く圧搾作業を行います。十分な脱水が済んだら、板に一枚ずつ貼って乾燥させます。これらの作業は、NPO文化財を守る会でさせていただきました。

圧搾

湿床に重ねられた紙を、上下から板で挟み上から重石をのせて脱水しました。

乾燥

十分な脱水の後、重ねられた紙を一枚ずつ剥し、板に刷毛を使って貼り付けます。そのまま乾燥させます。 (板干し)

―― まとめー

和紙についての講座、紙漉き体験の中で、生徒達が楽しくそして真剣に取り組んでくれるのがとても嬉しく思われました。日本の伝統的な和紙という文化に接することによって、先人から伝わるものの素晴らしさを伝えることが出来たのではないかと思います。

さらに期待することは、出来上がった和紙を通して、生徒達の友達や両親、親兄弟の 話題となってくれることです。そして伝統的な和紙とその文化の素晴らしさが広がって いけばと考えています。

37 (43)

和紙の作り方

これから和紙を漉くために和紙作りの流れを資料画像を見ながら説明しました。 今回は時間が限られるため、ざぶり、紙漉き、しとまでの工程を体験することにしました。

和紙作りの流れは以下の通りです。

1、刈り取り	6、たくり	11、ざぶり
2、蒸す	7、煮る	12、紙漉き
3、皮剥ぎ	8、川さらし	13、しと
4、乾燥	9、塵より	14、圧搾
5、川さらし	10、叩く	15、板張り

実習内容 -

和紙についての講義を終えた後、二つの漉舟で4人、3人の2グループに分かれて交 代で和紙を漉いてもらいました。最初は教えられた通りに漉いていた生徒たちも、何度 か漉いていくうちに金砂子蒔紙をちぎって散らしたり、ノートの模様を切り抜いて漉き 込んだり、厚さの違う和紙をちぎって漉き込んだり、簾桁を揺する方向を変えてみたり する等、様々な工夫を凝らして紙漉きを楽しみました。

和紙を作る

予め用意しておいたトロロアオイと楮原料を漉き舟の中に入れ、木の棒でよくかき混ぜ、繊維がよく分散するようにし、漉く準備をしました。

漉き方を説明しながら一度手本を見せてから、生徒達に 漉いてもらいました。

<漉き方>

- 1. 簾を桁に挟んで向かって奥から手前に向かって紙料をすくい上げ一度紙料を流す。
- 2. 自分の名前を書いた和紙を置く。
- 3. もう一度紙料を簾桁ですくい上げて、前後に揺する。 (流し漉き)
- 4. あとは好みの厚さになるまで、流し漉きを繰り返す。
- 5. 桁から簾を外し、簾の上にのっている紙を湿床に移す。



16、乾燥



(42)

材料は何だろう?

伝統的な和紙の材料には楮、 三椏、雁皮の他に竹や藁等があります。工房で栽培している楮、三椏、雁皮を実際にみて、 木のどの部分が使われて紙になるのかを説明しました。また、日本の製紙技術の特性で





ある流し漉き (上の写真のような漉き方) をするために必要なネリ (トロロアオイ) の話をし、実際にトロロアオイを触ってみました。

和紙ってすごい!

洋紙(ノート用紙)と和紙を各自に配りました。光に漉かして和紙と洋紙の繊維の違いを見たり、破ってその丈夫さを体験しました。生徒達は両方の紙をよく観察して、繊維の長さと、強度の違いを発見してくれました。和紙の繊維が長くて強いのは、原料自体が違うこと、また加工方法が違うことから来るというのを説明した後、実態顕微鏡の100倍率でさらに観察しました。

また、生徒達は、通気性がよい、光を通すという和紙の特性も、繊維の長さによるものだということを、以上の観察によって気が付いてくれました。

そのほかにも、楮、三椏、雁皮、竹を使って、色々な方法ですいた多種多様な紙を実際にさわったり、古文書を手にとって見たりしながら、その多様性や耐久性を実感したりしました。





和紙って何に使われているの?

襖、障子、扇子、提灯、団扇、包装紙、のし紙、紙の服(紙 布)、文化財の修理など様々なかたちに姿を変えて使われ ていることを資料の画像を見て学びました。

その後、襖を剥がす体験をしました。和紙を途中迄剥がし、中に貼ってある状態の和紙を触った時、力一杯押しても破れない和紙の丈夫さに生徒たちは驚いていました。



39 (41)

平成17年10月29日 AM8:30~AM11:30

参加者

焼津市立東小学校

生徒7名 (深川 暁生、川守 ひとみ、石橋 綾奈、良知 優奈 四ノ宮 諒、橋本 藍、水野 空)

教員1名

NPO文化財を守る会 講師3名

日本で製紙がはじまったのは7世紀初めといわれています。それ以来、日本の製紙の技術は様々に変遷して多種多様な紙が生まれてきました。現在まで残る紙を見ると、文書の紙でも、絵画の紙でも、原料や原料の処理方法、漉き方、加えられる填料、道具類(簾桁)などによって様々に違うため、同じ紙は無いと言っても言い過ぎではありません。

この度の体験学習では、NPOで所持している様々な種類の和紙を見て、触ってその違いを実感しました。またその元となる原料の楮、三椏なども見て和紙の成り立ちを知り、光に透かす、破る、折るなどの体験を通して、和紙の優れた特性を体感しました。

そして実際和紙を漉き、日本の伝統的な製紙の素晴らしさやその技法を、体験的な知識として身に付けてもらえたものと思います。

講座内容 -

和紙を漉き始める前に、和紙作りをより深く理解してもらうため、5つの講義内容に 分けて資料画像や実物の資料に説明を交えて和紙についての勉強をしました。

和紙ってなに?

和紙は、日本に昔から伝わる材料や道具を使って、昔 と同じ方法で作られている紙のことをいいます。 生徒達は、「和紙はなんとなく知っているけれど、はっ

きりは知らなかった」という反応でした。



(40)

10:30~12:00: 紙を漉く(体験)

- ①原料を水槽に入れて撹拌する
- ②ネリを入れる
- ③漉く

実際に紙を漉いてみる。 (伝統的な製法は大変時間と手間がかかるため、ここでは「漉く | 工程のみを体験する。





12:00~13:00: 昼食

13:00~14:00: 紙資料の修理(講座)

①歴史資料の過去修理

歴史資料には、過去の修理の跡が残っていることが多い。修理の 跡も歴史となって残っているのである。修理を通して千年以上も 前の紙資料が、今日までどのように伝えられてきたのかを考える。

②現在の歴史資料修理とは

現在の修理技術は、過去の伝統的な技法を土台にして、新たな技術を生み出している。どのような方法で修理し、次の時代に引き継いでいくのかを考える。

③紙を保存するために

紙資料を保存するために必要な環境や考え方を紹介する。

14:00~15:30: 古文書の補修(体験)

- ①補修紙を欠損箇所と同型に整形する
- ②古文書の欠損部に添付する
- ③乾燥させる

虫損被害にあった古文書の補修作業を体験し、修理の奥深さを知る。





15:30~16:00 研究協議 3 「地歴公民科における主題学習について」 16:00~16:20 指導・講評

41 (39)

紙プログラム 報告書

特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会

平成17年度10年経験者研修(地理歴史科・公民科)

日時 平成17年11月17日 AM9:30~PM4:20

参加者

学 校 名	氏 名	学 校 名	氏 名
沼 津 東	村岡 健一郎	浜 松 湖 東	藤田 貴義
川根	塚本 徹	気 賀	中上 克利
横須賀	良知 永行	静岡市立清水商業	永井 秀紀
磐 田 西	喜多 啓之		

In the Way A. H			
担当指導主事			
高校教育課	渡邉 紀之(地歴担当)		
高校教育課	齋藤 明人(公民担当)		

NPO文化財を守る会		
友田 千恵		
中井 喜子		

9:30~10:30: 和紙の特性(講座)

①和紙の特徴

洋紙と比較しながら、和紙の持つ優れた特徴(柔軟性、繊維の強靭さ、 種類の多さ等)を知る。見本サンプルとして、洋書、和古書、現在 漉かれている様々な和紙を用意し、実際に触りながら、体験的に和 紙の特徴と多様さを知る。

②和紙の原料

①での違いには、原料の違いが大きく関わっている。和紙の元になる原料を木の状態から知る。 (楮・三椏・ガンピ)

③和紙の違いを知って歴史をもう一つ深く知る

①②によって知った違いが、歴史の上でどのようなことを示しているのか、歴史資料の繊維分析結果を基に写真を交えて解説する。





(38) 42

紙プログラム 報告 ~和紙を通して文化財の保存を学ぶ~

県高校教育課高校教員10年経験者研修 焼津市立東小学校 黒潮っ子ふれあい広場 体験授業 県立磐田西高校 地理教科 体験授業

特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会

 $43 \tag{37}$

育委員会の松下善和氏には現地調査にご便宜を頂きました。凝灰岩製石塔の石材と旧浜岡町域の 石塔に関しては本間岳人氏にご教示を頂きました。隣接地の石塔調査について島田市教育委員会 の篠ヶ谷路人氏、藤枝市教育委員会の椿原靖弘氏、静岡市教育委員会の山本宏司氏にはご教示を 頂きました。また以下の方々にも多くのご教示を頂いており、併せてこの場を借りて関係者に感 謝いたします。(敬称略)

狭川真一、佐藤亜聖、竹田憲治、土本典生、野沢則幸、濱辺一機、

※所属 松井=袋井市教育委員会(袋井市立浅羽郷土資料館)

木村 = 磐田市教育委員会(見付学校教育資料館)

溝口=牧之原市教育委員会

【参考文献】

小野勝年 1970「石造美術」『日本の美術』No 45 至文堂

本間岳人 1998「遠江における石製塔婆の様相」『立正考古』第37号 立正大学考古学研究会 (第4図70出典文献)

本間岳人 2006「墓地・石塔・経塚等」・「浜岡町における石塔の特徴と変遷」『浜岡町史資料 編考古』御前崎市

斎藤慎一 2005 a 「遠江相良庄の伝領と空間構成 - 平田寺文書の分析から - 」『相良城址』相良 町教育委員会

斎藤慎一 2005 b 「遠江沿岸荘園の空間構造」『中世の伊豆・駿河・遠江』高志書院

狭川真一 2005 「噛合式五輪塔考」 『日引』 第6号 石造物研究会

西山祐司 2004「高野山における初源期の花崗岩製五輪塔について」『高野山中世石造物の実体 を探る』石造物研究会

松井一明 2005 a 「静岡県の中世墓」『第6回中世墓資料集成研究会レジメ』中世墓資料集成研究会

松井一明 2005 b 「静岡県における中世石塔の様相 (2005年版) - とくに出現期の石塔を中心に - 」『日引』第7号 石造物研究会

松井一明・太田好治・木村弘之 2005「遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開 - 静岡県下に おける中世石塔の研究1 - 」『静岡県博物館協会研究紀要』第28号 静岡県博物館協会

松井一明・木村弘之 2004「浜北市内にのこる中世の石塔」『浜北市史資料編原始・古代・中世』 浜北市

桃崎祐輔 2000「横地城周辺における中世石造物の展開とその意義」『横地城総合調査報告書資料編』菊川町教育委員会(第7図115~128出典文献)

桃崎祐輔 2005「石造物」『相良城址』相良町教育委員会(第10図238 ~第11図261 出典文献)

御前崎市 2006『浜岡町史資料編考古』(第8図156~第10図237出典文献)

掛川市 1997『掛川市史原始・古代・中世編』

相良町 1993『相良町史通史編上巻』

浜岡町 1987『浜岡町史』

(36) 44

No.	寺院・墓地名	所在地	石 塔 の 内 容	備考
84	小沢家墓地	旧小笠町川西	緑色凝灰岩五輪塔 2	赤土荘関連
85	川西地蔵堂内	旧小笠町川西	緑色凝灰岩五輪塔1	赤土荘関連
86	川西赤堀家墓地	旧小笠町川西	緑色凝灰岩五輪塔 8	赤土荘関連
87	高橋赤堀家墓地	旧小笠町高橋	褐色凝灰岩五輪塔 5、褐色凝灰岩宝篋印塔 2	赤土荘関連
88	和田家墓地	旧小笠町星ヶ谷	褐色凝灰岩五輪塔1、	
89	正林寺墓地	旧小笠町川西	褐色凝灰岩五輪塔1、安山岩B五輪塔1	
90	釜原中世墓	旧浜岡町新野	褐色凝灰岩宝篋印塔 1、安山岩 C 五輪塔 1	新野氏関連
91	想慈院墓地	旧浜岡町新野	緑色凝灰岩五輪塔 8、褐色凝灰岩五輪塔 6、褐色凝灰岩宝篋印塔 4、安山岩A五輪塔 1、花崗岩五輪塔 1	新野氏関連
92	篠ヶ谷中世墓	旧浜岡町新野	緑色凝灰岩五輪塔3、褐色凝灰岩五輪塔5、砂岩五輪塔1	新野氏関連
93	篠ヶ谷観音堂	旧浜岡町新野	緑色凝灰岩五輪塔1、	新野氏関連
94	閑田院	旧浜岡町下朝比奈	緑色凝灰岩五輪塔5、褐色凝灰岩五輪塔6、	
95	法蔵寺跡	旧浜岡町上朝比奈	緑色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩五輪塔3、褐色凝灰岩宝篋印塔1	
96	寺藪五輪塔	旧浜岡町下朝比奈	緑色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩五輪塔1	
97	下水神社	旧浜岡町池新田	褐色凝灰岩宝篋印塔 1	
98	石切様石塔	旧浜岡町上朝比奈	褐色凝灰岩宝篋印塔 1	
99	朝夷氏墓塔	旧浜岡町上朝比奈	褐色凝灰岩宝篋印塔 3	朝夷氏関連?
100	池宮神社	旧浜岡町佐倉	凝灰岩・砂岩多層塔 1	
101	正福寺	旧浜岡町比木	褐色凝灰岩宝篋印塔9、砂岩宝篋印塔2	比木荘関連
102	笠名庚申堂	旧相良町笠名	褐色凝灰岩宝篋印塔 2	
103	大聖寺墓地	旧相良町菅ヶ谷	褐色凝灰岩宝篋印塔 1	
104	若宮八幡宮裏墓地	旧相良町菅ヶ谷	安山岩 A 五輪塔 2、安山岩 C 五輪塔 1	相良氏関連?
105	正福寺跡	旧相良町大沢	褐色凝灰岩宝篋印塔 1	
106	平田寺・墓地	旧相良町大江	緑色凝灰岩五輪塔 6、褐色凝灰岩五輪塔 4、褐色凝灰岩宝篋印塔 1、緑色 凝灰岩宝塔 1、安山岩A五輪塔 2、安山岩B五輪塔 1、安山岩C五輪塔 1	相良湊関連
107	霊松庵跡墓地	旧相良町大江	褐色凝灰岩五輪塔1	平田寺関連
108	大江平田経塚	旧相良町大江	緑色凝灰岩五輪塔1、安山岩B五輪塔1、安山岩C五輪塔1、砂岩宝篋印塔1	平田寺関連
109	清浄寺勝間田氏墓塔	旧榛原町道場	緑色凝灰岩五輪塔 3、褐色凝灰岩五輪塔 4、褐色凝灰岩宝篋印塔 5、 安山岩A五輪塔8、安山B五輪塔8、安山岩C五輪塔7、安山岩B宝篋印塔11、	勝田湊関連
110	鈞学院	旧榛原町静波	安山岩A五輪塔2、安山岩A宝篋印塔1	勝田湊関連
111	大井家墓地	旧榛原町中	緑色凝灰岩五輪塔3、褐色凝灰岩五輪塔3、安山岩A宝篋印塔1	勝間田氏関連
112	中田家裏山墓地	旧榛原町勝田	緑色凝灰岩五輪塔1、褐色凝灰岩五輪塔2、砂岩五輪塔1	勝間田氏関連

(※数量は推定個体数、Noは前稿からの通番号で第1図番号と一致する。)

り花崗岩製品のルートを継承する形で北伊勢〜美濃地域からの搬入品と考えられるが、15世紀後葉以降の製品については在地の砂岩製品の生産に移行している可能性が高い。なかでも古い形態を残す森町産砂岩製宝篋印塔の部材が確認できた貫名氏供養塔については、15世紀後葉〜16世紀に継続する森町産砂岩製小型石塔の大規模生産の契機となった初期製品とも考えられる。遠江東部に顕著に分布する古い形態を残す中・小型宝篋印塔とともに在地製品に移行する石塔の可能性が指摘でき、今後注目していきたい資料である。

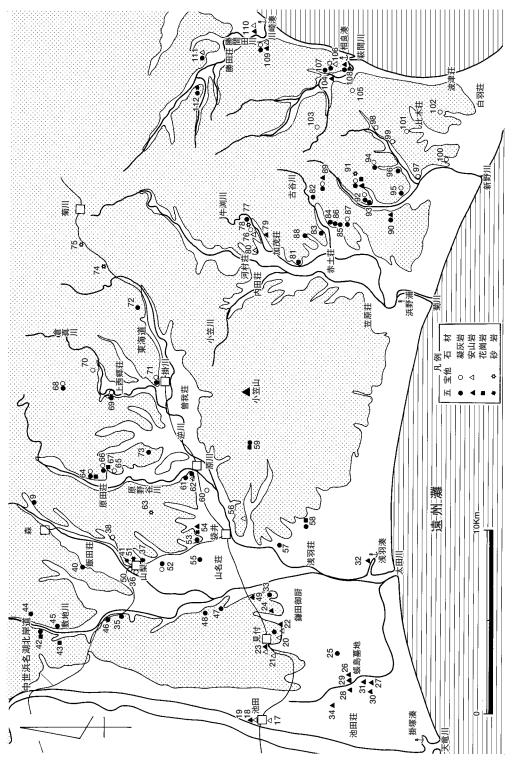
このように遠江中・東部の古式石塔から得られた歴史的背景は多岐に渡り、特に石塔の東国波及にあたって重大な問題も含むことを提示できたが検討課題も多く残した。これらの検討課題は、すでに紙面が大幅に超過しているため次号以降を期して回答を用意したいと思う。

最後になりましたが、今回の石塔の調査にあたって調査を快諾して頂きました各寺院とその関係者の皆様にはたいへんお世話になりました。また、掛川市教育委員会の松本一男氏、掛川市役所の戸塚和美氏、菊川市教育委員会の塚本和弘氏、御前崎市教育委員会の村本薫氏、牧之原市教

第1表 中·東遠江古式石塔一覧表

No.	寺院・墓地名	所在地	石 塔 の 内 容	備考
42	永安寺墓地	旧豊岡村敷地	緑色凝灰岩五輪塔3、花崗岩五輪塔1、安山岩A五輪塔1	岩室廃寺関連
43	蔵平中世墓	旧豊岡村敷地	花崗岩五輪塔 1	岩室廃寺関連
44	岩室廃寺南山中世墓	旧豊岡村敷地	緑色凝灰岩五輪塔 3	岩室廃寺関連
45	龍雲禅寺	旧豊岡村敷地	緑色凝灰岩五輪塔 2	岩室廃寺関連
46	建福寺墓地	袋井市川会	緑色凝灰岩五輪塔 1	岩室廃寺関連
47	篠原中世墓	磐田市向笠竹之内	緑色凝灰岩五輪塔1、安山岩A五輪塔1	現新豊院所在
48	向笠氏墓塔	磐田市向笠竹之内	緑色凝灰岩五輪塔3、褐色凝灰岩五輪塔1	現新豊院所在
49	大日堂	磐田市三ヶ野	安山岩A五輪塔1	見付宿関連
50	正福寺墓地	袋井市山梨	褐色凝灰岩五輪塔 1	西楽寺関連
51	林光寺墓地	袋井市春岡	砂岩一石五輪塔1 (江戸)	
52	観正寺跡	袋井市山梨	緑色凝灰岩五輪塔 1、褐色凝灰岩宝篋印塔 2	
53	久能墓地	袋井市久能	緑色凝灰岩五輪塔 1	
54	東別所墓地	袋井市久能	緑色凝灰岩五輪塔1、安山岩A五輪塔1、砂岩五輪塔2	
55	海蔵寺墓地	袋井市堀越	緑色凝灰岩五輪塔 2	遠江今川氏関連
56	満願寺墓地	袋井市大門	安山岩 A 五輪塔 1	本間氏関連?
57	心宗院中世墓	旧浅羽町諸井	緑色凝灰岩五輪塔 1	
58	円明寺墓地	旧浅羽町浅名	緑色凝灰岩五輪塔6、花崗岩岩五輪塔1	浅羽氏関連
59	法多山中世墓	袋井市豊沢	緑色凝灰岩五輪塔14、花崗岩岩五輪塔4	
60	妙日寺貫名氏墓塔	袋井市国本	褐色凝灰岩宝篋印塔 1、砂岩宝篋印塔 2	貫名氏関連
61	永源寺跡墓地	袋井市国本	緑色凝灰岩五輪塔 1	原川宿関連
62	用福寺跡墓地	袋井市国本	緑色凝灰岩五輪塔2、安山岩A宝篋印塔1	原川宿関連
63	油山寺	袋井市村松	砂岩宝篋印塔 1	
64	長福寺	掛川市本郷	緑色凝灰岩五輪塔2、褐色凝灰岩宝篋印塔4、花崗岩五輪塔1	
65	宗塔庵跡	掛川市本郷	褐色凝灰岩宝篋印塔 1	長福寺関連
66	原氏墓塔	掛川市本郷	緑色凝灰岩五輪塔4、褐色凝灰岩五輪塔5、褐色凝灰岩宝篋印塔7、花崗岩五輪塔1	現照月寺所在
67	照月寺墓地	掛川市本郷	褐色凝灰岩宝篋印塔 2	長福寺関連
68	法泉寺墓地	掛川市上西郷	褐色凝灰岩五輪塔 1、褐色凝灰岩宝篋印塔 6	
69	観音寺跡墓地	掛川市上西郷	緑色凝灰岩五輪塔4、褐色凝灰岩宝篋印塔3、安山岩C宝篋印塔1	法泉寺関連
70	法寿庵墓地	掛川市上西郷	褐色凝灰岩宝篋印塔 3	法泉寺関連
71	龍華院	掛川市掛川	緑色凝灰岩五輪塔2、褐色凝灰岩宝篋印塔1	掛川城下層墓?
72	子安観音寺墓地	掛川市小原子	緑色凝灰岩五輪塔 1	日坂宿関連
73	常光院墓地	掛川市富部	緑色凝灰岩五輪塔 2	
74	常現寺墓地	掛川市日坂	砂岩一石五輪塔 5 (江戸)	日坂宿関連
75	久延寺	掛川市佐夜鹿	砂岩宝篋印塔 1	
76	三光寺裏山墓地	旧菊川町奥横地	褐色凝灰岩宝篋印塔2、安山岩A宝篋印塔2、砂岩宝篋印塔1	横地氏関連
77	慈眼寺墓地	旧菊川町奥横地	緑色凝灰岩五輪塔 2	横地氏関連
78	伝横地太郎供養塔	旧菊川町奥横地	砂岩宝篋印塔 1	横地氏関連
79	段横地旧公会堂	旧菊川町段横地	安山岩 A 五輪塔 2	横地氏関連
80	藤谷神社	旧菊川町西横地	褐色凝灰岩宝篋印塔 1、砂岩宝篋印塔 1	横地氏関連?
81	小堤城跡	旧小笠町上平川	褐色凝灰岩五輪塔3、砂岩五輪塔1(後補)	赤土荘関連
82	谷田寺跡	旧小笠町川上	緑色凝灰岩五輪塔 1	赤土荘関連
83	安興寺墓地	旧小笠町赤土	緑色凝灰岩五輪塔 2	赤土荘関連

(34)



第13図 遠江中・東部古式石塔分布図 (数字は第1表No.と一致する)

の状態である。駿河西部地域における緑色凝灰岩製大型五輪塔の製作に律宗寺院が関与していた 可能性がないかどうか今後調査を進める中で次号に資料提示した後結論付けたい。

伊豆産安山岩製品は紀年銘資料が宝篋印塔に限定され搬入開始時期はよく分からないが、五輪 塔も全ての輪にシャープな梵字が入る古い型式のものはないため14世紀前葉に遡る製品は少ない と見られる。紀年銘資料をあたると、旧菊川町三光寺裏山中世墓宝篋印塔(115)に文和四年 (1355)、榛原町清浄寺勝間田氏墓塔群宝篋印塔のなかに観応2年(1351)銘(263)と文和三年 (1354) 銘(262)、同町釣学院宝篋印塔に文和三年(1354) 銘(273)の石塔などがあげられる。 なお、釣学院宝篋印塔の銘文は従来元徳四年(1332)銘と認識されていたが、今回の調査から実 際の造立年代を文和三年としたことにより石塔の型式も年代に合致した。よって、遠江東部の時 宗寺院で確認できた紀年銘をもつ出現期の宝篋印塔の造塔時期は1350年代に集中することが判明 し、遠江の安山岩製宝篋印塔の造立開始時期は南北朝期にあったと考えられる。遠江中部で確認 できた旧豊田町行興寺熊野御前の母(前号34)の反花座はこれらの1350年代の宝篋印塔よりも明 らかに後出する型式で14世紀後葉、同熊野御前墓(前号35)は応永年間(1394~1427)銘の妙法 寺宝篋印塔(前号33)と同型式の反花座をもつため14世紀末~15世紀初頭の時期にあてられる。 それにしても、安山岩製石塔の搬入時期は宝篋印塔と五輪塔と共に14世紀中~15世紀初頭の時期 幅の中に収まり、せいぜい古くても南北朝期から搬入が始まるのではないかと想定している。さ らに、安山岩製品中に変形あるいは混合式と呼ばれる塔身や相輪部分に五輪塔の水輪や空風輪を 用いた宝篋印塔が、旧榛原町清浄寺勝間田氏墓塔群と釣学院宝篋印塔で存在するが、何れも安山 岩製品で統一されるものでも石材間に微妙に個体差が認識できるか、全く別石材の凝灰岩製の部 材を用いるものも確認できるため、混合式は当初の造塔時の形態ではなくて、何時の時点か不明 ではあるがこの形態が好まれ再編され流行した時期があったのであろう。

さて、遠江西・中部での安山岩石塔は、海岸部の湊や東海道の宿場や遠江国府に影響力をもつ有力寺院に多く見られ、遠江東部でも遠江国府の有力在庁官人である横地氏関連寺院や勝間田氏の菩提寺である清浄寺に多く見られる傾向がある。前者は内陸の寺院であるが後者は勝間田川河口に設けられた川崎湊を支配した寺院である。さらに、時宗寺院ではないが萩間川河口に設けられた相良湊を支配した平田寺、旧浜岡町においても新野川河口に存在していたであろう小規模な湊を通じて東伊豆北部〜箱根山麓から海運で安山岩製石塔が運び込まれたことが想定できた。遠江中・西部地域の有力寺院はとくに宗派を限定することはできないが、やはり密教系の寺院が大きく関与していると思われる。これらの有力寺院と遠江国府の国守・守護が鎌倉時代では北条系の大仏氏、南北町期では今川氏であることと、同時期に箱根山麓〜伊豆東海岸を支配していた北条・足利系の在地領主が関係していたことは明白であろう。有力寺院が物資流通網の中核を担っており、それに時の有力在地領主が関与したなかで石塔が搬入されたことは前号で想定した(松井・木村・太田 2005)が、同様な内容を遠江東部でも確認することができたのである。

また、遠江国府域の寺院と遠江東部の寺院では明らかに時宗寺院に伊豆産安山岩製品が集中的に搬入されている状況が明らかとなっている。とくに勝間田氏の菩提寺である清浄寺裏山から出土した勝間田氏墓塔群や遠江東部一円に広がる安山岩製宝篋印塔の紀年銘が1350年代に集中することから、この年代の時宗寺院成立の宗教活動が読み取れ、遠江において安山岩製宝篋印塔が搬入され始める契機となった可能性すら指摘できる。この検討課題については駿河西部地域での安山岩製石塔の分布を提示する次号以降に回答を提示する予定とする。

古手の緻密な砂岩製石塔は遠江西部に分布の中心があるが、遠江中部でも西楽寺のような関西型式ないしその影響が強い五輪塔が山梨地区を中心として展開する状況を前号で明らかにした。しかしながら、今回の調査からでは遠江東部に搬入されている状況は確認できていないため、東海道沿では東別所墓地の製品が東限となっている。造塔時期としては、14世紀中葉の南北朝期よ

(32) 48

関東型式の流れを汲むと考えられるが、製作年代を知りうる紀年銘資料は得られていないため確実な製作時期は確定できないのが現状である。返花座の変形具合から見ると14世紀末~15世紀前葉に該当させることが可能と考えられる。なお、このタイプの宝篋印塔の反花座はすでに本間岳人氏により詳細に型式差、時期差が分析されている(本間岳人2006)が、この分析の正否については駿河西部の資料提示ができる次号以降の検討課題としておきたい。

長福寺タイプの褐色凝灰岩製大型宝篋印塔以外にも、関東型式の流れを汲む高さ1.5 ~ 1 mに なる中型の褐色凝灰岩製宝篋印塔も原産地に近い焼津市吉津墓地において応永6年(1399)銘宝 篋印塔(河合修2005)が確認されるほか、今回の調査で確認できた掛川市法泉寺の応永3年 (1396) 銘宝篋印塔、旧菊川町三光寺裏山墓地応安六年(1373) 銘宝篋印塔、旧浜岡町正福寺至 徳元年(1386)銘宝篋印塔があげられ、遠江中・東部全域にも広く分布していることが判明した。 これらを手がかりとすると中型宝篋印塔の造塔時期は14世紀後葉~15世紀初頭の幅のなかで考え られる。この中型宝篋印塔は型式差も確認でき、返花座は龍華院の短い花弁の表現のもの(105) と法寿庵の宝篋印塔(101)のような花弁の表現が失われたものの2種類が存在しており、おそ らく、前者の型式の笠は隅飾に文様があり基礎にも二窓が刻まれるもの、後者は隅飾の文様は失 われ基礎にも二窓が刻まれないものが組合になると想定している。このように、褐色凝灰岩製中 型宝篋印塔は遠江においては2型式確認でき、何れも関東型式の流れを汲み時期も14世紀後~15 世紀前葉の製作時期幅が考えられる。本稿では仮に前者の長福寺タイプの大型品をA類、後者の 中型品をB類としておきたい。B類は返花座の花弁の表現のあるものをB1類、ないものをB2 類に分類できる。しかしながら、先に紹介した緑色凝灰岩製で相良町平田寺宝塔(245)の基礎 は明らかに関西型式を示している。また、藤枝市鬼岩寺石塔群のなかに永徳元年(1381) 銘と応 永元年(1394)銘の紀年銘が刻まれる中型の褐色凝灰岩製宝篋印塔で、格狭間の表現は省略され るが明らかに関西型式の流れを汲む返花座の宝篋印塔が見られる。残念ながら完全な形態のもの が知られていないが、これらを別系譜のC類とする分類が可能となる。C類のなかにも花弁では なく段形をもつ笠名庚申堂の応永五年(1398)銘宝篋印塔(238)の例もあり細分可能(前者を C 1 類、後者を C 2 類と暫定分類しておきたい。)となっている。よって、凝灰岩製宝篋印塔に ついても関西型式と関東型式の2系統の宝篋印塔の存在が指摘できるが、何方が古い系譜となる かについては残念ながら今回の調査からは明らかにできず、紀年銘資料からも何方も14世紀後葉 ~15世紀初頭に時期幅が求められる。どちらにしても凝灰岩製品としては新しい時期に属する褐 色凝灰岩製宝篋印塔と五輪塔の製作集団である石工の系譜は、関東型式ばかりでなく関西型式か らの系譜が含まれていることは確実である。

このように凝灰岩製石塔は、原産地が駿河西部の焼津産であることが判明し、その成立当初には関西系の石塔(石工集団)が関係していたことが判明した。この一群の石塔は遅くとも14世紀初頭には製作を開始していたことは確実で、鎌倉を中心とする忍性の弟子たちによる東国での西大寺律宗系集団の布教活動とは微妙な時期となっている。しかしながら、東国での造塔の契機となった箱根町元箱根石塔群や沼津市霊山寺の大型五輪塔で見られるような西大寺律宗系集団に属する石大工(大蔵派)の手になる特有の14世紀初頭に遡る大型石塔は、今のところ平田寺の宝塔しか確認できないため、緑色凝灰岩製大型五輪塔の成立と西大寺律宗系集団を直接に結び付ける証拠は今のところない。遠江側の初期緑色凝灰岩製五輪塔の分布からは、内陸部の密教系寺院の周辺部に多く分布しており、遠江においてはこの手の石塔の流通に積極的に西大寺律宗系集団が関与していた痕跡はないといえる。現況からでは、忍性没後その弟子たちが東国の布教活動に邁進すると同時に、遠江では13世紀後葉から継続して密教系の僧侶の活動が活発で、西大寺律宗系集団と連動するように石塔製作が行われたと考えざるをえない状況ではある。しかしながら、この問題を解決するための原産地である駿河西部地域での石塔の調査と宗教勢力の検討は未だ途中

49 (31)

葉)、磐田市一の谷中世墳墓群第「ブロック13号火葬遺構出土銅製五輪塔(13世紀)、旧浜北市岩水寺に関係した伝勝栗山中世墓出土陶製五輪塔型経筒外容器(久安2年(1146)の紀年銘資料、遠江新所(湖西市新所)製作の記載)、あるいは陶製五輪塔型経筒型外容器は旧渥美町皿焼2号窯(II 期=12世紀後葉)出土の資料もあげた。これらの遺物から遠江地域では12世紀~13世紀前葉に五輪塔型の宗教品に触れる機会があり、基となった石製五輪塔が13世紀前葉にすで存在していたことを証明する遺物とも考えられる。ちなみに、西山祐二氏の行った高野山の明遍上人墓地の初期五輪塔の分類とこのA類五輪塔を比較すると、水輪は球形に近く異なるが空風輪と火輪の形態は同形態となるタイプIに最も類似する。12世紀末~13世紀中頃の時期幅の中に収まるとしたタイプI~IIの最古型式がタイプIである(西山祐司2004)。しかしながら、A類五輪塔が畿内で13世紀後葉まで残らない型式であること、あるいは伝文覚上人五輪塔の年代が確実に13世紀前葉の年代に収まる前提条件が整えば、当然遠江におけるA類の年代も13世紀前葉の年代が与えられようが、今回は根拠となる畿内での比較資料の収集が伝文覚上人五輪塔と高野山の初期五輪塔石塔としかできていないため、可能性の指摘に留めざるをえない。

以上の様相から推測を混じえて敢えて年代観を強引にあてはめると、A類五輪塔は13世紀前~中葉、C類の噛合式五輪塔とB類のなかでも新しい要素のある蔵平中世墓例をB2類とし13世紀後葉に、水輪がA類で火輪がB類となる両方の形態を含むものをB類のなかでも古いB1類とし(旧浜北市岩水寺塔・原氏墓塔例)13世紀中葉、後出型式の法多山や想慈院のD類の五輪塔が13世紀末葉ということになろう。これらの遠江最古型式の石塔はおそらく文永年間あるいはそれ以前から高野山を中心とし東国に向かって進められた真言密教や天台密教も重なった新たな教線の確保のための道具の一つとして導入されたと考えたい。さらに、古式の花崗岩製五輪塔の分布は北伊勢~美濃地域にも存在し、これら地域と近畿圏花崗岩製五輪塔との比較検討も今後必要となる。

その後、焼津産凝灰岩製品のうち梵字が全ての輪に入る華麗な緑色凝灰岩製大型五輪塔の生産が開始される。梵字の刻まれる製品の中に月輪が見られるものも存在するため成立に関西型式石塔との関係も考えられる。生産の開始時期は緑色凝灰岩を使用した平田寺宝塔に延慶三年(1310)の紀年銘があることから見ると14世紀初頭の時期と考えておきたい。14世紀前葉でも中頃に近くなると、全ての輪に梵字が入るものは少なくなり、掛川市観音寺跡の貞和二年(1346)年銘五輪塔のように中型品も顕著に見られるようになる。掛川市法泉寺の応永三年(1360)銘褐色凝灰岩製五輪塔を嚆矢として、14世紀後葉には褐色凝灰岩製大型五輪塔の製作が開始されると考えられる。

さらに、凝灰岩製宝篋印塔の石材は緑色ではなくて褐色系のものが多く使用されているのは、この褐色凝灰岩製大型五輪塔の製作が契機となっている可能性が高いことを指摘しておきたい。 紀年銘資料から褐色凝灰岩製宝篋印塔の製作年代を確認すると、14世紀後葉~15世紀初頭に生産の主体が認められることと、褐色凝灰岩製大型五輪塔の製作年代が合致するのではなかろうか。 宝篋印塔も平田寺宝塔と共に関西型式の影響が見られるものがあり、古手の五輪塔と同様に関東型式ばかりでなく関西型式の宝篋印塔も同時に製作していたと想定したい。

次号に備えて凝灰岩製宝篋印塔を暫定的に分類しておくことにしたい。まず、高さ1.5m以上の製品が中心となる大型宝篋印塔で、反花座が長く伸び変形し、笠に別造の露盤が伴うような旧掛川市長福寺宝篋印塔、その末寺である宗塔庵跡と照月寺の宝篋印塔部材、妙日寺貫名氏墓塔の原野谷川中流域の天台宗系寺院に集中的に分布している(とりあえず長福寺タイプの宝篋印塔としておく)石塔が注目される。この長福寺タイプの宝篋印塔は遠江中部では山梨の正福寺に関連部材が、遠江東部全域を見渡すと旧浜岡町の朝夷様、旧相良町の大聖寺や正福寺に関連部材が、駿河西部でも本川根町伝小長井守墓塔、島田市智満寺石塔群でも確認されており、広く遠江中・東部ばかりでなく、原産地に近い駿河西部全域に分布している型式の宝篋印塔であることが判明した。かなり変形はしているものの、返花座や基礎の型式から見ると安山岩製宝篋印塔と同じく

(30) 50

候補としては清浄寺のような時宗寺院、あるいは平田寺のような有力寺院が核になり搬入された のは間違いないだろう。

当地域最古型式の石塔である花崗岩製五輪塔は、後出する型式(D類)ながら遠く畿内方面よりの搬入が想定され、本地域では今のところ新野川流域(現想慈院所在)のみ単独に確認されている。この石塔からは安山岩製五輪塔の一定の分布と共に旧浜岡町地内における新野川流域の優位性が指摘できる。また、この新野川流域では凝灰岩製五輪塔・宝篋印塔の両者が混在するのに対して、新野川の支流である朝比奈川南岸および比木地区では褐色凝灰岩製宝篋印塔が主体となる(本間岳人2006)ことから、凝灰岩製石塔についても明らかに前者の地域が古い頃から造塔がなされており、新野川流域の優位性が石材の多様性ばかりでなく石塔の種類・時期からも言える。おそらく、新野川流域ではこの地域を支配していた新野氏と関係していた寺院勢力が造塔の主体で、文献には現れない湊を介して搬入された状況を石塔の分布から読み取ることのできる可能性を指摘しておきたい。しかしながら、平田寺や清浄寺のような湊を支配した圧倒的な有力寺院は新野川河口部では文献上で確認できないことから見ると、各谷ごとに分散したより小規模な寺院勢力により石塔が持ち込まれ、文献に現れるような寺院が支配する大規模な湊を介在させない搬入の可能性も否定できない。

上記のような石塔の流通に関与していた有力寺院は、すでに斎藤慎一氏が指摘するように、遠江東部沿岸地域に存在していた中小河川の河口部に営まれた湊への権限に深く関わっていたと考えられる(斎藤慎一2005 a · b)。具体的には相良荘では平田寺が関与する相良湊、勝田荘では鹿島社・清浄寺が関与する川崎湊が存在し、新野川河口付近にも小規模な湊の存在も推測でき、在地領主の本拠と河川を通じて結びついていたのであろう。

このように、今回取り上げた遠江東部沿岸部地域での古式石塔の在り方は、湊を管理していた 宗教勢力、それと結びついていた国人などの在地領主層の影響力を知るうえで有力な手掛になる と思われ、今回提示できた資料と全てを図示できなかった清浄寺の石塔群や駿河西部地域との関 係を追及することで文献資料の少ない小地域の中世史の解明と考察が深化されれば幸いである。

(溝口彰啓)

5. 遠江中・東部域の出現期の石塔がもつ歴史的背景 (考察)

本号では遠江中・東部を中心として鎌倉〜室町期に該当する古式石塔を概観してみたが、石材 ごとに傾向をまとめ、その結果当該地域の古式石塔がもつ歴史的背景の一端を考察したい。

遠江の最古の石塔は花崗岩製五輪塔で、高野山を中心として分布する噛合式石塔も含まれている。静岡県最古の花崗岩製五輪塔の一群は明らかに、東国の造塔に大きく影響を与えた叡尊・忍性以降の西大寺律宗系集団の活動以前の造塔となることは確実である。法多山の石塔からは遠江で強靱な教線を誇っていた高野山を中心とした真言密教系集団との係わりで考えざるを得ない。狭川真一氏によると高野山での噛合式石塔の造営を、町石の中に噛合式五輪塔になるものが見られることから町石が整備される時期と符合し、文永~弘安年間のうち1267~1287年前後する年代と考えた(狭川真一2005)。この年代からは遠江における花崗岩製品五輪塔の出現を考えると噛合式五輪塔のC類の年代は13世紀後葉となる。

しかしながら、噛合式とはならない永安寺の五輪塔、法多山墓塔群部材で確認されたA類の五輪塔の形態は13世紀前葉とされる京都市神護寺伝文覚上人五輪塔(小野勝年1970)に酷似し、そのままこの年代をあてはめるとA類五輪塔の年代は13世紀前葉となってしまう。すでに指摘したように遠江では、12~13世紀に該当する石製五輪塔以外の五輪塔関連遺物が知られている(松井一明2005 b)。すなわち、旧菊川町土橋遺跡 S D 3 出土の木製五輪塔空風輪(12世紀~13世紀前

はない。おそらく262 の右窓に建武四年(1337)に死亡した住一房のために文和三年に造塔した記述方法と同様に、本石塔も元徳四年に死亡した也阿弥陀仏のために文和三年に造塔した解釈をすると矛盾しない。この年号や阿弥陀仏の記述から見ると両石塔は共通する内容をもつので、勝間田氏墓塔群と同一の場所にあったものを鈞学院に安置した石塔と考えたい。混合式石塔の塔身と相輪の代わりに用いられた安山岩製五輪塔の部材は、269 aの四方に梵字が刻まれた大型の空風輪、270 cの最大径が中央にあり四方に梵字が刻まれるものは古手の宝篋印塔と同時期と考えても良いが、その他の五輪塔については水輪の最大径が上半分にあったり、梵字が省略される空風輪であり後出する型式と見られる。緑色凝灰岩製五輪塔も272 c・dのような水輪のみに梵字が刻まれるものが古手で、これらは古手の安山岩製品と同時期と見られるが、271 a・b・dの五輪塔や267 b・e・268 b・269 bの宝篋印塔部材などの褐色凝灰岩製品や新しい型式の安山岩製五輪塔と同時期になると思われる。図示していないが室町期に該当する石塔部材、戦国期に降る凝灰岩製小型五輪塔や地元砂岩製小型五輪塔も多数存在するが後日紹介したい。

中地区に所在する大井家墓地の一角に、付近の中世墓から出土したと伝えられる274 ~280 の 石塔群が集積されている。なかでも280 の関東型式の小型宝篋印塔の基礎には、遠江の安山岩製 品としては最古の正和元年(1312)の紀年銘が読み取れる。しかしながら、同一個体と思われる 笠は小型品で露盤の二窓が省略されるなど、どう見ても14世紀末葉以降を示す型式と考えられ、 刻まれた年号とは合致しない。おそらく本石塔の紀年銘も没年を記したもので、実際の造塔時期 とはならない資料である可能性を指摘しておきたい。ただし、清浄寺や鈞学院の石塔と同様に阿 弥陀仏銘が入るため、14世紀中葉以降の時宗寺院で造塔された製品であるはことは確実で、おそ らく勝間田氏関連の時宗寺院による中世墓に含まれる石塔であろう。274 ~278 の緑色・褐色凝 灰岩製小型五輪塔の多くは戦国期に降る。勝田地区の中田家裏山墓地に所在する281~284 の褐色凝灰岩製大型五輪塔は三基一対の組合になる石塔群である。281 ・282 が本来の形態で完 品は281 のみであり、282 は空風輪を欠き新しい型式の宝篋印塔の笠を乗せ、284 の空風輪・火 輪・水輪は戦国期の緑色凝灰岩製小型五輪塔で全くの後補である。281 ・282 の火輪の軒の反り は緩やかで、高さも減じ水輪に梵字は刻まれない褐色凝灰岩の中でも新しい型式で同時期のもの である。284 の地輪は砂岩製の地輪で、3 塔のなかでは一番の大きい部材である。戦国期の地元 産砂岩とは異なる石材で、あるいはこれが中央塔の地輪であった可能性もある。時期は塔の型式 から見ると明らかに14世紀末葉~15世紀初頭の室町期に該当するもので、勝田という場所に所在 することから見て、勝間田氏の寺院に関係した石塔であった可能性は高いだろう。

(3) 小 結

以上旧浜岡町、旧相良町、旧榛原町域の石塔を概観したが、気づいた点をいくつか挙げつつ、遠江の古式石塔に特徴的な緑色・褐色凝灰岩、安山岩、花崗岩製品を中心に考察を試み小結としたい。緑色・褐色凝灰岩は室町期以前の古式石塔ばかりでなく、戦国期の石塔として最も普遍的にみられる石材であることが判明した。また、今回割愛した砂岩製小型石塔とともに戦国期の小型石塔の主要石材となっており、本古式石塔のなかでも褐色凝灰岩製宝篋印塔の比率が高い印象を受けている。その原因は凝灰岩製石塔の産地である焼津市高草山ないし当目山とは沿岸部を通じ、海運により当地域に比較的運ばれてきたと考えれば合点がいくであろう。

海運という視点に立てば、より遠距離の原産地となる安山岩製石塔が搬入されたルートも当然 海運を利用し、湊を支配する寺院勢力のもとに安山岩製石塔が見られるという遠江中・西部で得られた成果と全く同じ結果が追認できた。当地域の安山岩製石塔は五輪塔と宝篋印塔が知られ、 旧浜岡町では新野川流域を中心として面的に広がるのに対して、旧相良町や旧榛原町では河口部 に近い寺院に集中する傾向が認められ、面的な分布を示す凝灰岩製石塔とはいささか異なる分布 状況を示している。おそらく、安山岩製石塔は特定の寺院勢力に限定的に搬入された石塔であり、

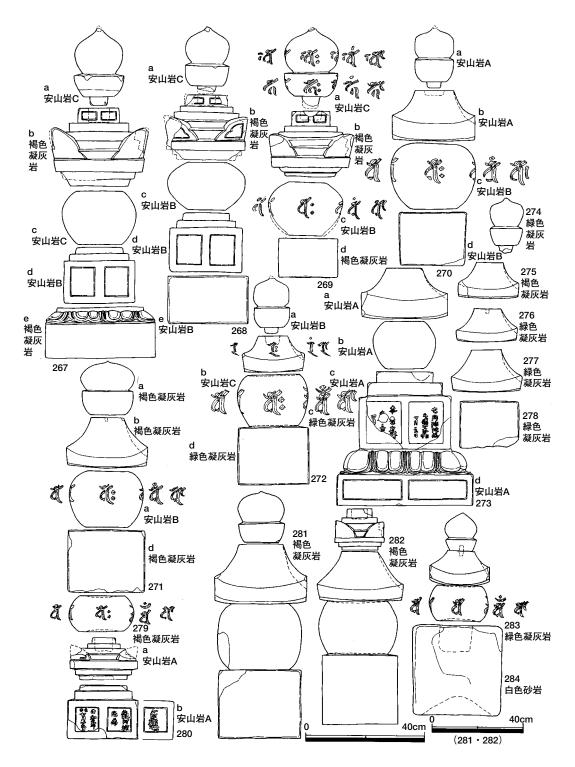
(28) 52

認された244 についても、笠が小さく直立した隅飾で露盤が別造りになりそうな褐色凝灰岩製大型宝篋印塔であり、この部材も縦長弁の反花座をもつ褐色凝灰岩製大型宝篋印塔系に属するであろう。若宮八幡神社裏墓地には付近を開墾中に出土したと伝えられる241 ~243 の安山岩製五輪塔の火輪3点が確認される。241 は崩れた梵字が確認できるが、他は梵字が省略されるなど新しい型式の五輪塔である。なお、斎藤慎一氏の考察によると菅ケ谷堀之内地区では、中国製磁器が採集される遺跡が所在すること、「堀之内」の地名があることから中世相良氏の居館を想定している(斎藤慎一2006)が、これら石塔群は明らかに14世紀後葉に降る製品で、文献からの考察が正しければ直接相良氏に関係した石塔か疑問が残る。全て九州に移住したとされる相良氏ではあるが、一部の勢力が残っていた可能性はないのであろうか。

平田寺は遠江東部沿岸地域の寺院のなかでは屈指の名刹である。弘安六年(1283)の開基と伝えられ、今回報告する県指定文化財である宝塔を含む多くの寺宝が残されている。245 の特殊な形態の宝塔は相輪が褐色凝灰岩(桃崎氏は砂岩製の後補とするが同一個体である。桃崎2005)である以外、良質な緑色凝灰岩を使用した他に類例のない特注品と考えられる。反花座は省略されるが格座間をもつ関西型式の基礎には延慶三年(1310)の紀年銘が刻まれており、現在確認できている緑色凝灰岩製石塔としては最古の製作年号が刻まれた重要な石塔である。相輪の九輪は沈線化する以前の立体表現され、露盤も関西型式の格座間をもつ別造、笠は垂木の表現のない五輪塔の火輪に類似する造りを示す。塔身には四角で火灯窓型式の二窓が四方に刻まれる他に類例のない特殊な形態となっている。裏山の墓地にも古式の石塔が多数残されており、252・253 の四方に梵字を刻む緑色凝灰岩製五輪塔が古手で、以後256 b・cの褐色凝灰岩製五輪塔と248・249・251・254 の安山岩製五輪塔の部材、その後257 の新しい型式の褐色凝灰岩製玉輪塔と248・249・251・254 の安山岩製五輪塔の部材、その後257 の新しい型式の褐色凝灰岩製宝篋印塔の造塔が続くと考えられる。259~261 は平田寺付近の大江平田経塚の石塔群、258 は霊松庵跡西南墓地の五輪塔部材で、258 の緑色凝灰岩製大型五輪塔は梵字を欠く新しい型式の水輪、259 の安山岩製小型五輪塔は戦国期に近いもの、261 は在地の砂岩製宝篋印塔としては古手の型式、260は戦国期の緑色凝灰岩製小型五輪塔で、平田寺を中心とした寺院群に含まれる石塔であろう。

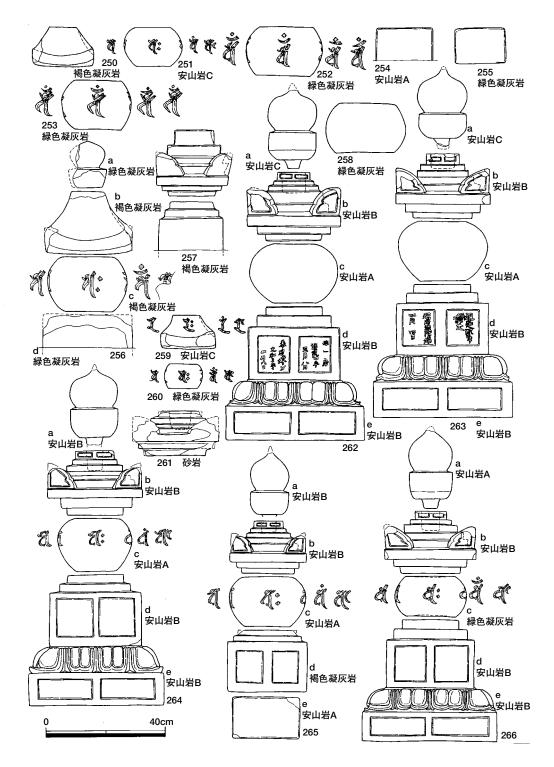
旧榛原町域の石塔群としては遠江沿岸部の時宗寺院として有力な清浄寺の勝間田氏墓塔群に多 くの古式石塔が集中するほか、関連の石塔が鈞学院に所在し、内陸部にも大井家墓地に紀年銘資 料の石塔部材が、田中家裏山墓地に褐色凝灰岩製大型五輪塔が残されている。清浄寺の勝間田氏 墓塔群のうち古手で良好な組合の石塔を選別して第11~12図に示したが、紙面の関係で半数のみ の掲載とした。清浄寺は勝田荘に勢力をもった勝間田氏の菩提寺で、時宗寺院として弘安六年 (1286) の開基と伝えられている。石塔群は裏山の中世墓に散在していたものを寄せ集めて、現 在の場所の覆屋内に大切に保存され市指定文化財となっている。今回の調査でも同一個体の石材 をもつ組合は一つもなく、混合式の石塔が本来の姿を示すものではないことが確認された。ただ し安山岩製宝篋印塔のうち262 の文和三年(1354・北朝)、263 の観応二年(1351)の紀年銘を もつ基礎と反花座は石材と寸法からは同一個体と見られる。おそらく262 bや263 bと同形態の 笠が組み合わせになると考えられるが、塔身・相輪のほとんどが選別的に失われているため全体 型式の復元は困難である。262 ・263 ・264 ・266 の反花座は下半部が二窓式となる関東型式で、 肉彫りされた隅を跨ぐ4弁の複弁蓮華文で飾られ、遠江で確認できる安山岩製宝篋印塔のなかで は最古型式の部類に属する。273 の鈞学院に所在する安山岩製混合塔は、上半部が安山岩製五輪 塔の火・水輪、下半部が安山岩製基礎と反花座である。下半部の部材は寸法と石材から見ると同 一個体で、基礎部分右窓に元徳四年(1332)の紀年銘が確認でき、14世紀前葉に遡ることのでき る安山岩製宝篋印塔として知られていた(桃崎祐輔2000他)。しかしながら、今回の調査では左 窓に一部剥落しているが文和三年らしい紀年銘の造塔時期が確認できた。反花座から見ると262 や263 と同時期で従来の解釈では型式差を説明できなかったが、文和三年の造塔ならば何ら問題

53 (27)



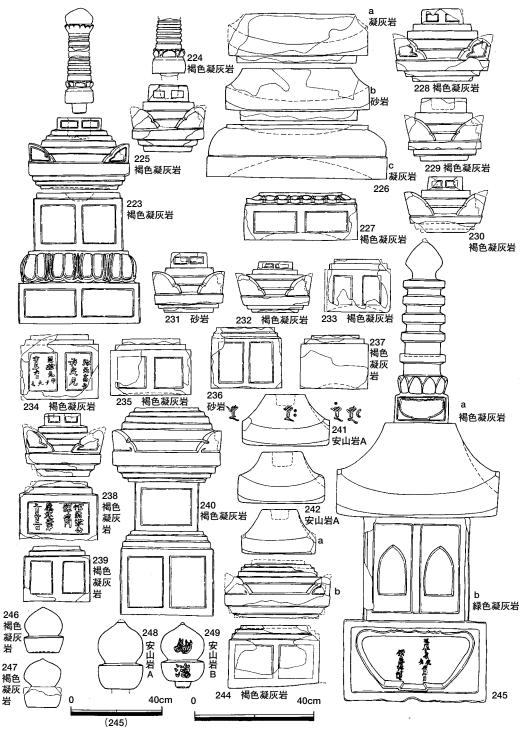
第12図 遠江中・東部の石塔実測図12

(267~272 清浄寺勝間田氏墓 273 鈎学院 274~280 大井家墓地 281~284 中田家裏山墓地)



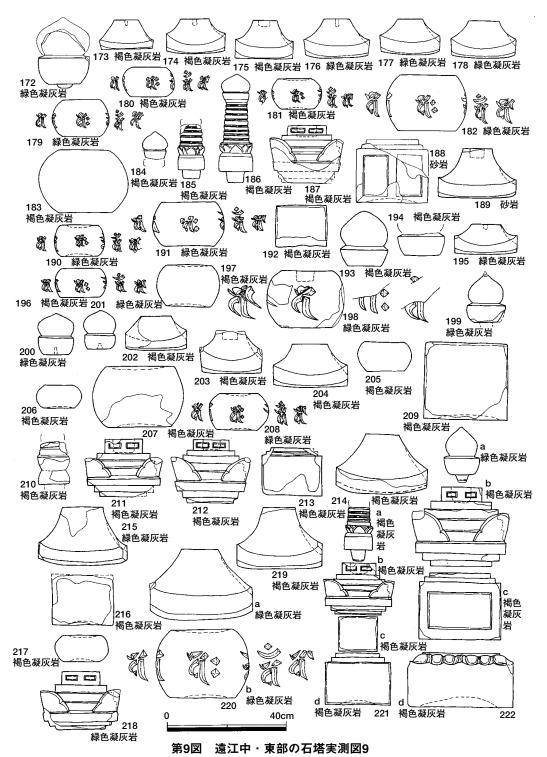
第11図 遠江中・東部の石塔実測図11

(250~257 平田寺墓地 258 霊松庵南西墓地 259~261 大江平田経塚 262~266 清浄寺勝間田氏墓)



第10図 遠江中・東部の石塔実測図10

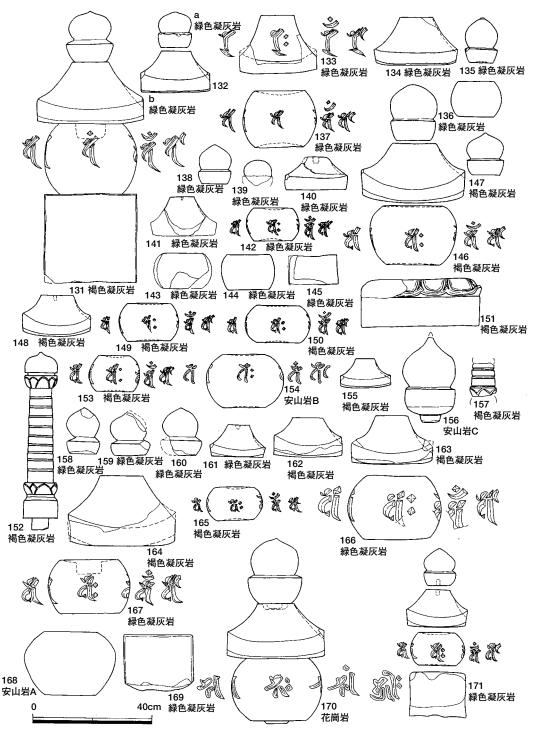
(223~225 朝夷氏墓 226·227 池宮神社 228~237 正福寺 238·239 笠名夷申堂 240 大聖寺 241~243 若宮八幡神社裏墓地 244 正福寺跡 245 平田寺 246~249 平田寺墓地)



(172~188 想慈院B群 189~192 篠ヶ谷墳墓群A群 193~197 篠ヶ谷墳墓群B群 198 篠ヶ谷観音堂 199~213 閑田院 214~218 法蔵寺跡 219~220寺藪五輪塔 221 下水神社 222 切石様)

(23)

57



第8図 遠江中・東部の石塔実測図8

(131 小堤城跡 132 谷田寺跡 133·134 安興寺 135·136 小沢家祠 137 地蔵堂内 138~145 川西赤堀家墓地 146~152 高橋 赤堀家墓地 153 和田家墓地 154·155 正林寺 156·157 釜原墓地 158~169 想慈院A群 170~171 想慈院B群)

段下2段で露盤に二窓が刻まれるが、隅飾は外傾が著しく文様は省略されるなど新しい型式的特 徴も見られる。ただし、凝灰岩製宝篋印塔は褐色が主体で緑色凝灰岩が使用されるのは珍しい。

下朝比奈地区の石塔のうち閑田院、寺藪五輪塔を図示した。閑田院では207 ・209 のような横幅30cm以上になる褐色凝灰岩製大型五輪塔の部材、211 ・212 の隅飾が無文化した褐色凝灰岩製宝篋印塔の笠が室町期の古式石塔と見られる。それ以外の緑色・褐色凝灰岩製小型五輪塔は戦国期に該当する。寺藪五輪塔は220 の火輪は梵字が省略されるが、水輪の梵字の彫りは深く緑色凝灰岩製大型五輪塔でも新しい型式のものと、219 の褐色凝灰岩製大型五輪塔ながら火輪の高さが高く軒の反りが大きい古い形態で、両者は接近した時期ながら前者が先行すると考えたい。

上朝比奈の222 の石切様は客死した僧侶の供養塔と伝えられ、同一個体の褐色凝灰岩製宝篋印塔1基が祀られている。aの緑色凝灰岩製五輪塔の空風輪以外は同一個体の可能性が高い。笠は大型品ではあるが隅飾の外傾が著しく無文化した新しい型式と見られ、梵字は刻まれないが窓が刻まれた塔身、格座間は省略されるが形骸化した関西型式の反花をもつ基礎など、関西型式の褐色凝灰岩製宝篋印塔のなかでも新しい型式を知るうえで貴重な資料である。おなじ上朝比奈地区に223aの朝夷様(朝夷三郎墓)と地元で伝えられる褐色凝灰岩製宝篋印塔が存在する。相輪の花弁の形態は古い表現をなすが九輪は沈線化し、笠は軒上6段下3段で隅飾は直立気味で文様が刻まれる古い要素、基礎は二窓式で段形1段であるが改変がなされているため古い要素のあるもの、反花座も花弁は縦長であるが立体的な花弁の表現で隅を跨がない4弁の複弁蓮華文、下半には二窓が刻まれる関東型式の特徴を示す。掛川市長福寺や宗塔庵の反花座の縦長花弁の大型宝篋印塔の系譜の中で捉えられるもので、大きさは一回り小さいが反花座や笠の形態は明らかに朝夷様石塔のほうが先行する型式で、この系譜の大型宝篋印塔のベースとなった型式の石塔と見られる。

佐倉の池宮神社は遠く諏訪湖に通じている説話のある桜ヶ池に隣接した場所にあり、大型の石塔部材が古くから安置されていた。226 の多層塔もしくは宝塔の部材と報告されているが、笠の形態から見ると多層塔の可能性が高い。遠江の多層塔の類例は旧浜北市自徳院の安山岩製多層塔(13重塔か?)があるのみで、希少性のある資料である。石材も砂岩や凝灰岩製品で、砂岩以外は明らかに他地域からの搬入品であるが、確実な産地・石材は特定できない。反花座の花弁や下半の窓は省略されているため、南北朝期以前に遡るものではないだろう。池新田地区の下水神社の221 の宝篋印塔は、九輪が沈線化した相輪、隅飾の外傾が著しく無文化した笠、梵字や窓が刻まれない塔身、窓が省略された基礎など、褐色凝灰岩製宝篋印塔のなかでも小型化した最新型式を示す貴重な資料である。比木の正福寺には228~237 の宝篋印塔の部材が集積されている。なかでも234 は至徳元年(1384・北朝)の旧浜岡町唯一の紀年銘資料であり、褐色凝灰岩製宝篋印塔の年代を知るうえでの基準資料となっている。他の部材で笠の形態から見ると228 が高い露盤と大きな窓、隅飾に文様が刻まれるなど古い型式をなし、他の笠は新しい型式の特徴が見られる。基礎も窓が刻まれない237 は下水神社宝篋印塔と同型式で同時期の所産と見られる。

旧相良町域では南からあたると、238・239の笠名庚申堂に祀られている褐色凝灰岩製宝篋印塔のうち238は紀年銘資料となる。238は格座間は省略され、反花は段形となるが関西型式と見られる基礎に応永五年(1398)の室町期の紀年銘が刻まれている。同一個体と思われる笠は外傾著しい隅飾であるが文様は刻まれ、旧浜岡町の下水神社の宝篋印塔よりも明らかに古い型式を示しているため、下水神社の宝篋印塔は15世紀前葉に降る可能性が指摘しうる。菅ヶ谷の大聖寺には240の褐色凝灰岩大型宝篋印塔が住職墓と共に祀られている。相輪・反花座を欠くが同一個体と思われるもので、笠は軒上6段以上下3段で隅飾は小さく直立し文様が刻まれ、塔身には梵字はないが窓は刻まれ、基礎は段形3段で二窓が刻まれている。おそらく笠の露盤が別造りで小さな直立する隅飾である特徴から見ると、掛川市長福寺宝篋印塔系の縦長弁の反花座をもつ褐色凝灰岩製大型宝篋印塔の系譜に属すると考えられる。大沢の正福寺跡(現大沢八面神社付近)で確

59 (21)

旧相良町は萩間川が作る平野部を中心として相良荘が立券され、相良湊を管理した平田寺と在地領主である相良氏が古式石塔を造立した政治的勢力と想定される。しかしながら相良氏は所謂西遷御家人で鎌倉初期に肥後人吉に所領を与えられ一族のうち本家は九州に移り住んだが一部は相良の地に残留したと言われている。その後14世紀初頭までには全ての勢力が九州へ移住したと伝えられている(相良町1998)ため、主たる造塔集団とは考えられない。平田寺の開基には相良氏が係わった可能性はあるが、14世紀以降の在地領主は平田寺以外は定かではない。南北朝~戦国期にかけて平田寺は駿河守護今川氏からの保護を受け、周辺地域にも寺領を安堵され、戦国期に相良湊の権利を認められていたという(斎藤慎一2005 a)。旧相良町域については桃崎祐輔氏が中心となって実施された悉皆調査の成果から、戦国期の砂岩製小型石塔を除いた古式石塔を含む石塔群を選別し、再トレースして掲載した(相良町教育委員会2005)。

旧榛原町の中世段階は勝間田川が作る平野部を勝田荘の中心域とし、静波や旧相良町片浜の海浜部を含む領域であったと考えられる。勝田荘は勝間田氏の本貫地として知られ、勝間田氏は横地氏とならんで遠江国府の有力在庁官人であったと言われている。勝間田川河口付近の丘陵地には、川崎湊の利権を認められていたであろう清浄寺が時宗の有力寺院として道場を構えていた。その裏山には今回報告する勝間田氏墓塔群と伝えられる石塔群を有する中世墓が営まれていた。さらに勝間田川流域を少し遡ると、勝間田氏関連の寺院に関係した石塔群も存在している。

(2) 石塔の説明

旧浜岡町域の石塔は第8~12図に示した。新野地区の石塔のうち種類が多く、時期も古式石塔 を多数含む想慈院の石塔群が注目される。ただし、想慈院にある二箇所の石塔の集積のうち門前 の集積(A群)は現浜岡北小学校となっている新野・朝比奈村の集合墓地から移転されたもの、 墓地北側の集積(B群)は篠ヶ谷地区の諸廃寺から移転され想慈院に属する石塔ではない。まず 旧浜岡町最古の石塔として170 の花崗岩製五輪塔を検討したい。地輪を欠くがそれ以外同一個体 と思われ、各輪の接合方法は花崗岩製五輪塔に特有なほぞ穴式である。空風輪は横長形態、火輪 も高さはあまり高くはないが軒の反りは大きく、水輪も横長で、梵字は水輪にしか入らないため、 花崗岩製五輪塔の中では比較的新しく蔵平中世墓の花崗岩製五輪塔に後続する法多山のD類型式 と考えられ、造塔時期としては古手の緑色凝灰岩製五輪塔により近い13世紀末葉と想定される。 緑色凝灰岩製五輪塔は166 ・167(上部に納入孔が入る。)・182 のような大型の水輪に彫りの深 い丁寧な梵字を四方に刻むものが古手であるが、同じ緑色凝灰岩製でも158~161 ・171 ・176 のような小型五輪塔については戦国期に降る製品と考えられる。褐色凝灰岩製品のうち164・ 183 のように大型品が比較的古い部類に属するが梵字は水輪ですら省略されるため、緑色凝灰岩 大型五輪塔に後出すると見られる褐色凝灰岩製五輪塔の中でも新しい型式を示す部材である。褐 色凝灰岩製宝篋印塔は、184~187の相輪と笠の中型品の部材が確認されている。相輪の請花の 花弁は肉彫りであるが九輪は沈線化しており、笠も軒上5段下2段で露盤に二窓が刻まれるが、 隅飾は外傾が著しく文様は省略されるなど新しい型式の特徴が見られる。188 は段形2段の二窓 式で、地元砂岩製ながら古式の型式を保つ。168 は安山岩製五輪塔の水輪で、梵字が省略され最 大径が上半部にある新しい型式である。想慈院の墓地に持ち込まれた石塔のうち現篠ヶ谷地区に 残された石塔は、189 ~197 で付近の中世墓から出土した石塔の集積と、198 の観音堂に安置さ れた五輪塔部材が確認された。198 の緑色凝灰岩製の五輪塔水輪は、梵字がやや崩れた緑色凝灰 岩製大型五輪塔の新しい型式の特徴を示す。191 の緑色凝灰岩製中型五輪塔と、193 の褐色凝灰 岩製大型五輪塔部材には古い型式的特徴が見られるが、梵字が刻まれる水輪も含むが、その他の 緑色・褐色凝灰岩製小型五輪塔は戦国期に降る。214 ~218 は法蔵寺跡石塔群で現在黒田公会堂 の片隅に集積されている。215 は緑色凝灰岩製五輪塔の火輪で軒の反りは大きいが梵字は省略さ れ、高さが減じるなど新しい型式的特徴が見られる。218の緑色凝灰岩製宝篋印塔の笠は軒上5

(20) 60

段横地旧公会堂で確認できた安山岩製五輪塔もこの搬入ルートで理解したい。なお、横地氏関連の石塔のうち慈眼寺で確認された緑色凝灰岩製五輪塔が圧倒的に古い。三光寺裏山墓地ではこの手の石塔の部材は確認できないので、横地の谷で最初に石塔が建てられたのは慈眼寺で、遠江中・西部と同様に真言密教系寺院が当初関わっていたことを示している。

旧小笠町では赤土荘域に古式の石塔が集中的に展開することがわかった。なかでも小堤城中腹で確認できた褐色凝灰岩製五輪塔は良品で、おそらく三基一対の五輪塔となるものであろう。遠江中部で確認できた緑色凝灰岩製五輪塔の組合が、東遠江では褐色凝灰岩製五輪塔の組合で時期は降るが存続していたと想定したい。類例は勝間田氏関係の中田家墓地褐色凝灰岩製大型五輪塔と同じ時期の三基一対の五輪塔を見ることができる。古い石塔は安興寺の緑色凝灰岩製五輪塔が慈眼寺の緑色凝灰岩製五輪塔に匹敵する古い時期のものとなろう。安山岩製五輪塔は正林寺で確認でき、旧浜岡町や旧相良方面の湊から持ち込まれたと想定される。赤土荘については詳しい文献もなく有力国人領主の存在も明らかではないが、石塔から見ると横地氏や関連寺院群と同様に赤土荘を在地で支配した寺院と在地領主層の存在を石塔の分布から想定することができた。

以上のように掛川・菊川市域における古式石塔については、荘園ごとにその支配階級である寺院と在地領主層に普及していた。しかしながら、今回調査の結果からは全ての荘園に普及していた状況を示してないことが明らかとなり、今後特定の荘園に普及した理由を解明する必要がある。また、懸川宿や日坂宿の宿場を支配した寺院の解明が急務となろう。遠江中・西部の同性格の寺院のように安山岩製石塔を含むのかどうか注目される。安山岩製石塔に関しては遠江東部では時宗寺院との係わりが無視できない。勝間田氏や横地氏関連寺院と遠江国府の寺院との関係が石塔から浮かびあがってきた。 (木村弘之)

4. 旧浜岡町·旧相良町·旧榛原町地域

旧浜岡町は現御前崎市、旧相良町と旧榛原町は現牧之原市として合併を完了している。当地域の石塔の分布は何れも沿岸部に所在する点では共通するが、旧相良町と旧榛原町は単独の河川ごとにまとまるのに対して、旧浜岡町は幾つかの小さな谷ごとにまとまる傾向が読み取れた。

旧浜岡町の荘園としてはまず町西域と旧大東町や旧横須賀町とあわせて笠原荘の存在が知られ いるが、今のところこの荘園域には古式石塔の存在は知られていない。しかしながら、菊川河口 には浜野浦と呼ばれる湊の存在(斎藤慎一2005 b)も判明しているため、今後もう少し詳細な調 査を進めるとこの地域でも古式石塔が発見される可能性は残されている。町中央域の新野川流域 では明確な荘園は認められないが、文献で新野氏の存在が確認でき、一定の政治権力が集中した 地区であると理解される。新野氏は『吾妻鏡』に横地・勝間田(勝田)氏と共にその名前が見え る遠江東部の御家人で、戦国期でも新野氏の名前はしばしば文献に登場し、今川氏の一族である ともいわれている(浜岡町1978)。なお、新野の左馬武神社には新野左馬助の墓と伝えられる石 塔が存在するが、新野氏と関係した石塔が造立された有力な寺院はほとんど判明していない(本 間岳人2006)。町東域には朝夷様の石塔と伝承された朝夷氏?の支配域である朝比奈川流域、荘 園としては比木地区に比木荘の存在が伝えられるが、在地領主の名前は定かでなく、荘園の実態 も明らかではない。しかしながら、この地域においても石塔の一定量の分布が浜岡町史の悉皆調 査で判明したたため、荘園に関係した在地領主や有力寺院が存在していたことが想定できた。町 東域・旧御前崎町や旧相良町南域に存在していた白羽荘や波津荘の中心的寺社勢力、在地領主の 実態は解明されておらず、この領域での古式石塔は今のところ確認されていない。なお、今回紹 介する旧浜岡町の古式石塔の資料は本間岳人氏が中心となって実施された悉皆調査の成果から、 戦国期の砂岩製小型石塔を除いた古式石塔を選別し再トレースして掲載した(御前崎市2006)。

61 (19)

あるが、総じて形態は退化し戦国期に降る製品である。151 ・152 は褐色凝灰岩製宝篋印塔の部材である。152 の相輪は請花に削出の花弁を刻むが九輪は沈線化しており、151 の反花座の花弁は四隅に弁を跨ぐが弁数が減じ表現も単弁の退化したもので、下半の窓も省略されるなど新しい型式の宝篋印塔基礎になろう。153 は星ヶ谷の和田家墓地にある褐色凝灰岩製小型五輪塔であり、四方に梵字を刻むが退化したもので戦国期に降る。154 ・155 は奥磯部の正林寺墓地の五輪塔部材である。154 は退化した梵字が刻まれた水輪で新しい型式の安山岩製中型五輪塔、155 は褐色凝灰岩製小型五輪塔の火輪で戦国期に降る。なお正林寺には今川義忠供養塔とされる、戦国期の一石五輪塔の存在が有名である。

(3) 小 結

掛川市域において古式石塔の分布を見てみると、まず鎌倉時代まで遡る古い石塔を含む原田荘の長福寺を中心とする宗塔庵、照月寺、原氏墓塔群のまとまり、南北朝期以降の石塔群から成る上西郷荘の法泉寺を中心として観音寺跡、法寿寺のグループがあげられる。法泉寺は袋井市油山寺とともに薬泉に由来がある山岳寺院といってもよい立地を示している。いずれも中世段階では前者が天台密教、後者が真言密教系寺院として存在していたと想定される。とくに、長福寺と原氏墓塔群で確認された花崗岩製五輪塔は13世紀中葉まで遡らせることの可能な遠江最古の五輪塔のグループに含まれることが明らかとなり、法多山などを介在させた高野山からの大型五輪塔を利用した教線以外の天台密教寺院勢力との関係も読み取れる。このように当地域での鎌倉時代における宗派の浸透状況は、原田荘は天台宗、上西郷荘は真言宗が大きく係わっていたと見られる。14世紀前葉まで遡る可能性のある緑色凝灰岩製の古い型式の五輪塔については、原氏墓塔群、観音寺跡石塔群の中に部材が確認できたので、遠江中部で顕著に見られるこの手の五輪塔が遠江東部でも数は少ないながら確実に存在することが判明した。

南北朝期〜室町初期になると、前者の長福寺とその末寺グループにおいて褐色凝灰岩製大型宝篋印塔がそれぞれ1基づつ造塔され、その流れは袋井市貫名氏供養塔まで及び、原野谷川中流域に集中的に分布することが判明した。反花座の形態は縦長の特異な花弁で形どられ、この型式の紀年銘資料は知られていないが、中型品で新しい形態を含む法泉寺の褐色凝灰岩製宝篋印塔の紀年銘(応永三年・1396)や旧菊川町三光寺裏山墓地の紀年銘資料(応安六年・1373)などを参考にすると14世紀後〜末葉に造塔時期が求められる。褐色凝灰岩製大型五輪塔のうち法泉寺の紀年銘資料(延文五年・1360)により、14世紀中葉以降に生産されたことが判明した。観音寺跡の新しい型式の緑色凝灰岩製五輪塔の紀年銘(貞和二年・1346)により、凝灰岩製大・中型五輪塔のうち緑色から褐色凝灰岩製品の転換時期は14世紀中葉にあったことをこれら資料から想定できる。つまり、褐色凝灰岩製出の転換時期は14世紀中葉にあったことをこれら資料から想定できる。つまり、褐色凝灰岩製大型宝篋印塔出現以前に褐色凝灰岩製大・中型五輪塔の生産が始まっていたと指摘できる。しかしながら、15世紀後葉以降製作された小型五輪塔の中にも褐色製品が主体となるが、混じって緑色凝灰岩製五輪塔も散見されることが判明しているため、緑色凝灰岩製五輪塔だからといって全て古い時期の製品とすることはできない。

宿場のような交通の要衝地を支配する寺院の石塔としては、懸川宿に関係した掛川城本丸下層中世墓の石塔と思われる龍華院石塔、日坂宿に関係した子安観音寺の緑色凝灰岩製五輪塔部材が注目されるが、安山岩製品が確認できないことが悔やまれる。この地域の安山岩製品は僅かに観音寺跡で伊豆でも類例の少ない大型宝篋印塔の部材が確認されているにすぎない。安山岩製五輪塔や宝篋印塔が見られるのは、横地氏関連の時宗の有力寺院である旧菊川町三光寺裏山出土の宝篋印塔の紀年銘資料(文和四年・1355)が注目される。横地氏は遠江国府の有力在庁官人の一人であり、南北朝期の遠江国府で勢力を保っていた蓮光寺や西光寺など時宗寺院との関係の中で、安山岩製宝篋印塔が内陸部へ持ち込まれたと考えられる。ただし、そのルートは遠江国府からというより、同族と思われる勝間田氏の菩提寺である清浄寺の川崎湊からの搬入の可能性が高い。

(18) 62

密教寺院に造塔された興味深い資料である。横地氏の信仰宗派の時期差を示す資料となろうか。

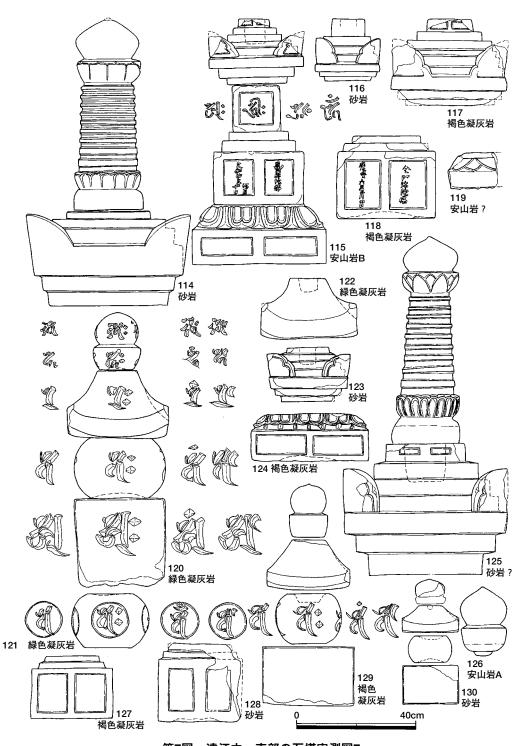
125 は横地太郎供養塔と伝えられる大型宝篋印塔の相輪と笠である。笠は軒上4段下2段で大型品のわりに段数が減り、露盤の輪郭も小さく形骸化しており新しい型式的特徴も見られるが、相輪は関西型式を思わせる細弁の蓮華文表現と立体的に刻まれた九輪、隅飾も直立して文様が刻まれ古い型式的特徴も見られるが、総じて褐色凝灰岩製大型宝篋印塔のなかでも新しい型式の模倣品に見える。白色粒子が含まれる緻密な砂岩製品と報告されるが、14世紀末葉に該当する褐色凝灰岩製品となる可能性も考えられる。

122~124 は横地の谷から少し離れるが神尾の宝珠院の石塔、126 は段横地旧公会堂の五輪塔の部材である。いずれも横地氏関連の石塔と考えたい部材である。122 は梵字が刻まれない緑色凝灰岩製五輪塔としてはかなり新しい時期の火輪、124 は褐色凝灰岩製中型宝篋印塔の反花座で形骸化した複弁の蓮華花と下半には関東型式の系譜に連なる二窓が見られる。123 は露盤の二窓は刻まれないが隅飾に文様が刻まれるなど古式な形態も残す砂岩製品である。同様に128 の藤谷神社の宝篋印塔の基礎も粗雑な造りの二窓が刻まれており古式の様相を示し、当地における砂岩製品のうち初期製品の特徴を示すものとして注目している。127 の褐色凝灰岩製品は段形 2 段の二窓式の中型宝篋印塔の基礎となるが、残念ながら紀年銘は確認できなかった。126 は安山岩製五輪塔の空風輪である。大型品ながら梵字は刻まれておらず、時期はやや降ると考えられる。

129~155 は旧小笠町内の寺院や中世墓から出土したと思われる石塔群である。旧菊川町の石塔群が横地氏関連の寺院に集中した分布を示すのと同じく、赤土荘園に関係した地区に集中する傾向が読み取れる。129~131 は上平川地区の小堤城跡の中腹に安置された三基一対の五輪塔である。131 が最も大型の褐色凝灰岩製五輪塔で、同一個体の良品と思われる。火輪は高いものの軒の反りは減じ、梵字も水輪に限られ、水輪の梵字もシャープでなくなる新しい型式の特徴が見られ、緑色凝灰岩製大・中型五輪塔よりも新しい型式であることが分かる。129 は水輪を除いて同一個体と見られ、131 よりも少し小降りの褐色凝灰岩製中型五輪塔である。やはり火輪の軒の反りは小さくなり、梵字も水輪以外刻まれないタイプで131 と同時期になると考えられる。130 は戦国期の砂岩製小型五輪塔で後補である。129 の水輪が小型五輪塔の位置にあるべき部材であるう。この梵字も浅い彫りで、古式の緑色凝灰岩製五輪塔の梵字と比較すると退化したものであると理解される。どうやら遠江中部で確認できた源朝長供養塔のような大・中・小型の三基一対の石塔群であったと考えたいが、当初の組み合わせを示す部材が確実に残されている確証はない。時期は褐色凝灰岩製品の時期となり石塔の型式も明らかに降るものである。

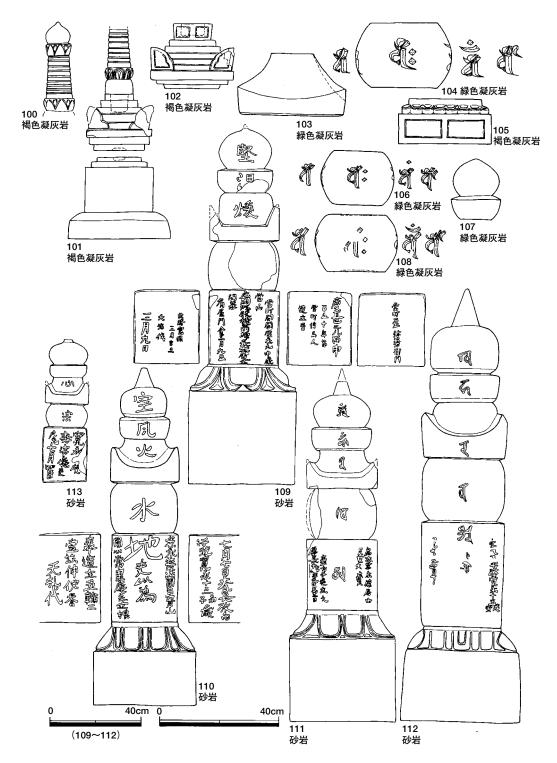
以下の資料については散在的であり、本来の場所にあったものかどうかも不明なものまで含んでいる。132 は谷田寺跡(現川上の川東公会堂)裏山の五輪塔である。褐色凝灰岩製の中型五輪塔で梵字は省略されるが、火輪の軒の反りは緩やかとなるが高さは高いため戦国期までは降らない製品と考えたい。133 ・134 は赤土の安興寺の緑色凝灰岩製五輪塔である。133 の火輪は軒の反りも大きく高さも高く四方に梵字が刻まれ古い型式を示すのに対して、134 の火輪は軒の反りが緩やかになった新しい型式の製品である。135 ・136 は川西城山の小沢家小祠内に安置されている緑色凝灰岩製の小型五輪塔の空風輪で、戦国期に降る形態を示している。137 は川西城山の地蔵堂内に安置されている緑色凝灰岩製五輪塔の水輪で、中型品ながら四方に梵字が刻まれる古い型式である。138 ~145 は川西の赤堀家裏山より出土した小型五輪塔のうち、砂岩製品を除いた緑色凝灰岩製石塔の部材のみを図示した。いずれも戦国期に降る形態を示し、中世墓の存在が推測される。146 ~152 は高橋の赤堀家墓地にある石塔部材であるが、南側の丘陵中世墓より出土したものをここに安置したという。146 の褐色製五輪塔は大型品の部材であるが、火輪の反りは緩やかで高さも減じ、水輪も上半分に最大径があり梵字も小さく変化しており新しい型式の特徴を示す。147 ~150 の褐色・緑色凝灰岩製小型五輪塔の部材は、水輪に梵字が刻まれるものが

63 (17)



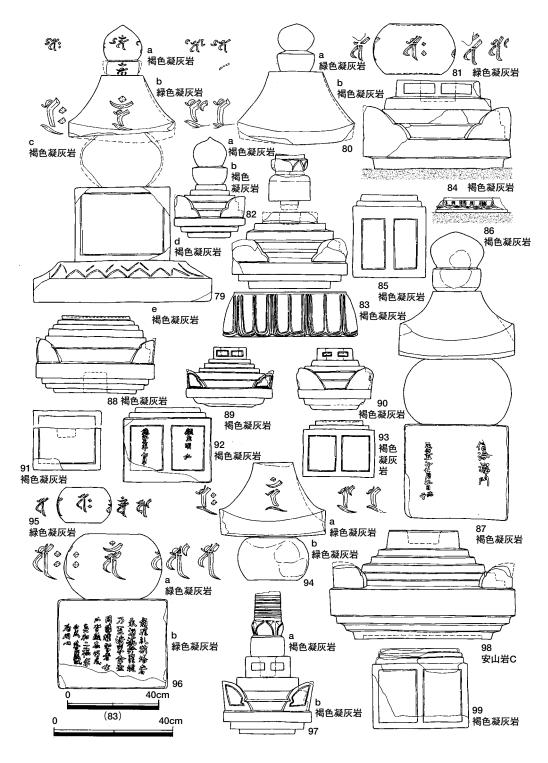
第7図 遠江中・東部の石塔実測図7

(114 久延寺 115~119 三光寺裏山 120・121 慈眼寺 122~124 宝珠院 125 伝横地太郎塔 126 段横地旧公会堂 127・128 藤谷神社 129・130 小堤城跡)



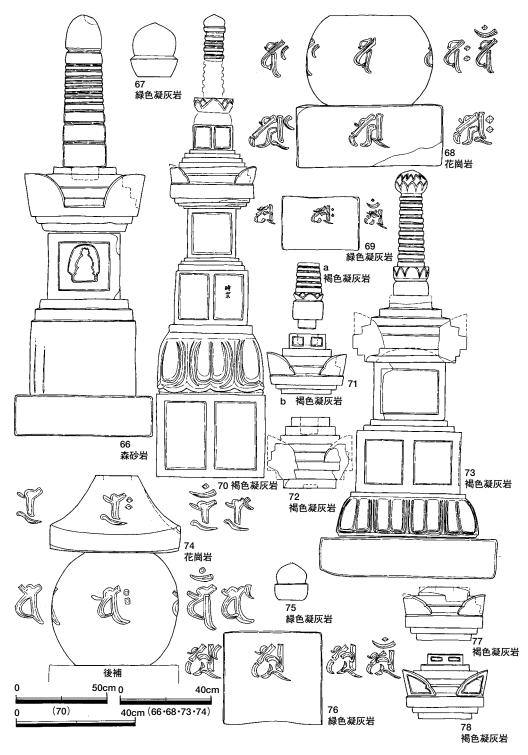
第6図 遠江中・東部の石塔実測図6

(100·101 法寿寺 102 法寿寺庵北西墓地 103~105 龍華院 106 子安観音寺 107·108 常光院 109~113 常現寺)



第5図 遠江中・東部の石塔実測図5

(79~82・84・85 照月寺原氏墓塔 83・86 照月寺墓地 87~93 法泉寺 94~99 観音寺跡)



第4図 遠江中・東部の石塔実測図4

(66 油山寺開山塔 67・71・72 長福寺墓地 68~70 長福寺 73 宗塔庵跡 74~78 照月寺原氏墓塔)

ないため新しい型式の製品と見られる。104 は梵字もしっかりしており古い型式の製品であろう。 105 は褐色凝灰岩製宝篋印塔の反花座で、かなり退化した花弁となっており新しい型式の製品と 見られるが、下半には二窓が刻まれるため関東型式の流れを汲むものと理解される。

106 は掛川市大原子(原子公会堂)に所在する子安観音寺跡の緑色凝灰岩製五輪塔の水輪である。中型品ながら四方に梵字を刻むため古い型式の製品と見られる。107 ・108 は掛川市富部に所在する常光院墓地の緑色凝灰岩製五輪塔の空風輪と水輪である。108 の水輪は中型品ながら四方に梵字を刻むため古い型式の製品であるが、107 の空風輪は梵字が省略される新しい型式の特徴をもつと見られる。寸法からも同一個体ではないと見ている。

109~113 は掛川市日坂の常現寺にある大型の一石造の大型五輪塔(一石五輪塔?)である。いずれも江戸期の紀年銘が刻まれる石塔であるが、近世日坂石の墓標製作を知るうえで重要な資料であるため特に掲載した。極めて風化が進んだ泥岩質の砂岩製品で、森町産砂岩製品が石英砂粒を多量に含むのとは岩質がかなり異なるものである。110 は寛永十三年(1636)、111 は慶長十年(1605)、112 は寛永十五年(1638)、113 は寛永○年の紀年銘が見られ何れも江戸前期の石塔であることが分かる。五輪塔部は高野山型式の江戸初期五輪塔の形態を良く示している。反花座は別造りで花弁の表現は沈線化しているが、111 から110、112への変遷が辿ることができる特注品であったと見られ、日坂宿を支配していた一族の墓塔群と考えられる。最終段階の109 は寛保年間(1741~1743)の紀年銘があり江戸中期に降る墓塔ではあるが、形態は江戸前期の墓塔を模倣し、地輪裏面には「当町石工 弥次右衛門」の石工の名が刻まれている。当町とは日坂宿を指し、江戸期の日坂石製墓塔を製作した石工名を知るうえで重要資料である。また、今回図示してはいないが戦国期の小型宝篋印塔相輪の未製品が当寺墓地で確認された。戦国期の日坂宿で石塔の製作が行われていた参考資料となろうか。

114 は掛川市佐夜鹿の久延寺境内で確認できた大型宝篋印塔である。大きさからは袋井市油山寺の開山塔と同じとなるため、当寺でも開山塔として造立されたものであろうか。笠は軒上3段下2段で露盤は小さく二窓の表現はなく、隅飾もかなり省略された形態で、戦国期の森町産砂岩製宝篋印塔と何ら変わらない形態である。相輪の九輪と請花の文様も沈線化しており明らかに新しい特徴を示し、本塔が大型品ながら戦国期に降る宝篋印塔であることを示している。

115~126 は旧菊川町内の横地氏関連の寺院に残された石塔群である。115~119 は東横地殿ヶ谷三光寺裏山中世墓から出土したと伝えられる石塔群のうち、古式となりそうな宝篋印塔の一群を図示した。なお、三光寺は横地氏の菩提寺で時宗の寺院として知られている。115・119 は安山岩製品であるが、119 は退化した花弁表現の反花座の一部で遠江や原産地の伊豆半島でもあまり見ることのできない形態である。115 の中型宝篋印塔は相輪を欠くが同一個体と思われ、笠は軒上5段下2段で露盤に二窓が刻まれ、隅飾にも文様が見られ、塔身には梵字を刻み、基礎には段形2段の二窓式で「阿弥陀佛 文和四年(1355)」の紀年銘(北朝)が刻まれ、反花座も下半に二窓が見られ隅を跨ぐ4弁の複弁が施された関東型式の宝篋印塔である。伊豆産安山岩製宝篋印塔の古式の型式を知るうえで基準資料となる石塔である。117 と118 は褐色凝灰岩製宝篋印塔の部材で、117 は軒上6段下2段の露盤に輪郭2区が見られるものの、隅飾の造りはやや退化している。118 の基礎は段形2段で二窓に「○阿弥陀佛 応安六年(1373)」を刻む紀年銘(北朝)資料となっており、褐色凝灰岩製宝篋印塔の年代を知るうえでの基準資料の一つとなっている。116 は在地の砂岩製品のうち古式の形態を残すものを参考品ながら図示しておいた。

120・121 は奥横地の真言宗慈眼寺にある緑色凝灰岩製五輪塔である。120 は高さ90cmを計る大型品で全ての輪に梵字が刻まれ、水輪の軒の反りも大きな古式の型式を示すものである。121 もやや小降りながら月輪をもつ梵字が四方に刻まれた古式の型式を示す五輪塔で、横地氏関連石塔群の中では一番古手の石塔であり、安山岩製石塔をもつ時宗寺院(三光寺)に先行して、真言

(12) 68

れた縦長の複弁5葉が一面に配置されており、弁数は異なるが宗塔庵の宝篋印塔反花座に酷似する。下半は別造りになるか板石が伴うか、あるいは二窓式基礎が伴うかは分からない。86の小型宝篋印塔の反花座は四隅を跨ぎ肉厚に彫出された複弁5葉が一面に配置されているが、下半部は後世の基段中にコンクリートで埋め込まれているため不明である。中・小型品の褐色凝灰岩製宝篋印塔の反花座となろう。

87~99は旧掛川市中央部の上西郷地内の法泉寺と、その末寺である観音寺跡墓地に所在する石 塔群である。87は裏山から出土したとされる高さ94cmはある褐色凝灰岩製大型五輪塔である。 地輪には「信海禅門 延文五年(1360)年七月二日庚子」の銘文が確認できた。延文は北朝の年 号で遠江で確認される南北朝期の紀年銘資料が北朝年号を示すことと一致する。禅門は戦国期以 降の石塔の戒名に使用される場合が多いが、238 の旧浜岡町笠名庚申堂宝篋印塔の銘文のように 禅定門を刻むもの、全国的に見ても南北朝期に遡る石塔に禅門を刻む例がありこれらを全て後刻 とはできないため、今回は延文五年に刻まれた紀年銘資料として報告しておく。梵字は全ての輪 に刻まれてないこと、火輪の軒の反りは強いことは古い型式を示すが、火輪中央の反りはやや弱 くなり高さも低くなること、梵字は全ての輪に刻まれてないことなど緑色凝灰岩製五輪塔と比較 すると明らかに新しい型式である。火輪の形態は80等と比較すると古い特徴が見られるため褐色 凝灰岩製大型五輪塔としては古い部類に属し、紀年銘を尊重すると14世紀中葉に褐色凝灰岩製大 型五輪塔の製作開始年代を与えうる唯一の紀年銘資料となっている。88~92は褐色凝灰岩製宝篋 印塔の部材である。88は幅36cmで軒上6段下3段、隅飾は小さく直立し無文で、露盤は別造り となる大型宝篋印塔の笠である。形態からは長福寺大型宝篋印塔の笠に最も近い形態を示す。 89・90は中型の宝篋印塔の笠で、89・90共に露盤に二窓が施されるが、89は隅飾に文様が刻まれ 軒上段も6段あるのに対して、90は隅飾は無文化し軒上5段しかないため新しい型式の特徴と見 られる。91は中型宝篋印塔の塔身、92・93は中型品の段型2段で二窓式の基礎である。92には風 化が進み一部判読できない部分もあったが、「願主明○、応永三年(1396)七月○」の銘文が確 認でき、褐色凝灰岩製中型宝篋印塔の製作年代を知るうえでの紀年銘資料を加えることができた。

94~99は上西郷構江地内に所在する観音寺跡の石塔群である。94~96は緑色凝灰岩製五輪塔の部材である。寸法から見ると94 a と96 b が同一個体になる可能性があるが、96 b に梵字が刻まれていないため全て別個体の部材と考えられる。96・98は「一山一寧」供養塔と伝えられ、地輪には「貞和二年(1346)」が刻まれる北朝年号をもつ緑色凝灰岩製五輪塔の年代を決めるための紀年銘資料ともなっている。98の大型宝篋印塔の笠は、安山岩製で軒上6段下3段、隅飾は小さく無文であるが直立する。露盤には窓はなく新しい型式の要素もあるが、遠江東部で見受けられる安山岩製宝篋印塔としては最大の部類に属する。97・99の褐色凝灰岩製宝篋印塔は中型品で、寸法から見ると同一個体と見られる。笠は軒上4段下2段、露盤には二窓が施され、隅飾も外傾はするが文様が刻まれ古い型式の特徴も見られるが、相輪は九輪が沈線化しているなど新しい要素も見られる。99の基礎は段形3段の二窓式の基礎で、古い型式の特徴が見られる。

100~102 は上西郷地区の宝寿庵墓地の宝篋印塔で、何れも褐色凝灰岩製で、101 は寸法から見て塔身を欠く同一個体と思われる。102 の笠は軒上6段下2段で、隅飾は直立気味で文様が刻まれ、露盤にも二窓が施されて古い型式の特徴が見られる。101 は相輪の九輪が沈線化し、笠も軒上5段下2段で露盤には二窓は施されず、隅飾も外傾し無文であり、基礎は段形2段で窓は刻まれず、反花座は弁の表現のないものに変化しており、明らかに後出型式と見られる。

103~105 は掛川市城内の掛川古城にある徳川家光の霊廟である龍華院に所在する石塔で、かって掛川城内から掘り出されたものを移したと伝えられている。おそらく、発掘調査で確かめられた本丸下層中世墓より出土したもので、中世懸川宿に関係した有力寺院である懸川山神宮寺中世墓に属する石塔として注目される。103・104 は緑色凝灰岩製五輪塔で、103 は梵字が刻まれ

69 (11)

は大きく古式の様相を示すが、高さが低いため横長の印象を受け新しい要素とも見られ法多山の B類に該当する型式と見ている。水・地輪共に四方に梵字が刻まれているが、風化が進んでいる。 69・70は山門脇にある石塔で、69は緑色凝灰岩製五輪塔の地輪、70は曽我五郎時致供養塔とされる褐色凝灰岩製大型宝篋印塔である。復元高287 cmを計り、平田寺宝塔と並ぶ遠江最大の石塔である。相輪は伏鉢、九輪の下半を欠失し、笠は軒上7段下3段、最上段の露盤は別造で二窓が刻まれている。基礎は段形3段の二窓式で、正面右窓中央に「時宗」刻字が見られるが、これのみの記載のため後刻の可能性が高い。反花座の花弁の造りは縦長の特徴的な形態で、四隅を跨ぐ複弁3葉が線刻により平坦に彫出されている。下半部分については別造となり、花弁部分と同様に縦長の二窓式であることから関東型式をベースとした宝篋印塔ではあるが、かなり在地でアレンジされた製品である。本間・桃崎両氏はこの石塔を安山岩製とした(本間岳人1998・桃崎祐輔2000)が、本間氏は最新の論考では凝灰岩製品に訂正している(本間岳人2006)。

73は本郷地内の宗塔庵跡(長福寺末寺)に所在する曽我十郎祐成供養塔と伝えられる褐色凝灰岩製大型宝篋印塔である。復元高181 cmで、相輪は伏鉢、請花、九輪、宝珠が残り、上の請花は省略されるが、下の請花には削出の花弁が見られる。ただし、宝珠には省略された請花の代用か複弁葉が上下二段に線刻されており、県内宝篋印塔には類例のないものである。笠は軒上4段下2段、最上段の露盤は一部欠失しており無地かどうか分からない。基礎は段形2段の二窓式で、反花座は四隅を跨がない線刻により平坦に彫出された縦長の複弁4葉が一面に配置されている。下半については別石材の後補と思われる砂岩製の板石基礎が敷かれている。本間・桃崎両氏は凝灰岩製品?としているが、本間氏は最近の論考で長福寺大型宝篋印塔と同じ凝灰岩製品に訂正している(前掲)。

74~86は西郷地内の照月寺(長福寺末寺)墓地と、原田荘国人領主である原氏の墓塔と伝えら れている石塔群である。なお、原氏墓塔群は近在にあったものを現在の位置に移したもので、厳 密には照月寺墓地には属さない。古式石塔の石材は74を除いて、他は緑色・褐色凝灰岩製品であ る。74は花崗岩製大型五輪塔で、空風輪と地輪を欠失し水輪と火輪しか存在しないが、横幅から 見ると同一個体と見られる。水輪は縦長方向に長い古い形態を示し法多山A類、火輪は軒の反り が大きなB類の特徴をもつA類とB類の中間形態の組合を示している。類似品として旧浜北市岩 水寺五輪塔があげられ、A類後B類以前の型式と見られ、B類の中でも古段階に位置付けられる。 75・76・79 a · b · 80 a · b · 81があり、緑色凝灰岩製五輪塔の部材であるがいずれも規格が異 なるため別個体に属すると考えられる。76・79a・b・81は四方に梵字を刻む中型品で古式の型 式を示すが、75・80aの空風輪は中・小型で梵字も刻まないため時期が戦国期に降るものと考え られる。褐色凝灰岩製品には五輪塔と宝篋印塔の部材が確認できた。79 c ・80 b ・82 a は褐色凝 灰岩製五輪塔の部材で、80の火輪は大型品であるが軒の反りは緩やかであり、80・82 a の空風輪 も梵字が省略され、緑色凝灰岩製五輪塔よりも明らかに新しい型式内容を示す。77・78・82 b は 宝篋印塔の笠で、何れも幅24~28cmの中・小型品で、77が軒上3段(露盤欠損?)となる他軒 上5段下2段である。78は最上段の露盤に二窓が施され、隅飾は78以外無文となり新しい特徴を 見ることができる。84は幅49.5cmになる大型宝篋印塔の笠で、軒上4段下1段以上(コンクリー ト固定のため不明)である。最上段の露盤は二窓が施されるが、隅飾は無文化している。大きさ から見ると宗塔庵宝篋印塔に匹敵する製品である。79 d は大型宝篋印塔の塔身部分で、寸法から は84と同一個体になろうか。長福寺や宗塔庵の大型宝篋印塔と同じく、塔身には梵字を刻まない ため新しい型式と見られる。85は中型品ながら縦長の印象を受ける段形2段の二窓式の基礎であ る。83は同一個体と思われる相輪の下請花、笠、反花座である。下請花には削出の花弁が見られ るが、弁数は欠失部分が大きく不明である。笠は軒上5段下2段、最上段の露盤は一部欠失して おり無地かどうか分からない。隅飾は無文である。反花座は四隅を跨ぐ線刻により平坦に彫出さ

(10) 70

野山金剛峰寺塔頭所有の「宝塔三昧院領」に属している。その後の経過は明らかではないが、磐田市見付慈恩寺には「応永二十六年(1426)上西郷荘滝泉寺」銘の雲版がある。滝泉寺とは今回の調査で古式石塔が多数確認できた法泉寺のことである。

応仁二年(1468)、『経覚私要抄』によると、遠江国には西から「橋本・疋馬・池田・国府・袋井・掛川・西坂・菊川・鎌塚」の9つの宿があったことが記載されている。このうち懸川(掛川)はこれより前の『源平盛衰記』などにもその名前が見えることから、平安末~鎌倉初期段階においてすでに宿駅として栄えていたと考えられる。掛川宿の一角に永正九年(1512)頃、懸川新城を築城したとされている(『宗長手記』)。掛川市教育委員会による掛川城本丸の発掘調査では城の遺構面下に大規模な中世墓が発見され、懸川山神宮寺の墓地と推定されている(掛川市1997)。なお、今回の調査で龍華院において確認できた緑色・褐色凝灰岩製石塔はこの中世墓から掘り出されたものとの伝聞情報がある。

旧菊川町では鎌倉期に町域のほぼ中央を荘域とする建久三年(1191)北条時政に寄進された河村荘が存在した(『吾妻鏡』)。町域南部には下賀茂社領の賀茂荘、町域南東部から南西部にかけて常寿院領である内田荘があった(『華頂要略門主伝』)。この地域には横地氏の勢力が強く、『保元物語』によれば「義朝に相従ふ兵多かりけり、遠江には横地、勝俣、井ノ八郎」と見え、『吾妻鏡』によれば嘉禎四年(1238)、頼経上洛の際に横地太郎兵衛長直が懸川の御所造営奉行となっていることが見えるため、横地氏は鎌倉時代において遠江国の有力御家人となっていたことが知られている。室町初期には横地城を築城し、将軍足利義満の近習にも名前を連ねている。しかしながら、文明八年(1476)今川義忠の遠江進攻戦に横地・勝間田氏は激しく抵抗したため、勝間田氏と共に横地氏も滅亡した。

旧小笠町には旧大東町を含め、笠原荘と赤土荘の存在が知られている。笠原荘は『中右記』 (嘉承元年(1106) 9月12日条)には「左大臣家領遠江笠原荘」と記載されている。鎌倉〜室町期にかけては『吾妻鏡』、『難太平記』などにその名前を見ることができる。赤土荘は旧小笠町の中心域にあり、『天台座主記』(建久九年(1198) 9月16日条)と『華頂要略門主伝』(文明三年(1471) 5月25日条)に「千僧供領遠江国赤土荘」とあり、鎌倉〜室町期においては天台宗の比叡山延暦寺千僧供領であったことが分かる。

このように、掛川・菊川市域では石塔造立の歴史的背景として国人領主と荘園の関係が色濃く 読み取ることができた。石塔が造立された荘園内の寺院については、遠江中・西部でも確認でき た真言宗の勢力ばかりでなく、天台宗や時宗に属する寺院にも存在することが判明した。なお、 旧菊川町域の石塔については桃崎祐輔氏により提示された図(桃崎祐輔2000)を現地で確認し、 古式のものを選別して再トレースし掲載した。

(2) 石塔の説明

旧掛川市・旧菊川町・旧小笠町の古式石塔については、第4図~第8図に示した。旧大東町と 旧横須賀町については現在のところ古式石塔は確認できていないが、全ての寺院の石塔を調査し ているわけではないためまったく存在しないとは言いきれない。

まず、旧掛川市域の石塔の説明をしたい。67~86は市東部に所在する本郷地内の現曹洞宗安里山長福寺及びその末寺にある石塔である。67・71・72は長福寺墓地の石塔で、67は緑色凝灰岩製五輪塔の空風輪、71は褐色凝灰岩製宝篋印塔の相輪の一部と笠で、笠は軒上4段下2段で、最上段の露盤は二窓を施し、隅飾は無文である。相輪の請花は彫出の複弁である。72は軒上5段下2段の褐色凝灰岩製宝篋印塔の笠である。68は本堂西脇の池縁にある花崗岩製大型五輪塔(水・地輪)であり、空風輪・火輪の所在は不明であるが、聞取調査からは他位置から移されてきた状況は確認できなかった。水輪の高さ40cmに対して地輪の高さ28cmを計るので、地輪がかなり低いことが分かり、遠江の古式花崗岩製五輪塔の特徴を顕著に示す。水輪の最大径に対して接合部径

石塔伝播を考えるうえで問題が大きいため考察の項にて改めて検討する。

次に古式とされる緑色凝灰岩製五輪塔は、永安寺と龍雲禅寺で良好な資料が、部材で法多山石塔群にて良品が発見できた。法多山と高野山の関係は花崗岩製五輪塔において確実に想定できるようになったが、前号でも緑色凝灰岩製五輪塔も遠江では真言密教との関係で広がった可能性が高いと想定した。また、あまり分布のはっきりしなかった褐色凝灰岩製宝篋印塔も山梨袋井間の街道沿いの寺院でも確認でき、この辺りがこの種の石塔の東限になりそうなことも明らかとなった。なかでも妙日寺貫名氏供養塔は長福寺や宗塔庵に連なる特注品と思われる褐色凝灰岩製大型宝篋印塔で、同型式の宝篋印塔が分布する遠江東部~駿河西部地域との比較検討が必要となる。

安山岩製五輪塔や宝篋印塔は浜松〜磐田地域と比較すると確認数ははるかに減少するが、大日堂、東別所墓地、用福寺跡等の東海道沿と永安寺で部材が確認されている。とくに用福寺跡については間の宿である原川町に関係した寺院、永安寺は遠江国府との関係で理解できる石塔であろう。つまり、浜松〜磐田地域と同様に宿場や湊を支配した寺院、遠江国府関連寺院に集中的に安山岩製石塔が持ち込まれた状況と関連するような分布を示すのではないかと考えられる。

古式の砂岩製品は、森町産砂岩の生産開始を示しそうな大型宝篋印塔が貫名氏供養塔部材で確認され、戦国期においても油山寺開山塔のように特注品と思われる大型宝篋印塔の存在が明らかとなった。西からの搬入品と思われる緻密な砂岩製五輪塔については、西楽寺五輪塔に続いて東別所墓地で確認できたが、今のところこれが遠江での分布の東限と思われる。 (松井一明)

3. 旧掛川市·旧菊川町·旧小笠町地域

(1) 石塔造立の歴史的背景

この地域の行政区分は旧掛川市・旧大東町・旧横須賀町と合併し掛川市、旧菊川町と旧小笠町が合併し菊川市となっている。中世段階における遠江武士団とされる在地領主層は、吾妻鏡等の文献資料により西から井伊、浅羽、横地、勝田、内田、相良の諸氏があげられる。源頼朝は挙兵後一族の甲斐源氏の安田義定を遠江に派遣し平定を試みたが、治承5年(1180)安田義定に従わなかった浅羽・相良の両氏は処罰された(吾妻鏡)。頼朝が幕府を開くと、これら諸氏は幕府から地頭に任命され、次第に荘園や国衙領を独占的に支配していくことになる。

旧掛川市内を流れる河川には、倉見川、逆川、原野谷川があり、古くから水利権をめぐる争いが起こっていた。水利権の確保は荘園や国衙領を維持していくうえでの死活問題であり、このような問題を抱えながら小高、大池、西郷、曽我、原田、懸川、内田、中原、潮河など多くの荘園が立券された。とくに掛川市西部の原田荘においては内田氏の同族である原氏が独占的に係わっている。原田荘は原野谷川流域に平安時代末に成立したとされ、当初は国衙領であったが、文永二年(1265)皇室領(宝金剛院領)として荘園化された(遠江三代起請地並三社領注文案『教王護国寺文書』)。その後、原田荘は最勝光院(後白河法皇建立)領となり、正中三年(1326)東寺に寄進され、東寺は自ら支配するため雑掌を派遣した。領地は原氏が実行支配してる実情が検分され、元徳三年(1331)和解し半済が行われた(『東寺百合文書』)。原田荘の衰退を通して原氏は遠江の中でも有力な国人領主へと成長した。文明三年(1471)、今川氏親の遠江進攻により荘内の天台宗長福寺は円通院と共にこの時の兵火により焼亡した。そして同年6月、氏親により原氏は滅亡に追込まれ、長福寺は曹洞宗に改宗し再建を図った。なお、長福寺には「天慶七年(944)6月2日遠江国佐野郡原田郷長福寺」銘の梵鐘が存在し、南北朝期に北畠軍(南朝方)が掠奪し奈良県金峯山寺に運ばれ現在に至っている(『掛川誌考』)。

倉真川流域には文暦元年(1234)、上西郷、下西郷の範囲に西郷荘があり、文永二年(1256)になると上西郷荘となる(遠江三代起請地並三社領注文案『教王護国寺文書』)。なお、同荘は高

し14世紀中葉に該当する製品と考えている。ただし、同じ緑色凝灰岩製の中・小型五輪塔でも5・8・16・25・29・31・34・35・39・40・47・48・50・51・54・56のように梵字が水輪のみにはいるか、全ての輪に梵字の入らないもの、31のように梵字が形骸化したものなどが含まれることから、これらは15世紀後葉以降の戦国期まで降る製品を含むと考えている。褐色凝灰岩製五輪塔も大型品の18と小型品の14の部材が確認できた。前者はやや古くなる可能性があり14世紀中葉以降の製品であるが、小型品については15世紀後葉以降の戦国期に該当する。今のところ遠江中部では褐色凝灰岩製五輪塔の数は少ない。

凝灰岩製宝篋印塔は褐色製品に限られる。大型品の60、中型品の20 a、小型品の23の 3 サイズがある。60は c の基礎と f の台が砂岩製品である以外同一個体と思われる。反花座は縦長で沈線化し隅の花弁を跨いだ蓮華の表現は後出的であり、宗塔庵宝篋印塔に類似しているため14世紀末葉に該当する製品となろうか。20 a は長福寺宝篋印塔と同じく露盤が別造りとなり、14世紀末~15世紀初頭の時期に該当しようか。23は露盤の窓の表現はなくなり、隅飾も外に傾斜するより新しい形態で、15世紀前葉まで降る製品と考えたい。遠江中部では褐色製宝篋印塔は褐色五輪塔と共に確認数は少なく、小型品まで含めて緑色凝灰岩製五輪塔が選択的に搬入されたと見ている。

安山岩製品は五輪塔と宝篋印塔が確認されている。五輪塔は大型品の部材である3・13・26・32と中型品の19の2サイズがあり、いずれも空風輪と火輪の接合方法はほぞ穴型式である。石材から見るとC類は見られない。空風輪はすべて梵字が刻まれた大型品で古い特徴が見られるが、中型品の19は時期が降る可能性が高く、前者を14世紀後葉、後者は14世紀末葉以降に搬入されたと考えたい。

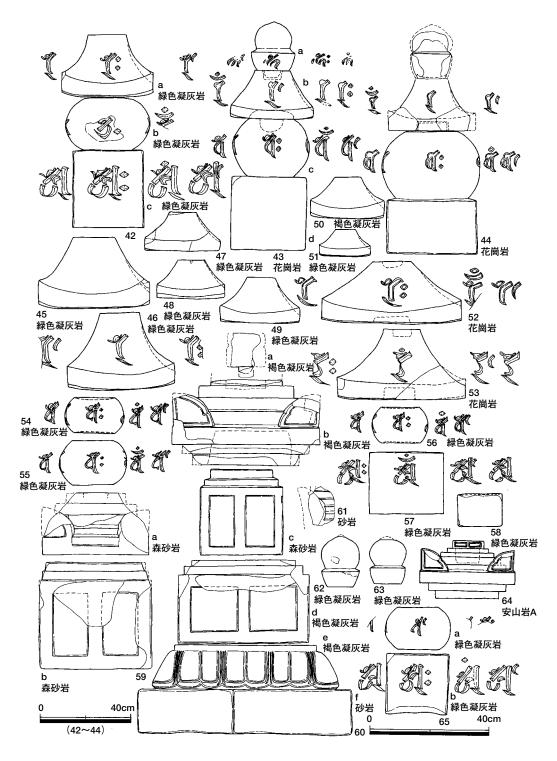
安山岩製宝篋印塔は64の中型品の笠1点しか確認できなかった。隅飾は直立し、露盤の二窓の表現も残る古い形態を示しているため、14世紀後葉の時期に該当させたい。

砂岩製品のなかで古い系譜をもつものは、27・28の大型五輪塔の部材、59・60 c・61の宝篋印塔の部材である。前者は梵字もなくほぞ穴式の空風輪ではないが、緻密な砂岩製品で西楽寺や本立寺で確認された砂岩製五輪塔の系譜に連なると考えられる。遠江西部にもこの手の砂岩製五輪塔が分布しており、14世紀代における西方からの搬入ルートが考えられ、今のところ遠江中部以東では確認できていない。後者の宝篋印塔は59 b・60 cの基礎部分の二窓の表現が見られ古い形態を残しているのに対して、59 b と同一個体の59 a の笠部分の隅飾の形態と文様は形骸化していること、石材が戦国期に爆発的に生産の始まる森町産砂岩製小型石塔と同一石材であることから見て、森町産砂岩製品の初期製品であると考えたい。すなわち、15世紀後葉でも古い時期に該当させておきたい。同じく66の森町産砂岩製の大型宝篋印塔は塔身に形骸化した仏像を一面に刻むが、相輪の請花の蓮弁は省略され九輪は沈線化し、隅飾の文様も省略され、基礎の窓もなく、反花座も省略され台に変化している。大型品ではあるが戦国期の小型宝篋印塔が掛川市久延寺でも確認でき、戦国期でも大型宝篋印塔が造られていたことが分かる資料である。21は寛永十二年(1635)の紀年銘が刻まれる森町産砂岩製一石五輪塔である。森町産砂岩製品の江戸期初期の紀年銘が刻まれた石塔として注目される資料である。

(3) 小 結

磐田・袋井市地区の今回調査の古式石塔の最大成果は法多山石塔群の発見と、岩室廃寺・安永寺を核とする古式石塔群が確認できたことである。とくに、花崗岩製五輪塔A類については、静岡県最古の五輪塔と目される。また、噛合式五輪塔は近畿圏以東に分布が確認された最初の例になるのではないかと注目される。本地域以外でも、例えば前号報告の岩水寺墓地、今回報告できた蔵平中世墓、遠江東部の長福寺や原氏墓塔群、旧浜岡町篠ヶ谷地区中世墓でも古式の花崗岩製五輪塔が確認でき遠江全域に分布していることが判明した。この種の石塔は東海地域への最初の

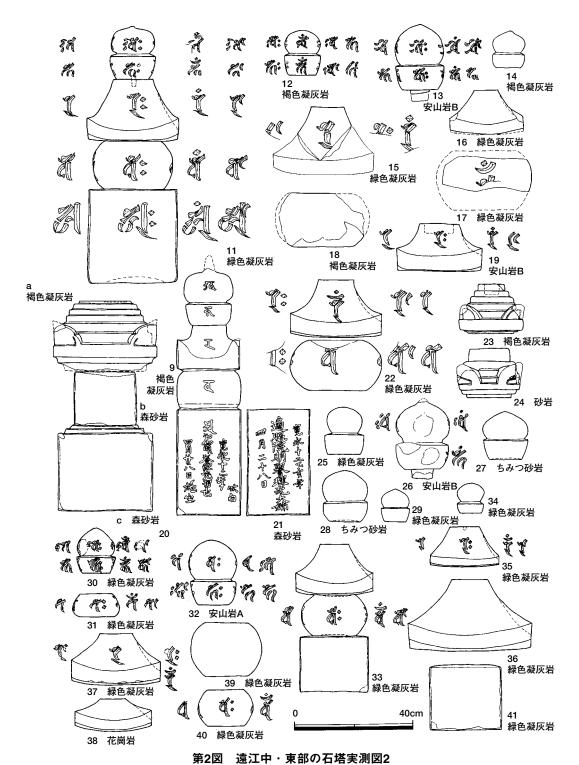
73 (7)



第3図 遠江中・東部の石塔実測図3 (42~58 法多山 59~61 妙日寺貫名氏墓塔 62 永源寺跡 63~65 用福寺跡)

(6)

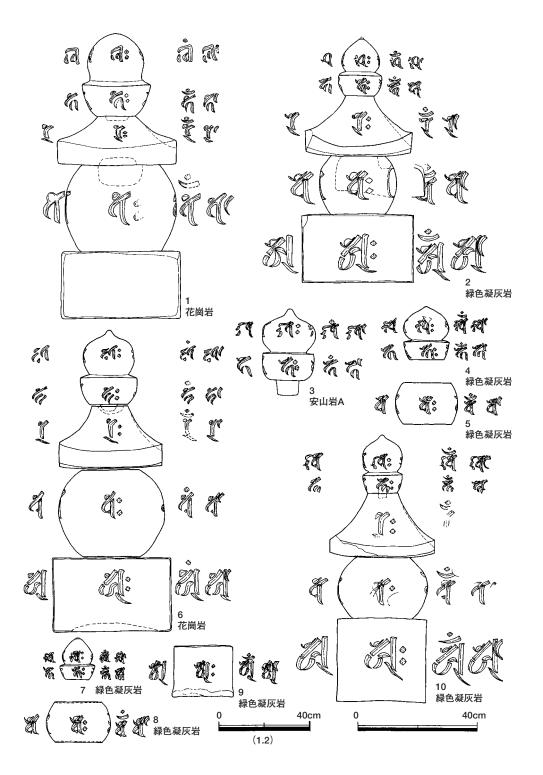
74



(11 龍雲禅寺 12 建福寺 13·14 新豊院墓地 (篠原中世墓) 15~18 新豊院墓地 (向笠氏墓塔) 19 大日堂 20 正福寺 21 林光寺墓地 22~24 観正寺跡 25 久能墓地 26~29 東別所墓地 30·31 海蔵寺 32 満願寺 33 心宗院 34~41 円明寺)

(5)

75



第1図 遠江中・東部の石塔実測図1

(1・2 永安寺 3~5 永安寺 南寺 (浄光寺) 6 蔵平中世墓 7~9 岩室南山中世墓 10 龍雲禅寺)

が指摘できるようになった。また、山梨の正福寺、観正寺跡、妙日寺貫名氏供養塔にて、遠江中部ではほとんど類例のがないと思われていた褐色凝灰岩製宝篋印塔が確認できた。褐色凝灰岩製宝篋印塔は掛川市長福寺などの原野谷川上流域の石塔群に多数分布するため、これら掛川市域の原野谷川流域の寺院との関係が指摘できるようになってきた。とくに、妙日寺貫名氏供養塔は天台宗の古刹である長福寺とその末寺に所在する同一系譜の大型宝篋印塔であり、特定の寺院から特注された石塔であることは明らかで、長福寺を中心とする天台密教の宗教ネットワークのなかで造塔されたのではないかと推測された。

このように、今回の追加調査で磐田・袋井市地域を中心とする遠江中部での古式石塔造立の歴 史的背景は、一面的ではなく複雑な様相を呈していたことが判明した。

(2) 石塔の説明

前号では遠江中部では磐田国府・守護所を中心とする石塔群、太田川流域に見られた源朝長供養塔のような著名な人物の供養塔で良質な緑色凝灰岩製五輪塔の三基一対の古式石塔の報告ができた。その後の追加調査で旧袋井市、旧豊岡村、旧浅羽町においてかなりの古式石塔の存在を確認することができたため以下説明を進めたい。

まず遠江最古の石塔と考えられる花崗岩製品について紹介する。花崗岩製石塔は五輪塔のみ確 認でき、1の旧豊岡村永安寺、6の蔵平中世墓、43a~c・44・52・53の袋井市法多山の五輪塔 が特筆される。法量や石材の観察から1・6・43・44は同一個体と見られる。とくに44は空風輪 と火輪、水輪と地輪が一体でほぞ穴型式で接合されている。全体的に損傷が激しいが空風輪と火 輪の接合部分を復元すると、軒のカーブが接合部より上側になることから見て、所謂噛合式五輪 塔の範疇に含まれるものと認定した (狭川真一・佐藤亜聖両氏ご教示)。空風輪と火輪の接合は 44を除いて何れもほぞ穴型式である。火輪と水輪の接合方式も6を除いて何れもほぞ穴型式で統 一されている。地輪は何れも横長で扁平な古式な形態を示している。火輪の形態から見ると1・ 52のように軒の反りが小さく扁平な形態と、6・44・53のように軒の反りが大きく高さの高い形 態の2種類の存在がまず指摘しうる。前者の空風輪は1で確認できたように縦長で中央のくびれ 造りがあまい形態であるのに対して、後者の6・43は横に長く変化し整った形態となっている。 水輪は前者のように最大径に対して接合部が広く縦長の形態となるものと、後者は接合部の径が 小さく6や43のように球形に近いものと44の横長の形態となるものがある。花崗岩製五輪塔の型 式としては前者のほうが明らかに古式の型式を示していると考えられ1・52を A 類と分類してお く。後者は後出の型式を示すと思われ、別造りの6・53をB類、噛合式の44をC類と分類してお きたい。さらに、43の軒の反りが小さく水輪も球形に近く、縦長の地輪をもつものを最新段階の D類としておく。なお、38の小型五輪塔の火輪は、石材は明らかに岡崎産花崗岩ではない。軒の 反りが小さく高さの低い火輪形態についても、岡崎産花崗岩製小型五輪塔が軒の反りが大きく高 さの高い形態であるため、美濃や伊勢北部に分布する戦国期の花崗岩製小型五輪塔が搬入された ものであろう。

凝灰岩製品は五輪塔と宝篋印塔がある。五輪塔は2・4・10・11・15・17・22・30・36・37・42・45・46・49・55・62・63・57のように緑色凝灰岩製の大・中型品で、火輪の軒の反りが大きく高さの高い形態で、梵字も水輪のみのものも見られるが、全ての輪に入るものが古い形態であろう。なかでも10・11は同一個体と思われ資料価値が高い。2については火輪・水輪・地輪ともに横幅が大きく異なるため石材は類似するものの別個体の可能性がある。これらの古い形態をもつ緑色凝灰岩製の五輪塔は、14世紀前葉の製品となろう。ただし、大型品のうち36・45と中型品の33・49・62・63は水輪のみに梵字のはいる部材で、全ての輪に梵字の入るものよりも時期が降る可能性があり14世紀中葉以降の製品となろうか。また、緑色凝灰岩製の小型品のうち7~9・12・65などは、水輪の他空・風輪や地輪に梵字を全て巡らすため、これらも比較的古い形態を示

育委員会と石塔所在寺院関係者の支援のもと遠江中世石塔研究会の松井、木村、溝口の3名で行った。執筆についても3名で各地区で分担し、各項の文末に文責を示し、考察の項目については 松井、木村、溝口の3名が協議して松井が文章化した。 (松井一明)

2. 旧磐田市·旧豊岡村·旧袋井市·旧浅羽町域

(1) 石塔造立の歴史的景観

旧磐田市と旧袋井市域では前稿でいくつかの古式石塔を報告することができたが、その後の追加調査で重要な古式石塔が多数確認できたため今回報告することにした。なお、前述の磐田市のほか旧袋井市と旧浅羽町が合併し現在袋井市となっている。

前号では山梨の西楽寺を中心とした真言密教寺院の教線について指摘したが、今回の調査では遠江国府が関係し古代からの山林寺院である岩室廃寺が立地する敷地川流域の寺院や中世墓の石塔群が新たに注目された。岩室廃寺では主要伽藍のうち本堂となる観音堂背後より大治元年(1126) 銘の経筒が出土したことから、この経塚の築造が契機となって中世墓の造営が始まったことが判明した(松井一明2005 a)。また、経塚の銘文中に目代の人名が見えることから、遠江国府に仕えた上級役人が関係し築造された経塚であったことも判明した。近年の発掘調査で観音堂裏の中世墓以外でも寺域南部に展開する南山墓地群がかなり広範囲に存在することが明らかとなったので、中世においても国府とのつながりは強く、遠江屈指の中世山岳寺院であったと考えられる。岩室廃寺が位置する丘陵下の敷地川上流域では、今回の調査で永安寺や蔵平中世墓、龍雲禅寺、建福寺にて古式石塔が確認できた。これらの寺院(前身寺院を含む)が中世段階の有力寺院で、おそらく岩室廃寺を中心とした宗教ネットワークを形成し、それは密教系寺院の宗教ネットワークだったと考えられる。永安寺の石塔は野辺氏供養塔の伝承があり、戦国期の在地領主との関係も伺うことができる。龍雲禅寺の石塔は野辺氏供養塔の伝承があり、戦国期の在地領主との関係も伺うことができる。龍雲禅寺の石塔は聞取調査によると寺院の南側の丘陵地斜面より出土した後現在の位置に移したもので、別地点の中世墓に伴う石塔であることが判明している。

また、遠江中部でもう一つの密教系寺院の大きな核として法多山が今回新たに注目された。法 多山は現在でも高野山の別格本山であり、中世段階においても多数の坊を従えた真言密教系の大 規模な山岳寺院であったことが知られている。本堂南西斜面に存在していた中世墓に多数の石塔 が造立されていたらしく、鐘つき堂の工事の際に多数の石塔が出土した。その中に複数の花崗岩 製石塔が存在し、高野山周辺部に分布する噛合式五輪塔も含まれ、石塔から中世段階における法 多山と高野山との深い関係がクローズアップされた。ところが、今回の調査で岩室廃寺と同様に 遠江国府と関係の深い古代からの山林寺院である真言密教系の古刹である油山寺では、戦国期の 開山塔が確認できたにすぎず小型石塔も全く存在しないことも明らかとなった。

街道沿いの有力寺院に見られる石塔群としては、森町と袋井宿を結ぶ森街道に関係した観正寺 跡を始めとし、廃寺から移されたと思われる久能墓地、東別所墓地などに古式石塔の部材が確認 できた。さらに、東海道に関係した寺院として見付宿東側の玄関口にあたる大日堂や篠原中世墓、 袋井と掛川宿間の原川町に関係した正福寺跡や永源寺跡の石塔群で古式石塔が確認できた。

遠江西部ではあまり明確ではなかったが、遠江中部においては国人領主が関係した有力寺院に 石塔が見い出される例が確認できた。旧浅羽町(袋井市)の円明寺の隣地には浅羽氏館跡が推定 されている。同様に袋井市海蔵寺は遠江今川氏の菩提寺、磐田市向笠氏墓塔は向笠氏の菩提寺に 関係したもの、袋井市妙日寺の貫名氏供養塔はもとは上石野を領した貫名氏の菩提寺にあったも のが移されたと伝えられている。

前号で報告できた山梨地域の真言密教の古刹である西楽寺の古式石塔の付近から、中世前期の 僧侶に関係した中世墓が発見され、寺院内に造墓された中世墓に後世供養塔が造塔された可能性

(2) 78

遠江中・東部地域の中世石塔の出現と展開

-静岡県下における中世石塔の研究2-

松井一明 木村弘之 溝口彰啓

1. はじめに

遠江中世石塔研究会では、平成15年より遠江・駿河地域の中世石塔の実測調査を継続的に行ってきている。前稿では天竜川以西の遠江西部を中心として、中部地域の一部の古式石塔の資料化を行い一定の成果をあげることができた。とくに遠江西部での安山岩製石塔の分布は、東海道の宿や海浜部の湊に関係した有力寺院、遠江の政治権力の中枢である国府に集中する傾向のあること、分献上知られている池田荘の墓地の復元にも貢献することができた。よって、出現期の石塔のもつ性格は単に供養塔としての性格だけでなく、政治・宗教的な権力が集中する場の復元や、有力な寺社勢力を復元することにより、これらの勢力による物資流通の広域ネットワーク構造を知るうえでも有効な歴史資料であることを提示できた(松井・木村・太田2005)。

本稿では、前回報告分以外の遠江中部と東部の出現期の石塔について紹介するが、現在進めている牧之原の島田市域分については駿河地域に含め次回の報告とする。また、旧菊川町と旧相良町分は桃崎祐輔氏の調査(桃崎祐輔2000・2005)、旧浜岡町分と長福寺宝篋印塔は本間岳人の調査(本間岳人1998・2005)による成果で示された図を引用し、現地の資料を再調査をした後に加筆したものを再トレースして使用することができた。これら先行調査に感謝したい。

遠江における出現期石塔(古式石塔)の時期は鎌倉~室町期を対象とし、石材は外来系の美濃ないし畿内産と考えられる花崗岩、伊豆東海岸北部~箱根産の安山岩、焼津産の浜当目の当目石(緑色凝灰岩)や高草山周辺部に産すると想定される褐色凝灰岩、産地不明の砂岩製品に分けられる。地元の石材は今のところ15世紀後葉以降爆発的に生産される戦国期の小型石塔群(新式石塔)に係わる森町や掛川市日坂、菊川上流~金谷周辺部で採集できる砂岩製品で、出現期に遡る地元砂岩製品は小数例を除いて確認できていない。

安山岩製品は、所謂硬質の輝石安山岩で肉眼では3種類に分類できる。すなわち安山岩A=白灰色、灰色ないし黒灰色の色調で白斑の結晶のみを含むもの。安山岩B=白灰色、灰色ないし黒灰色の色調で白斑だけでなく黒斑の結晶も含むもの。安山岩C=小豆色の色調で白斑だけでなく黒斑の結晶も含むものに分類した。凝灰岩製石塔はすでに安間岳人氏により数種類に細分されているが(本間岳人2006)、今回の実測作業でこの細分案を採用すると個人の認識差により混乱した判定結果が得られたため、甚だ大雑把ではあるが概ね3者の認識が一致した緑色の色調を示し白色の粒子をほとんど含まない石材を緑色凝灰岩、淡緑色~褐色の色調で白色の粒子を顕著に含む石材を褐色凝灰岩とした2種類に細別した。花崗岩のうち結晶の粒子の細かなものについては、製作年代が戦国期に降る岡崎産花崗岩の可能性が高いため除外し、出現期に該当しそうな結晶が大きな畿内産花崗岩に類似する石塔のみを取り上げた。地元産砂岩製品のうち江戸期に該当する紀年銘資料については、地元の石塔の製作年代の検討には重要な資料であると予測され、掛川市常現寺石塔のように石工名の見られる例もあるためあえて今回掲載した。

なお、静岡県では平成17年度までに進められた市町村合併により行政区画が大きく変わり、町や村が合併し新たな市名に変更される行政区が多数生じている。旧稿では合併前であり旧市町村名を使って記述しているため、本稿でも旧市町村名を採用し記述した。たとえば、新磐田市の場合は磐田市のほか、豊岡村、豊田町、竜洋町、福田町の1市3町1村の合併による市のため、文中では旧豊岡村と表現することとした。今回提示できた石塔の実測調査は、石塔が所在する各教

79 (1)

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規定

1. 投稿を受け付ける原稿は次のものです。

各加盟館園職員が日ごろ従事している職務(展示・調査研究・保存・教育普及・その他) に関する論文、報告、事例紹介

※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

上記の日本語原稿を、下記の仕様に則って提出して下さい。ワープロの場合は、フロッピー やMOなどのメディアと、印字原稿の両方を提出して下さい。

※万一の事故に備え、原稿提出の際は必ず手元に控えを残しておいて下さい。

2. 原稿の目安は次の通りです。

論文等 本文+注 400字詰換算 20~80枚 事例紹介等 本文+注 400字詰換算 10~20枚

文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数 (1ページ) A 4 版 40字×30行

写真原稿 (1ページの版面は縦200×横135mm)

カラー(巻頭図版) 掲載希望があればご相談下さい。

モノクロ すべて挿図として扱います。

- 1. カラー原稿には、図版目次用のデータを明記して下さい。
- 2. 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。
- 3. 挿図原稿のコピーに、その掲載希望範囲を赤線で示して下さい。
- 4. レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- 5. 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。
- 3. 写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、原則として執筆者に行なっていただきます。
- 4. 原稿は、郵便もしくは宅配便で、下記宛お送り下さい。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内

静岡県博物館協会事務局

TEL: 054-263-5857 FAX: 054-263-5742

原稿には、氏名・自宅住所及び所属機関所在地(それぞれ〒・TEL・FAX番号)・部署・ 役職を明記して下さい。

5. 執筆者には、30部を贈呈いたします。

平成十八年度研究紀要(第30号)の原稿を募集します。

寄稿希望の方は、協会事務局(静岡県立美術館学芸課・TEL054―263―5857)へご連絡ください。

ご寄稿お待ちしています。

1、申込締切 平成十八年十二月末

2、原稿締切 平成十九年一月末

3、発行予定 平成十九年三月末

```
発 行 所 静岡県博物館協会編集発行 静岡県博物館協会平成十八年三月三十一日発行
                        静岡市駿河区谷田33─2
東洋印刷株式会社
電話 〇五四―二六三―五七四二
```

静岡県博物館協会 研究紀要 第29号

印刷

所